岩波文庫

66—67

幸福者

武者小路実篤作

岩波書店

波岩

昭和二年七月一〇日　第一刷発行　幸福者
昭和一三年八月三〇日　第一二刷改版発行
昭和四三年一二月二〇日　第三九刷　発行

定価★★

作者　武者小路実篤

発行者　東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者　東京都新宿区市谷加賀町一丁目一二番地
高橋武夫

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本印刷・中田製本

岩波文庫

66—67

幸福者

武者小路実篤作

岩波書店

この書を岸田劉生兄に捧ぐ。

君の藝術に對する尊敬と、君のこの書にたいする理解に感謝して。

幸福者

一

自分はこゝに自分の師の一生を書けるだけ書いておかうと思ふ。自分はこの書が、誰かに見られるか見られないかそれは知らない。又かやうなことは書くべきものか、かくべからざるものか、それも知らない。師がいらつしたら、書くなとおつしやるかも知れない、書けとおつしやるかも知れないが、しかしともかく自分は書かないではゐられない。自分のやうなものがかいても始まらないかも知れない。又自分は井のなかの蛙で何にも知らない人間だから師のやうな方はこの世に澤山ゐるのかも知れない。そして師のおつしやつたことや行はれたことはさう後世に殘す程のものでないかも知れない。

しかしともかく自分は師によつて救はれたものだ。師があつて自分の一生があるのだ、こんな片田舍で自分が師のやうな方にお目にかゝれたことをどんなに自分は幸福に思つてゐるか知れない。ともかくこの世で師のありがた味を本當に知つてゐるのは自分達僅かだけだ。そして自分が此のことをかゝなければ誰も他にかく人はない。自分がかくことによつて師のありがた味を少し

でも他の人に知らすことが出來、そのことがその人の一生にとつて私の上に行はれたやうな變化を少しでも行ふことが出來ればその人はきつと私が師のことをかいたことをよろこんでくれるだらう。さう云ふ人が何處かにゐる。自分はそれを信じてこの筆をとる。

何からかき出していゝか自分にはわからない。自分は師の若い時のことは少しも知らない。師は若い時の話をされるのをよろこばない。

ある人の話だと若い時に師は女のことでしくじりをして、それから家に居られなくなつてとび出して、あゝ云ふ生活を始められたのだと云ふ。どうしくじられたのかそれは知らない、ともかく師は女を恐れてゐられたことは事實だ。師はある時こんなことを云はれた。「女を愛するならば本當に愛しなければいけない。自分の運命と女の運命を傷つけるのを恐れなければいけない」則ちその女と夫婦になれることを本當に知るまでは女の心を動かすやうなことをしてはいけない。自分は女を恐れるのは、自分と女の運命も傷つけることを恐れるのだ。それ以上に又神の敎をきずつけるのを恐れるのだ。それから又師はある時私にかう云つた。

それは私が今の妻と結婚しようと思ふことを師にうちあけた時だ。師はよろこんでかう云はれた。「それはお目出たう。私もそれをのぞんでゐた、結婚は早すぎてもいけない、おそすぎても

いけない、無理が一番いけない、自然がいゝ。結婚したがるのもいけない、さけるのもいけない。來る時が來たら喜んでそれを迎へるがいゝ、戀はながくはつゞかない。それは人生には他にもつと大事な務があるからだ、女のことには一日も早く卒業するがいゝ、だがよろこびは味はへるだけ充分に味はふがいゝ。だがそれも無理してはいけない、與へられたもので感謝しなければいけない」

自分はその時、かう云つた。「先生は結婚なさつたことがおありになるのですか」

「ない。結婚したいと思つた時はあるが、私はうつかりしてゐる內に、相手は他にかたづいてしまつた」そして師は大きな聲を出して笑はれた。

「結婚するものも仕合だし、しないものも仕合だ、どつちにも人間のよろこびはある。馬鹿なものは獨身の間は結婚した時のよろこびを空想し、結婚すると獨身の時のよろこびを空想する。しかしそれは馬鹿だ、水を見た時は水の美しさを感じればいゝ、花の美しさを見た時はその美しさ許りに氣をとられるのが本當の人間だ、どつちでもいゝ、どつちにも美があり、よろこびがある。春もいゝが冬もいゝ、冬もいゝが春もいゝ。どつちもいゝ、冬は冬をたのしみ、春は春をたのしむ。かはりがはりに來れば、又それをたのしめばいゝ。自分は獨身のことを考へると獨身も

よく、結婚すれば結婚も亦いゝ、自然に任せておく、無理してはたに迷惑をかける程のものではない。お前が結婚すればそれが嬉しい。お前が結婚しなければそれもうれしい。その爲に誰をも不幸にしないですめばなほうれしい」

自分はその時、自分の妻を戀してゐる男のことを思ひ出した、自分はその男を同情することも愛することも出來なかつた。そして反つてその男を淋しくすることにある快感を感じてゐた。自分はそのことを白狀した。師は一寸いやな顏をされたが、すぐ「それも仕方があるまい。その男がそれから墮落するとも、それはお前のせゐではない。それでその男が墮落せずに更によくなつたら、そのことは反つてその男にとつて幸になる。さうなればなほよろこびだが」

「結婚すると人間は駄目になるものでせうか」

「そんなことはない、それは失戀すると人間が駄目になると云ふのと同じ程度の話だ」

自分は餘計なことをかきすぎた。ともかく師は常に自分に與へられた運命によろこびを感じて生きて居られた。

師は他人にたいして多きをのぞまれなかつた、他人がいゝことをすることをよろこばれた、他人の幸福をよろこばれた、それが自分には貴く思へた。そして自分がやゝもすると他人の幸福を

猜んだり、呪つたりする傾きのあるのを情けなく思つた。自分は、師にそのことを云つた。

「それは仕方がない、若い内は自分もさうだつた。この頃は誰より自分が幸福だと云ふことを本當に知つた。だから他人のことは羨やましくは思はない。自分が他人をしのがうと云ふ氣がある間、自分が他人に負けるのをいやがる間、さう云ふ根性はなくならない。しかし氣にするな。又さう氣にも本當はしてゐないだらうが、そしてもつと大きい心を持つやうにする方がいゝ」

師は滅多に怒らない方だつた。すべて許す方だつた。

「俺は他人をせめることは出來ない、自分の内にはもつと恐ろしいものがあることを反省しないではゐられないから。自分の心のけがれを思ふのは情けないが、他人の罪に寛大になれるのはうれしい。しかしその爲に罪を罪のまゝ許すやうになるのは恐ろしい、自分のわるいことを本當に知つてゐる罪人は自分を正しいと常に思ひ込んで他人を責める人間よりはずつと幸福だ、その人は神の愛を知ることが出來るから、そしてありがたいとか勿體ないとか云ふことを本當に知ることが出來るから。この世に一番救はれないものは神にたいして不平をもつ奴だ」

師は又こんなことを云はれた。

「千ベン惡の種をまいて、惡の芽が出ないことを本當にありがたがるものは、千ベン善の種を

まいて、その芽が出ないでも神を呪はない。更に善の種をまかうとする。そしてその芽のいつか出ることを信じて、それを信じることが出來ることによろこびを感じる。そして惡の種をまくことの恐ろしさをます〳〵感じてくる。さう云ふ人間は救はれる。人間はある時には神になる。しかしその次ぎの瞬間には最も下等な人間にもなれるものだ。それと同じく最も下等な人間になり切つたことを本當に自覺した瞬間に人間は神にもなれるのだ。ある人を善人、ある人を惡人ときめるな」

自分はその時師にかう云つた。

「しかしこの世には、神になれない人間もあるでせう。私にはさう云ふ人の方が多すぎるやうに思へます」

「さう云ふ人はないとは云へない、しかしあるとも云へない。さう云ふことは自分達人間には云へない。本當に強い眞心をもつた人の愛の光りに照らされて見たら、存外に神になれない人と私達が思ひこんでゐる人間が神にならないとも限らない。それを知つてゐるものがあれば神だけだ。人間にはわからない」

師は小さい小屋に住んでゐられた。その家はある人が師に捧げたのだ。飯の世話は自分達が當

番をきめて、うちでつくつた飯をはこんだ。自分の仲間は六七人で、かはり番に飯をはこんだ。師は初めは自分で自炊してゐられた。そして他人の耕作を手つだつたり、或人からもらつた僅かの畑を自分でたがやしたりしてゐられた。自分達が飯を運ぶやうになつてからは師は自分の土地を近處の一番貧しいものに與へてしまはれた。時々手つだはれることはあつたが、一人で方々歩きまはられることが多くなつた。師はその時何か大事なことを考へてゐられるやうだつた。師が口をついて出る言葉は多く、瞑想から得られた。本も時々はよまれるやうだつたが、非常な學者と云ふわけにはゆかなかつた。耶蘇や、釋迦や、孔子やソクラテスを尊敬されてゐた。しかし本をよむよりは考へる方を好まれたらしかつた。學者はあまりすかれなかつた。自分が生かすことの出來ない程多くを知りすぎるのは師には害があつて益がないやうに思はれた。

師はどんな學者が來ても恐れずに、自分の思ふことをしやべられた。「笑はれるのを恐れるよりは心にないことを云ふのを恐れなければいけない」

師はそれを實行された。師は心にないことは一ことも云はれなかつた。むしろ師の心には云ひたいことが多すぎた。師の内にある貴い言葉は、出る機會を得ずに、沈默の内に葬られた言葉がどんなに多いだらう。又よしその言葉が機會を得てあふれ出たにしろ、その言葉の價値をそのま

ま受け入れたことは殆んどないであらう。自分はそれをすまなく思つてゐる。

師はかう云はれたことがある。

「福音書は耶蘇のかゝれたものではない。たゞ其處に耶蘇の心からでなければあふれ出ない言葉や行ひが處々に片鱗を見せてゐる。それが實に恐ろしい。その深さとその權威にふれると心が自づと淸まつてくる。その前に跪づきたくなる。全然とは同感の出來ない言葉があつても、その深さには頭がさがる。その力は何處からくるか。其處が面白い處だ。俺は來世も復活も奇蹟も信じられなくも、耶蘇の心の深さには實に心の底を動かされる。その力は何處からくるか。その力に自分は自分の一生をまかせたい。それだけが自分の一生をさゝへてゐる心棒だ。それがなければ世の宗教家程くだらぬものはない」

師はその力を信じてゐられた。或日のことだつた。師は私かに自己の心のうちだけで盲目の目を信仰の力でなほさうとされた。そしてそれが失敗した時に、師は泣かれた。「自分は信仰の力で盲目がなほり得ると云ふことをまだ信じ切つてゐないのだ。それが信じ切れたら、盲目の目もなほらないとは思はない。だが自分は正直に云ふと耶蘇が盲目の目をなほしたと云ふことも信じられないのだ」

「それならなぜなほさうとされたのです」

「あまり可哀さうだつたから。父と子が五年の間わかれてゐた、子が五年ぶりで歸つて來た、その五年の間に父は盲目になつた。父は自分の子供の顏を見たいのをじつとこらへて涙ぐんでゐた。子は自分の顏や姿を父に見せられないのをたまらながつた。俺はそれを見てゐたらつい父の目をなほしたくなつたのだ。だが俺にはその力がないことを知りすぎてゐた。しかし心でその目のなほるのを神にいのらないわけにはゆかなかつた。そして心で目をひらけと云つて見た。その時自分の權威のないことを實に露骨に感じた。自分を恥ぢ知らずだと思つた。そしてつい泣いた。二人に同情して泣いたのではない。自分の恥ぢ知らずなので泣いた。汝信仰うすき者よ。自分で自分にさう云つて、歸りに山の中で跪いて祈つた」

しかし師のこの祈が神にきかれたと自分は云ひたい。しかしさう云ひ切るのを師は恐れてゐられた。彼の父の目はその後まもなく見えるやうになつたのだから。醫者は不思議がつた。しかしまゝさう云ふ運のいゝ方もあるものです。と云つた。

自分は師にそのことを云つた時、師は

「その話はやめてくれ。俺にはそれは信じられない」

しかし師は祈はきかれるものだと言はれた。「しかしそのきかれ方は人智ではわからない方法できかれるので、見やうによつてはきかれたとも思へ、きかれなかつたやうにも思へる。自分にはまだ信じ切れないが、本當に祈れる人間には祈はきかれるものだと思ふ。本當に祈れるには私心がすこしもあつてはならない。神の御心を心からあがめることが出來なければならない。この祈がきかれなかつたら大へんだと思ふ間はきかれない。大へんだと云ふことを忘れてしまはなければ。しかしかう云ふことははつ切り云ふのがまだ自分には恐ろしい。ともかく心を清くして御心のまゝに自分をおつかひ下さい。さう云ふ氣持になり切れたら、既にその事が祈りのきかれたことになるのだ」

師はよく自分のことを幸福すぎると云はれた。他人にこの幸福をわかちたいと云はれた。そして實際師にせつした人はその幸福のわけまいをうけとる。自分は師のことを思ふと涙ぐむ。心が清まる。そして清い幸福を心の底から感じる。其處には邪念がない、不淨がない、不淨と邪念がいかに人間の心を動搖させ不快にさせるかは、清いよろこびを知つたものだけが知つてゐる。すべてのこの世の惡は其處に生ずる。

それならばなぜ人は惡を愛するか。清い幸福を知るものはなぜ立派に惡にうちかてないか。

自分は或時美しい女が師をたづねて來たあとで師がかう云はれたことを聞いた。

「自分は罪の恐ろしさを本當に知らない。自分は今日の女は俺の自由になることを知つてゐたら、そして女が自由にされたあとで、そのことを絶對に祕密にすることを知つてゐたら、そして自分はその女を一度自由にしても二度と自由にする氣が起らないですむことがわかつたら、そしてそのことがその女に道をとくに邪魔にならないことがわかつたら、そしてそのことが自分の心を疚しくしないことが出來ることを知つてゐたら、そして女をもてあそびたい心はやがてすぎさるものと云ふことを知らなかつたら、俺はあの女をたゞはかへさなかつた。しかし俺は女と三時間さし向ひに二人きりで話してその女をもてあそばうとしなかつたのは、その反對のことをのこらず知つてゐたからだ。あの女は淫賣婦であつた。今も淫賣婦である。自分はもう少しで女の前に跪かうかと思つた。そしてその女の前に罪を犯して知らん顏をしようかと思つた。そのことは出來ないことでない。現在俺は今迄に正直な處、さう云ふことを絶對にして來なかつたとは云へない。俺はその罪をくり返すことの誘惑を可なりうけた。自分はそのことだけの罪と云ふことを存外強くは知らない男だ。俺は女の自然につくられた美を拜みたい氣の存外強い男だ。しかし俺はその時思つた。もしそのことをしたら、俺はその女とはもう靈の話は出來ないと思つた。そし

で萬一その女が俺にもてあそばれたことを吹聽したら、俺は君達になんとあやまつていゝかわからない氣がした。それは大したことではありませんと君達は云ふか。もしさう云ふにしても君達に隨分いやな感じを與へるだらう。君達はまだそれでもいゝ、しかしその時俺は僞善者になる、百日の說教屁一つと云ふ諺があるがそれよりは遙かに罪が深かく、きゝめがつよい、俺のつかへてゐる眞理の威光に關する。そして恥かしい話、俺の威權にも關する。女が祕密を守つてくれたら、俺は圖々しくすまして、聖人らしい道をとくだらう。しかしその時、俺はその女のことを思ふ度に、俺は不淨な考へを起すだらう。そしてその女には淸い話が出來にくくなるだらう。女が俺をたづねてくれた志を無にするだらう。俺は一寸その時辛抱すればいゝことを知つてゐた。それで俺は罪を犯さずにすんだ。女はそのことをよろこんだにちがひない。俺も今によろこぶにちがひない」

自分はそれを聞いた時いやな氣がした。師はもつとそんなことに超越してゐられると許り思つてゐたから。師はそれを氣づかれ、かう云はれた。

「俺の露骨な話は君を不快にしたらう。しかし君も思ひあたる時があるだらう」

そして自分はその後まもなく思ひあたつた。しかしそのことはこゝにかく必要はない。

その後師の處にはよくその女がたづねて行つた。師はその女の來るのをよろこばれてゐるらしかつた。しかし或日その女の情夫だと自稱した男が師の處にあばれこんだ。師は別に腹もたてられなければ、おどろかれもしなかつた。そして自分がその女とさう云ふ關係をつけなかつたことをよろこばれた。女は師のことを神のやうな方だと云つた。妾はあんな方にお目にかゝつたことはありませんと云つた。師がその女を弄ばれなかつたことは師にとつては大したことではなかつたかも知れない。しかし師程覺つてゐないその女の一生にとつては大した働きをした。

師はおかげで女のことには卒業が出來た。自分はもう女をおそれないでもすむと云はれた。しかしその後も積極的には女の家には出かけられなかつた。

「自分の一生を平和にする爲には心を靜かにすることが必要だ。愛するのも怒るのもたまにはいゝ、しかしそれは淺薄ではいけない。利己心や小さい根性から生れるのは皆自分の心の平和を亂し、心をいやしくし、自分の生きてゐる世界をいやしくする。心を淸くもつのは自分の生きてゐる世界を淸くし、平和のよろこびを心の底から味はふことが出來る」

或時だつた、或人が師をたづねて、この頃の人間はずるくつて困ると云つた。すると師は

「さうですかね、私はまだずるい人にあつたことはない。ずるい人に逢ひたくなかつたら、ず

るい人をよびよせるものを自分から遠のけるより仕方がありません。私の處にはずるい人は用がない。だから私はずるい人に逢つたことはない。話ではきゝますが、私の處にくる人は皆いゝ人許りです。そしてその人がとくにいゝ心になつてくれる時だけ私と話が出來る、いゝ心になりたい人だけ私の處に話ししにくる。私は仕合ものです。あなたもさうなつてはどうですか」

「ありがたう。だが私はずるい人が來てくれる身分の方を愛しますね」その人は笑ひながらさう云つた。その笑ひは私には卑しく見えた。或時師は又こんなことを云はれた。

「皆身から出たさびだ。さびが出るのは身から許りではない。又外界ばかりでもない。罪は兩方にある。さびを出すのがいやだつたら自分を純金にするか、たゞず自分をみがいてゐなければいけない。自分を純金にすることが出來ないくせに、自分をみがきもせずにさびが出るのに不平を起すのは己を知らないものだ。殊に自分のことを棚にあげて自分のさびを相手の罪ばかりにさせるのは蟲がいゝ」

或人が師をたづねて、

「この世の中はどうしたら幸福になるのか」と聞いた。師は云つた。

「あなたはそれを本當に知りたいのか。私も本當にそれを知りたい。ともかく私達は不幸な種

を自分でまきすぎてゐる。それはたしかによくない」

「不幸な種をまきすぎてゐる？」

「さうです。たとへば自分の身體について云つても、本當に養生をしてゐる人は一人もないでせう。心を常に清くしてゐる人もないでせう。人と人とのくわんけいでも圓滿にやつて行つてゐる人はないでせう。さう云ふ點をよく考へると人間が全體病氣をしてないのが不思議になり、喧嘩しないのが不思議な位です。實際いつかそれがかさなつて壽命が來ない前に死んだり、革命が起つたりするのです。それには境遇のせゐも、社會の制度の不正もあります。しかしそれ以上に個人の生活がまだ完全の域に遠く、禍の種をまきすぎてゐるからです。私なんか禍の種をまかないことを本職にしてゐる人間ですが、それでさへ心を不淨にしたり、不節制したり、他人に過度の要求して、自己に寛大すぎたりします。感謝すべき時に不平をもつたりします。普通の人に至つてはその私がひや〳〵するやうなこと許りしてゐます。それで世の中が幸福になるわけにはゆきません。我々は幸福にしたければ心を清くし、他人を愛し、利己心をのさばらないやうにし、お互に禮儀を守り、不正なことから自己を出來るだけ遠ざけ、自己に接する人に、喜びと感謝と幸福を送れるだけ送るやうにしなければいけません、それが出來ない時は自己をつゝまなければ

なりません」

師は實際その言葉をそのまゝ實行してゐられた。

「今の世には自分の許されただけの範圍を生かせるだけ生かさうと云ふものが少ない。すぐ自分に許されてない範圍にまでのさばり出たがり、其處までのさばれないと云つて不平を起す。自分に許された範圍で自分を生かせるだけ生かせたら、存外自分を生かすことが出來るのだがそれを知らない。そして自分に許された範圍で出來るだけ自分を立派に生かしたものは必ず自分の求める世界を必要なだけ獲得してゆけるものだと云ふことを信仰しない。それは自分の人格を立派にしようとは思はずに富貴をのぞむからだ。しかし同等に一方人間に與へられた才能を十分に發揮出來、又身體の養生を十分に子供の時から出來るやうな境遇にすべての人をおくやうにしたいと云ふ心がけをもたえずもつことは必要だ。この二つは決して仲のわるい兄弟ではない、むしろお互に助けあはなければならない兄弟だ」

師は自分達に食はしてもらふやうになつてから一文も金をもつてゐられなかつた。そして食物は贅澤なものを持つてゆくとそれには箸をつけられなかつた。どんな人間でも乞食でも師のやうに生活しようと思へば生活出來る。それを師は理想にされた。他人の幸福を眞に願ふことが出來

るものは、今の世でも食ふことに困らずに生きてゆける、之が師の信念であり、又生活であつた。實際師を本當に知つたものは、師のためにはよろこんで飯をさゝげた。自分達六七人の他に、五六十人の人は師に自分でつくつたものを食べて戴くことによろこびを感じ、それを反つてありがたがつた。師は勿體ない、勿體ないとたえず云つてゐられた。自分には君達にそんな親切にされるわけはない、しかしありがたいと思つてゐる。師はそのことを思ふとすぐ涙ぐまれた。

「自分は君達と一緒に働きたい、皆で一緒に働けたらどんなにうれしいだらう」と師は云はれた。しかし自分は君達のおかげで一層生きてゐることがありがたく、愼み深い氣持になれることをうれしく思ふと云はれた。

しかし師にも怒られる時はあつた。蟲のいゝ人間を師は嫌はれた。「蟲のいゝ人間には感謝はわからない、何處にでも感謝をほり出すかはりに、不平をほり出す。花咲爺の内に出る慾ばり爺のやうなものだ、人間に與へられた寶物をほりだすかはりに、人間に與へられた糞をほり出す。そして不平をおこす。さう云ふ人間は天罰をうけてゐるものだ」

ある怠けものが師に不平を云つた。「ある人はのらくらして贅澤をしてゐるのに、自分達は働かなければ食つてゆけない。それはあきらかに不公平だ」

師はその人に答へられた。

「それは不公平だ、しかし本當に平和を愛するものは人間が勞働しなければ食つてゆけないことを知るであらう。他人の不合理な贅澤を味はふのを羨やましがるよりは自分が不合理な贅澤せずにすめることによろこびを感じるはずだ。その方がその人の良心を平和にするから。君はさう苦しい境遇にゐる人間ではない。君は不合理な贅澤をしたい根性が自分にあることを知つて、それを自分でたきつけてゐる。君のやうな人間がゐるから世の中には不合理な贅澤がなくならず、不合理な贅澤が傲りをもつてこの世に存在するのだ。その不合理がいやならば、まづ第一に自己の内の贅澤心にうちかたなければならない。この根性をもつことが自分にとつて不名譽なことを知らなければならない。世の中がよくなればなる程、人間は先づ働かなければならなくなる。正しい人間は働かないで贅澤をしようとは思はないものだ。この世の不合理をよろこぶことは誰にもゆるされてゐない。不合理をなくせるだけなくさうとする。さう云ふ人間にだけ私は同情がもてるのです。この世の不合理でとくするものは、この世のより正しくなることを心の何處かで恐れなければならない。君はそんな人間になるのをよろこびはしないでせう、私達は正しき世界がいつ來てもいゝやうに用意して、人類の幸福を心からよろこびたいものと思つてゐます」

自分はとりとめなく師の言葉をかきすぎたかも知れない。之から自分は師の傳記について自分の知つてゐることをかきたく思つてゐる。さうすれば師の人となりや、人生觀も自づとはつきりするだらうと思ふ。

二

その後自分は師に就ていろ〳〵の人から聞けるだけ聞いた。新しい事實も少しは知ることが出來た。師の父に就ては誰も知るものはない。師は父なし子であつた。父はある有名な僧侶だと云ふ噂もあり、母の家に出入りする商人だと云ふ噂もあつた。母はそれに就て一ことも云はなかつた。そして母は一生、結婚をせずに師を大事に育てられた。しかし師の母が師に云はれた言葉によつて自分は師の父を僧侶だと云ふことは明らかなる事實だと思つてゐる。但しその僧侶は有名な僧侶でなく、無名に終つた、しかしたしかに面白い處のあつた僧侶ではないかと思ふ。自分はその破戒僧であることを認める。しかし人はよかつたのだと思つてゐる。少くも彼の父だ。何處かにいゝ處があつたにちがひない。

師の母は師が子供の時、蛇を殺されたのを見て、「お前のお父さんは何よりも殺生なことがお

嫌ひだつた」と云つた。師は父に就てなほきゝたかつた。しかしどうしても聞けなかつた。それから師は殺生なことは一切しないやうにされた。

又或時師の母は師に、

「お前は妾に似ないでお父さんに似てゐる。立派な人間にならないといけませんよ」と云つた。

又或時師の母は師に、

「お前のお父さんはそれは偉い方だつた。しかし女のことでしくじられた。お前も女のことだけは用心しないといけませんよ」と云つた。

之等の言葉は不用意に云はれた。しかし師はその言葉を忘れることは出來なかつた。母はたえず父のことを思つてゐた。しかしそれを誰にも口外することは出來なかつた。たゞわが子を見て、ふと何か心配のある時、前後の考もなく、之等の言葉を云はれたものと見える。そして云はれたあとでびつくりされた。話はすぐ不自然に他にとんだ。

聞く處によると、師の母は淋しい、慎み深い、辛抱の強い方だつた。どうしてこんな人が父なし兒を生んだのであらう。しかし師の母として如何にもふさはしい方だつた。自分は師は寧ろ母親に非常に似てゐられたやうに思ふ。しかし父親が知れないのでさう思ふのかも知れない。

師はある時、久米仙人に就てかう云はれたことがある。「久米仙人は女を見て天からおちた。それは本當だ。しかしそれで死んだのではない。皆に笑はれ、馬鹿にされ、神通力にも一時は見はなされたが、その後又神通力を得て今度は本當に誰にも氣がつかれずに、貧しい風して天へのぼつたのだ。どうも自分にはさう思へる」

師がかう云はれた時師の父のことを思はれたのであらう。

師の母はなぜ結婚されなかつたのだらう。それは師を育てたい許りではなく、師の父が又いつか來てくれるのを待つてゐられたからであらう。他に結婚の話があつたが、見向きもされなかつた。しかし師の父は師の母の處には一度も歸つて來なかつた。そしてその人の生死も師の母は知らなかつた。たゞ彼の子なる師を大事にされた。

母の家は豪農だつた。母の不行儀を一般に知られるのを恐れて可なりはなれた片田舍に小さい一軒の家をたてて其處に住ませた。二十八迄其處にゐられた。師は其處で生れ、其處で大きくなられた。母の家からは僅かの生活費が送られた。母は勘當のやうな目にあつてゐて、母をたづねてくれる人は殆どなかつた。母は外出を嫌つて家に許りゐた。そして師を育てるのを唯一の仕事にされた。

二人は淋しい母と子であつた。母は子のことを思ひ、子は母のことを思つた。晩年に至る迄母のことを話す時に師はすぐに涙ぐまれた。

師の母は機を織つたり、小さい畑をつくつたりした。蠶も少し養つた。師は子供の時からそれを手つだつた。師の子供の時は別に他の子供に優つてゐるやうには見えなかつた。たゞ獨りぼつちでゐることが好きで、曲つたことは何より嫌ひで、嘘をつくことを心の底から嫌つた。この兒は正直すぎると母に云はれた程だつた。

頭は可なりよかつた。そして常に何か考へてゐた。强情ばりで癇持ちだつたが、普通の時は優しすぎた。氣もよわかつた。たゞいざとなると死んでも折れないと云ふ意氣を示した。本をよむ事は可成りすきだつた。そして十位の時から世界中で一番偉い人間にならうと云ふ氣を持つてゐられた。朝早く起きて海邊に出て、人が一人も來ない所へ行つて海へ向つて演說されたこともよくあつた。

母はひそかに師のあとをついて行かれた。師はそれを知らずに巖の上に立つてかう云つた。

「浪よきけ、海よきけ、こゝに立つ俺こそはその世を救ふ爲めにこの世につかはされたものだ。この俺の未來を心して見よ。俺の云ふことのうそでないことをやがて知る時が來るであらう」

母はそれを聞いて恐ろしい氣がした。しかし聞かないふりをしてゐた。その時師は十四であつた。この自信は師の一生をつらぬいた。師はそれを露骨に見せはしなかつたが。母は師によつて救はれなかつたかも知れない。だが自分達は救はれた。

母と子は互にいたはりあつた。水をくむにも、火をおこすにもお互に自分でしようとした。師は早くねて早く起きられた。師は心を清淨にすることに骨折られた。自分の私生兒と云ふことは師の心をいためたが、自分の誕生の不可思議は、知らない父にたいする不思議な信仰は師の心をけがれから救ふ力をもつてゐた。

「父の淫慾は自分のうちに巣くつても、自分はそれに打ちやぶられはしない。母のその後の清淨な生活は自分の一生を清淨にさゝないではおかない力がある。私が生れたことを人々に祝福させる。それは父と母の罪を淨める唯一の道である」

師の日記の斷片にそんな文句があつた。

「父よ。あなたは何處にゐる。生きてゐて下さい。あなたには私と母とがあなたのことを思つてゐることをお知りになる時があるでせう。そして罪から生れたものがあなたの心の痛みを綺麗にぬぐひ去るでせう。あなたのしたしくじりは神の目からはしくじりではなかつた。私が生れた

と云ふことが、それをよきことにかへて見せます。どうか母を愛して下さい。そして母の生きてゐる内に一度歸つて來て下さい。母はあなたをうらまずに待つてゐます。そして私を生んだことをよろこんでゐてくれます。母の一生をきずつけた、あなたと私は母にとつて尊いものなのです。このことは私には勿體ない。どうか私は私を生んだことを母のよろこびであり、誇りであるやうにしたく思つてゐます。さうしてあなたにとつても、父よ」

「父は天よりおちたならば、子は地より天にのぼらねばならぬ。父と母を荷つて」

「いかに母の愛は聖き哉。母は淸すぎた。父もそれに敵しかね、罪もそれに敵しかねた。母を罪人と云ふものよ。私をつくつたことは罪か、罪ならば罪でいゝ。罪のうちから生れるものを見よ。お前達のあさ墓な心をもつてははかり知れぬ祕密のこの世にあることを知れ。德の內に蛆もわくが、罪の內に蓮の華もさく。ともかく自分は生れたことを人々によろこばれる人間になりたい。それが母の愛にたいする唯一の報恩だ」

「俺は淋しい。だが母はなほ淋しいであらう」

師は志をたてて勉强し、行ひをつゝしみ、身體をよくするやうに骨折られた。母も亦それをたすけた。

「お前が立派な人間になつてくれるのが私のたつた一つの望みなのだ。その爲には私はどんな苦勞も苦とは思はない。お前がいくら私の水仕事をたすけてくれても、勉強を怠つてくれたら、その方がどんなに私にとつてつらいかわからない。お前が勉強してくれ、身體を大事にしてくれ、そしてわるいことをしないでくれゝばそれが一番の孝行だ。私が可哀さうだと思ふなら立派な人間になつておくれ。そしてお前の母だと云ふことをよろこべるやうになつておくれ。お願ひだから」

母のこの言葉は子供なる師の眞心にふれ、ます〳〵決心をかためさした。

母は子供の性質をのみ込んでゐた。子供の生長慾と名譽心と本氣さと義俠心と憐みと恥を知る心とを巧みに刺戟して子供の邪道に入らず、正しき道を進んでゆくやうに骨折つた。そしてその骨折は更によき結果をもつて報いられた。

「お前が立派な人間にならなければ私は生きてゐない」

之が母の決心であつた。

師には意地惡と云ふ根性はないやうに見えた。師には別に友達らしい友達はなかつた。うちで母の仕事をたすける他は大抵一人で本をよんだり海岸や野山をあるいてゐた。そして自分を立派

な人間にしたいと思つた。立派な人間とはどんな人間か、本をよむことを知つた師は、社會的に有名になつたり、富貴な人間になることを望むことの賤しむべきことを知つた。それは空なことに思へた。もつと大事なことがある。則ち耶蘇や釋迦の道こそ一番本當の道と思へた。眞理の道、眞理をはなれない道、僥倖の助をかりない道、人間でありさへすれば、貧富の區別がなく、他人の助けにすがらずに到達出來る覺の道、信仰の道、さう云ふ道をのみ歩いてゆきたかつた。他のことはそれに比べて賤しいものの氣がした。

自分さへ本氣になればどうしてもゆける道、他人の御機嫌も、運命の御機嫌も見ずに眞の幸福に達せられる道、其處では內を顧みて疚しくなく、權威を自らの內に感ぜられる道、さう云ふ道をのみ歩かないと師にとつては不安でならなかつた。師には正しいと信ずる道を歩くより外に安心の出來る道はない。師はその道を擇んだ。そして人間にさう云ふ道の與へられてることを感謝し、その道が人間のゆかねばならない道であることを信じてゐられた。

この道より他に自分が人間に生れたことを心から喜べる道はない。他の道では眞の幸福が得られず、この道だけで幸福が得られる處に人間に生れた面白さがある。之をほかにしては人間は厭世的にならないわけにはゆかない。

之が師の十五六の時から最後までつらぬいた動かすことの出來ない信念だつた。時には動搖をまぬかれなかつたにしろ。

師が十四五の時、師のそばに美しい男の子がゐた。それは他の男の子と馬鹿な眞似してさわいでゐた。師もその仲間に入れようとした。師のうちにはかう囁くものが居た。

「お前は心のうちで皆と馬鹿な話をしたり、馬鹿な眞似をすることを望んでゐる。そしてお前は心では美しい男の子をけがしてゐる。或は誰よりもひどく。しかしお前は勇氣かないのでその仲間に入らずにゐる。それはお前があつさりした人間でないからだ。お前があたりまへの人よりなほ醜い心をもつて、無邪氣にはなれないからだ」

しかし師はさう云ふ無邪氣にはなれなかつた。そして人々が下等な話をする時、師はいやな顏をしないわけにはゆかなかつた。

「お前は心のなかで淸いのかい」

「さうではない。或は誰よりも穢れてゐるかも知れない。だがさう云ふ話を恥知らずにするものがあるとどうもいやな氣がするのだ」

美しい男の子はその後肺炎になつて死んだ。

「死なしたものは誰だ。自分は近づけなかつたのが反つて幸だつた」

「他人の死をお前は幸だと思つてゐるのか」

「ともかく自分がその原因にならなかつたことはよろこびだ。心で穢したものと行ひで穢したものとは同一ではない。心で穢さないものは更に美しいが」

ともかく師は自分が誘惑には抵抗力のよわいことを知つてゐた。だが誘惑を近づけない力を師は小さい時から持つてゐたらしい。師はそれを自覺されてはゐないが。

自分は師の性慾の歴史をかかうとは思はない。しかしその方で師は理想的に清かつたとは云へない。ある人は理想的に清かつたと云ふ。しかし一人の女性はそれを否定して師の祕密を自分にうちあけた。しかしそれはもつとあとの話である。

師の若い時のことを知つてゐる人は師に就いて別にかはつたことは云はない。

偏人だと云ふことと馬鹿正直と云ふことは誰も認めてゐる。無口で陰氣な少年だつたと云ふ人が多いが、一人議論好きで議論では誰にもまけたことがなかつたと云つた。その人の話だとその後大臣になつた某氏も議論では師にどうしても勝てず、師に一目おいてゐたさうだ。その人はかく云つたあと、師がもつと偉い人になるだらうと思つてゐたと話した。そして大臣になつた人は

活動的で積極的だつたが師は消極的で引こみ思案だからいけなかつたのだと云つた。その人の說だと師は友達がどん〳〵成功してゆくので益々ひがんで隱遁的になり村夫子の出來損ひになつてをさまつたのだと云つた。

しかし師は大臣になつた友達のことなぞは頭においてなかつた。「正しい生活をすればする程、多くの人に敬はれそして必然に大臣になるなら大臣になるのもわるくないだらう。だが恥を知るものには出來ないことをしたことを證明する大臣にはなりたくない」と師は云つたことがある。それは友達のことを頭において云はれたにしろ、少しも羨やむ氣のなかつたことはたしかだ。師は自己を誰よりも幸福な人間と思ひ込んでゐられた。たゞ自分に德がまだ足りないことを恥ぢてはゐられたが、それは師を益々感謝することを知る人間にした。自己には天寵がありすぎることを師は本當に知つてをられた。

師はいつから師になられたか、前に云つた通り十五六の時から師の精神的な傾向はあらはれてゐた。しかし本當に精神的の仕事をしようと思はれたのは二十をこえてからであらう。自分は不幸にしてそのことをくはしく知ることは出來ない。ともかく師は二十三四の時にはもうはつきりこの世をつらぬいてゐる精神の力を感じてゐて、それに自分を服從させて生きてゆかなければ本

當に生き甲斐を得られないことを感じてゐられた。それは何かあつたのであらうが、はつきりしたことはわからない。ともかく師は二十歳前後に一時的に懷疑に落ち入られた。人間は如何に生活すれば生き甲斐を本當に得られるかそれが二十三四の師にとつては唯一の問題であつた。その問題を解決せずに生きてゐられるには人間の一生はあまり空に見えた。「母の爲に生きてゐる、少くも母の爲に死なない」母が居なかつたら師は自殺をしたかも知れない。「あまりに淋しい」人生は無意義としか師には思へなかつた。夢の裡の死の恐怖は師の生れたことを呪つた。生れなかつたらよかつた。死の恐怖はそのことをまざ〳〵と師に知らせた。しかし目が覺めて何かしてゐる時はそのことを忘れた。しかし何かでふと自分の一生のことを思ふと無意味のやうに思へた。人間は自然にとつて蟻けら以上ではない。蟲けらの如くに生れ、蟲けらの如く殺されてゆく、それに人間は苦惱を云へた義理はない。しかしそれでは淋しすぎる。

しかし師は今更昔の聖人や賢人の傳記をよむ時は何か心にひゞいた。そしてそれ等の人がこの「人生の無意味」に打ち克たうとしてゐる處を改めて見た。そして師は今更にそれ等の人を知ることを感謝し、そして神聖なよろこびを感じないわけにはゆかなかつた。

之等の人は蟲けらではない。それ以上のものに支配されてゐる。神の如き人だ。彼等が生きて

ゐてくれたことは我々にとつてどんなによろこびか知れない。そしてその喜びは我々に生きてゆく力を與へる。人間にたいする希望をとりもどす、それは理窟でなくして事實だ。その事實を面のあたり感じられる生活をしないで、人生を呪ふのは僭越だ。そして人生を呪つてゐるものは實に又さう云ふ生活を自分で行ふ力のない人に限る。そしてさう云ふ生活をしてゐるものは、人生を呪つてはしない。そして神（自然）を讃美してゐる。師にとつてこの事實は涙ぐみたい程ありがたい事實であつた。

自分を本當に生かさう。聖賢の教へられるやうに自己を本當に生かさう。それから人生を悲觀するなら悲觀しよう。自分の生かしかたをまちがへておいて、人生を悲觀することは恥よう。師はさう云ふ自覺を二十三四の時に今迄よりもなほはつきり得られた。しかしそれを本當に生かすことが出來る迄にはなほ時を要した。

師が或る日往來を歩いてゐたら、一人の齡をとつた見すぼらしい僧侶にあつた。その僧侶は師の顏をじろ〳〵見た。師もその見すぼらしい老僧の顏を見た。

老僧は師にあいさつして、「何處へ行かれるのか」と聞いた。

「山へ行くのです」と師は答へた。

「何をなさりにゆくのです」

師は返詞に困つた。たゞ一人で考へたかつた。しかし何を考へるのか師は知らなかつた。眞理のことか、或は女のことか。兩方か。どつちにしろ答へることが出來なかつた。

老僧は師を見て云つた。

「あなたは偉い人間になるだらう。天の加護があなたにあるだらう。もし女のことでしくじらなければ、心に不淨なものを燃やなさいならば。私を御らん。私にもあなたのやうな時があつた。私は天の加護を得られる身分になりつゝあつた。私の行爲は人々のよろこびであつた。だが私の內には小惡魔が居た。人目につかない處ではその小惡魔を勝手に生かした。そして天の加護をその爲に失なふことにまるで氣がつかなかつた。いや、氣はついてゐた。しかしこの位はいゝだらう、この位はいゝだらうと思つてゐた。天は寬大である。だが自分は自分の內の天を窒息させたことを知らなかつた、あなたはそれを本當に知らなければいけない」

師は默つて聞いてゐた。

「餘計なことを云つたことを許して下さい。さあ山へ行つて考へたいことを考へていらつしやい」

老僧はさう云つて會釋して去つた。

師は老僧の言葉を考へながら二三町來た。そしてはつと氣がついた。

「あの方がもしかしたら自分の父かも知れない」

師は躊躇した。しかしますますさうらしく思つた。師はびつくりしてあとを追ひかけた。しかしもう老僧の姿は見えなかつた。

師はなぜあの時氣がつかなかつたのだらうと、心から後悔したがどうすることも出來なかつた。そしてそのことを母に打ちあける氣にはなれなかつた。父は母や自分を見にそつと來たのか。或は他人か、或は自分の幻映か師にはますますわからなくなつた。だが師はこの見すぼらしい老僧に逢つたことを忘れることは出來なかつた。そして自分がその時ぼんやりして何にも氣がつかず、何にも云はなかつたことが思ひ出す度に氣になつた。

父よ！　幸あれ、あなたの教を私は一生忘れません！

師はいつのまにか、その人を自分の父のやうに思ひこみ、父に自分が見守られ、又守護されてゐることを感じた。

天の加護。それは曾つて孔子の信じてゐたものだ。そして師もそれを私かに信じてゐられた。

「天の加護がなければ自分は食つてもゆけない人間だ。人間に愛されるには虚偽でも澤山かも知れない。人間の愛は又變り易い信用のおけないものだ。しかし天の加護は心を底の底から清くしなければ得られない。そして天の加護を得るもので初めて本當の安心は得られるものだ。人間を敵とするのはこはくない。天の加護を得られる道からはみ出るのが恐ろしい。それは宗教家にとつては水をはなれた魚のやうなものだ。その時はもうその人は宗教家として死んだことを意味する」

「天の加護とは内面的にあるのですか、外面的にあるのですか」

「天の加護はよき種をたえずまく人にある。その人の言行が接するものの心を知らず〳〵清める人にある。よき種をまくことの出來ることは既によろこびだ。之は内面的のよろこびと云つてもいゝだらう。よき種からよき芽が出る。それが又よろこびだ。それは外面的のよろこびと云つていゝであらう。天の加護をうけたる人は自分の心の清く美しきをたのしめる上に、自分の接する人の清く美しきをたのしめる。そして心の清きものから生れるものを自づとたのしめる。内と外とこゝでは力を一にして、その人によろこびを捧げるのだ」

「その人が心が清すぎる爲に迫害されることはありませんか」

「心が淸すぎる爲に迫害される。そのことはその人にとつてよろこびだ」

「迫害がひどすぎたら」

「私はまだ迫害されて見ないからわからない。だが、肉體の苦痛は强すぎて一時はまゐつても、少しでもすきまがあつたら自分の正しさに傲りを感ずるであらう。ソクラテスは罪がなくつて毒杯をのまされた。罪がないのに毒をのまされるのかと弟子が嘆いた時に、ソクラテスはお前は私が罪があつて毒をのまされるのをのぞんでゐるのか。私には罪を犯すよりは毒をのむ方が幸福だと云ふ意味のことを答へられたさうだが、その權威にあなたは頭がさがらないか。私はそれを思ふと泣きたくなる程、頭がさがる。人間が生き甲斐を感じられる祕密は其處にある」

師はかの僧侶にあつてから目に見えて行ひをつゝしむやうになられた。そして一部分の人から師はもとめずに尊敬されることになつた。師はそれ等の人に自己の確信を語られた。

師の確信はこの世に愛想をつかすのはつかすものの生活が過つてゐるからだと云ふのだ。師はかう云はれたことがあつた。

「自分も今だに瞬間的に生の無意義を感じ生れたことの淋しさを感じることがある。しかしその瞬間は自分の邪路に入つてゐる時だ。少くも自分の精神が本當には生きてゐない時だ。心のな

かが淸くない時だ。心が美しくない時だ。自分に與へられた最高のものを生かしきれない時だ。ありがたいとか、淸い喜びにふれるとか、或は美のうちに我を忘れるとかする時は生きてゐることを感謝する。聖人や、眞の宗教家の安心立命されるのは、當然なことである。我々も彼等の如き心をもつ時、死を思はない。たゞ涙ぐむ。謙遜をもつて御心のごとくならせ玉へと祈る許りだ。そして心に深いおちつきを得る。其處までゆけない時には人生は無意味に見える。だが其處までゆけば人生は無意味だなぞと考へる餘裕はなくたゞ感謝の念やよろこびや平和で心が滿される。神にふれる時肉體の滅亡なぞはよろこびになつて悲しみにはならない、よしある淋しさは感じても、其處には高山の冷たさが伴ふ時もある。しかしそれは恍惚たる喜びだ。其處では死は神へ合致する道になる。自分は夢でその境を時々味はつた。死は母のもとに歸るのだと云ふ氣がする。又生きてゐて、生々して、神にふれるのもよろこびだ、權威が自づからわいてくる。要するに神が心にやどるやうに心を淸めてまつことが出來る人は幸だ。その人は生き甲斐を感じることが出來るから。兄弟を本當に愛することを知るものも幸だ、愛の內には神が宿るから。ともかく神、天と云つてもいゝ、神とつらなることが大事なのだ。其處では我々は不滅なものの一部となるから」

師はかう反省しながら云はれた。師の一生はこのことを示してゐる。師もかう云はれたことがある。

「俺の一生は神からはなれることが如何に淋しく、神につらなることが如何によろこびであるかを示してゐる。自分はよし人間が神をはなれて生きてゆかれるにしろ、その淋しさの耐へられないことを知つてゐる。又その無意味を知つてゐる。それなら如何にすれば神とつらなることが出來るか。それが人生にとつて一番大事な問題だ。この問題を本當に解決するのが自分達の務だ。自分は一生をもつてその務をいく分かでも果したいと思つてゐる」

自分は師はそれを立派に果したと思つてゐる。たゞ自分の力が足りないので、師の一生を語ることによつてそのことを十分に語れないことを恥ぢる。

自分はこゝで或る女が師に就て云つた言葉をかいておかう。かくことを師はよろこばれないかと思ふが、自分はかく方が本當の氣がする。それをかくと幾分か師が師になつた苦しみを暗示することが出來ると思ふから。

三

（ある女の話）

あなたはあの方を神のやうに思つていらつしやる。實際あの方は親切な方です。そして質素な贅澤を知らない、酒や煙草をのまない、自分のことよりも他人のことを考へて居る方です。いやこのことは少し疑問にしておきませう。ともかく珍らしい方で親切な方で嘘をつかない信用のおける、不平を云ふことを知らない、意地のわるくない、忍耐づよい方です。そして勉強家で、本氣で、金に冷淡な方です。妾はそれをすべて認めます。しかし私にはあの方に就て一つ疑ひがあるのです。あの方は僞善者ではないかと思ふのです。自分の名を惜しむ爲には他人の不幸を平氣でゐられる方ではないかと思ふのです。

たゞかう云つただけではわからないでせう、私は不幸な友達に就てお話しをしませう。

その友達は一度近處に嫁いで來た女でした。それであの方にあつていろ〳〵話をきいて心がやすまつて來たのです。その時分その友達はあの方のことを隨分ほめてゐました。妾だちはよくからかつたものです。殆んど毎日のやうにその友達はあの方の處へ出かけてゆきました。あの方のお母さんが心配された程でした。

私達もへんな想像をめぐらしましたが一年程の間は二人の間は淸かつたさうです。その間二人

の間には何事も起らず、一日逢はないと淋しがる程で、友達は自分をマリヤ・マグダレナに比較して、暗にあの人を耶蘇に比較し、自分はあの方に救はれた、あの方の爲なら死んでもいゝ、あんな人がこの世にゐるとは思はなかつた。なぞと皆にあてつけたものでした。處が一年程たつたら友達はへんにおちつかなくなり、あの方と二人で山や野を歩くのを見た人も二人が人目をさけ、日かげもののやうな態度をとるやうになつたことに氣がつきました。

友達はもうあの方のことは風評しなくなり、あの方の處に他の女客でもあると露骨にいやな顏をしてあの方の處に怒鳴りこんだり、あの方と大聲で云ひあつたりしたこともあつたさうです。

處がその時、あの方のお母さんが不意になくなられたのです。するとあの方はその友達に手紙をよこして以後あなたにお目にかゝりませんからそのつもりでゐて下さいと云つて來たのです。その手紙を友達はやぶいたさうですが、隨分あやまつて來た手紙だつたさうです。そして母の死の原因も二人の關係にあるやうな氣がしてすまないとか、父のことを思つても二人の關係の不正がはつきりしてゐるとかそんなことがかいてあつたさうです。

結婚はしないと初めから二人の間に約束があつたさうです。友達はその手紙を見て半狂亂のやうになつてあの方の處に行つて見たらあの方はもう家にはゐなくつて、旅に出てしまつたさうで

す。あとにのこしたものは殘らず母の片身として村へ寄附するとかいた置手紙があつたさうです。

友達はだまされた、だまされたとくやしがつて居ました。妾達もそれからあの方に愛想をつかしました。その後友達は他の人に嫁ぎ、今ではもういゝ年齡になり、あの方を恨んでゐませんが、反つて捨てられて幸福だと思つてゐるでせうが、あの方の處に女の人が訪ねてゆくのを心配してゐました。あの方は聖人ではない、本當に恐ろしい人です。さう友達は云つてゐます。

四

この話は嘘ではないであらう。師が女をこはがられたのも之でわかると思ふ。師の母は師の二十八の時になくなられた。それから三年間、師は何をされてゐたか誰も知らない。その間、師は何處かの寺に居られたと云ふ話もあり、諸國をまはつて歩かれたと云ふ話もあり、山のなかにこもられたと云ふ話もある。ともかくその三年は師にとつては苦しい年であり同時に大事な年であつたらう。そして自分達の村に來られたのは師の三十一の時だつた。

この女のこと及び、母の死は一生師の內面生活からはなれることは出來なかつた。母のことを話される時、師はよく涙ぐまれた。

「自分は母を喜びの最上の時に死なしたく思つた。自分のことに安心し、自分の母たることによろこびを感じ、自分を生んだことを感謝し、自分を育てたことに傲りを感じて、母が死んでくれることを望んでゐた。處が事實は自分の失敗の時に、母は死なれた。母は自分のことを心配して死なれた。自分が邪道に入りかけた時に母は死なれた。自分がもし母を心配させるかはりによろこばすことが出來たら母はあんなに早く死ななくつてもよかつたのだ。自分は母のことを思ふととり返しのつかないことをしたと思ふ。もう十年も生きてゐてくれたらと思ふ。本當にすまないことをしたと思ふ。しかし正直なことを云ふと自分は母の死の打撃をうけて始めて本當の決心が出來た。死を恐れない覺悟はその悲しみから生れた。自分はその後も隨分まよつた、あやまちをおかしもし、邪道に入りかけた。その時分を第一にいましめるのは矢張り死んだ母だつた。自分がまがりなりにもどうかかうか人間らしくなれたのは、そして今の幸福を得られたのは母のおかげだ。母のことを思ふとすまぬと思ひ、とり返しのつかぬことをしたと思ふ。しかし母の魂は死んでからも自分を守護してくれ、自分が善事をすることをよろこばれ、自分が邪道に入る時は泣かれるやうな氣がする」

師はさう云つて涙ぐまれたことがあつた。

自分はなぜ師がその女と結婚されなかつたかそれは知らない。經濟上の事情かと思ふ、他に之はと云ふ理由は自分にわからない。しかし母が死んでから女をすてて逃げられた氣持はわかると思ふ。そして自分は師をせめようとは思はない。師はきつと女の前に跪いてあやまりたい氣もされたらう。少くも女をせめる氣にはなれなかつたであらう。そして自分が深か入りし、愼しむことを忘れた爲に女にくらい影をのこすことを恐れられたらう。師は女をすてて運命を遠くから見てゐられたらう。そして女の幸福をのぞまれたであらう。もし女が師の爲に不幸のどん底におちたら師は女のもとに歸つたかも知れない。しかしともかく師は自分の足を淸め、思ひ切つて自分の過去を葬り、そして本當に淸い生活に入りたくなられたのであらう。

自分は今になつて或日師がかう云はれたことを思ひ出す。

「僧侶が僧侶となる前に關係した女に往來で出逢つた。女は男のことをまだ忘れてはゐなかつた。男も女のことを忘れてゐなかつた。二人は目禮してお互に好意を感じた。しかし僧侶は女にわかれてから女のことを思ふと、性慾にせめられた。それでその女をさけた。女は男の薄情をおこつた。しかし僧侶は女と深か入りすることを恐れた。もし僧侶が以前その女と淸くつきあつただけならば、僧侶は女をさける必要はなかつたのだ。それで僧侶は自分の以前の愼みを忘れたの

を後悔した。しかし女に近づくことは出來なかつた。自分はかう云ふ僧侶をせめるわけにはゆかない。それは心を清くし、行ひをつゝしむことによつて女から自づから遠ざかるのだから」

自分はその時、なぜそんなことを不意に云はれたかわからなかつた。今思へばそれは師の父のことを思はれた以上に、自分のことを思はれたのであらう。もしかしたら師はその女にその二三日前にでも道で逢はれたのであらう。ある人が師の處に來て

「自分が以前一寸いたづらした女がこの頃大へん不幸にしてゐることを聞いたのです。私は前に罪をつくつてゐなければ妻にさう云つてその女を助けたく思ふのです。尤も罪をおかしてゐなかつたらその女の不幸にさう同情をしないかも知れませんが、ともかく私はその女の不幸を同情するのですが、妻がうちにおいてやるといゝと云ふのですが、私にはそれが出來ないのです。おきたい氣もしないことはないのですが、それが恐ろしい氣もするのです。どうしたらいゝでせう」

師はそれに簡單に答へられた。

「うちにおくのは元よりいけません。おきたい氣持があなた達の心の平和を破るのに十分です。近くにおくのもいけません。もし純粹に助けたいなら誰にも知られないやうに、殊に女の人には

氣づかれないやうにして助けられるならお助けなさい。家におくなぞとは大まちがひです」

師は性慾を恐れるよりも、心のうちの神聖なものをけがすことを恐れる。それから心の平和を亂すことを恐れられる。

「仲のいゝ、おちついた、あぶなげのない夫婦は見てゐて氣持がいゝ。其處では性慾は心の平和を亂さず神聖を亂さない。さう云ふ夫婦こそ本當の夫婦だ」

「さう云ふ夫婦は澤山あるものですか」

「ある、俺はいたる處でさう云ふ夫婦を見る、それは分に安ずることが出來、己が業をはげむ人間に多く許されてゐる」

師はさう答へた。

五

師はなぜ自分の村に來られたか、之は偶然のことからだ。しかし偶然と云ひ切るのもこはい氣もする。又偶然を生かす生かし方にその人の實力が露骨に顯はれるものでもある。

月のいゝ夜師は一人で川岸の細い道を歩いてゐた。すると向ふから一人の若者が來た。すれち

がひに師はその若者の顔を見た。すぐその男が自殺しようと思つてゐる事が師に感じられた。

師は若者をよびとめた。そして若者のゆく方にある村へ歩くのにはどうゆけばいゝのか聞いた。若者は默つて自分のゆく手を示した。若者は青白い顔をしてゐた。肺をわるくしてゐることが感じられた。

師は若者に禮を云はれて若者のあとに從はれた。若者は歩みをおそくしても師は先にゆかうとはしなかつた。

「私は肺病です。うつるといけませんから先に歩いて下さい」若者は遂々こらへられずに云つた。

「肺病は中々うつるものではありません。私は肺病をちつともこはい病氣とは思ひません。安心して咳でもなんでもして下さい」

二人は默つた。

「肺のわるいのに今時分歩いてはよくないでせう」

「よくつてもわるくつても同じぢやないでせうか。高々百年さきに死なうが、今死なうが、別に大した問題と僕には思へません」

「それは死んでしまへば同じでせう。しかし生きてゐる間はちがひはしないでせうか」
「ちがふと云ふのは悪魔の云ふことですよ」
「ちがはないと云ふ方が今の場合悪魔の言葉のやうな氣がしますね」
「人間は蟲けらと同じです」
「それは自然から見ればさうでせう。しかし人間にとつてはちがひます。人間は生き甲斐を自ら感じることの出來る動物ですから」
「それはひとり免許にすぎないでせう」
「厭世はひとり免許にすぎないでせうが」
「あなたは生き甲斐を得てゐるのですか」
「少くも心におちつきは得てゐるつもりです。いつでも自分さへ一歩すゝめば生き甲斐は得られるものだと云ふことを信じてゐますから」
「あなたは空想家ですね」
「君の方がなほ空想家でせう。本當に死ぬも生きるも同じことを覺つていらつしやるならこんな月のいゝ晩に川のふちなぞを歩いて見る氣はお出にならなかつたでせう。本當に淋しいと云ふ

ことにあなたはまけたのでせう。そして一寸詩的なことがして見たかつたでせう。生命をかけても」

若者は默つてゐた。

「君は人生に與へられた本當のよろこびを知つていらつしやいますか。そのよろこびさへ味はへば人は神と一緒になつたやうなよろこびを感じることが出來るのです」

若者は不意に泣き出した。師は默つて見てゐた。

「私にはもうよろこびは與へられません。あまり淋しい」

若者はすゝりなきして、かるくさう云つて又ないた。

「御尤です。しかしともかく、今日は私のゆく處にいらつしやい。おうちの方さへ心配なさらないなら」

「大丈夫です。私は轉地さきから今日こゝに旅行して來てまだ宿もはつきりはきめてないのですから」

「御飯は？」

「たべました」

「ともかく一緒に來ませんか。病氣のことは氣にしないで下さい」

若者はとう〳〵師について行く氣になつた。師は實に粗末な小屋に居た。壘も薄くすり切れ波うつてゐた。障子もひどくやぶれてゐた。師は其處の圍爐裡に火を熾して湯をわかし、もらつたのだと云つてもちをやいた。

師は

「今日は本當にいゝ處でお目にかゝりました」と云つた。そしていろ〳〵聖人や君子の話をした。

「お互に死ぬ時までは生きて人間の爲に少しでも働いてゆきたいものですね。私はよく思ひます、もし自分が肺病になつたら、自分の愛すべき何萬、何十萬と云ふ世界の肺病でくるしみ淋しがつてゐる人の安心を得られる道を出來るだけさがすやうに骨折りたく思ひますよ。出來ないまでも、その淋しさ苦しさのうちによろこびと感謝を本當に掘り出す仕事が出來たら大した仕事と思ひますからね。それは死の恐怖に克つ仕事です。我々は死に克つべきものか、死とよろこんで抱擁すべきものかわかりません、がともかく死の恐怖といかにたゝかふかと云ふことを本當に知るのは同胞にたいする我々のつとめの氣がします」

師はさう云つた。その時若者の目に涙があつた。その晩若者は師の寢床にねむらされた。日光消毒を十分にするから安心してくれと云はれて、その晩若者は生れて始めての異樣な感動をうけた。そして自殺の壓迫からのがれることが出來た。この若者が師にすゝめて自分の村にこさせ、師に少しの土地と小さい家をささげたのだ。この若者は自分の村の一番金持の息子だつた。その後病氣もなほり、師の價値をとくことにつとめた。自分もこの男によつて師を知つたのである。

六

自分が師に逢つた時は自分の一番偶像破壞的の氣持の時だつた。それで師を村につれて來た男から師の話を聞いても別に逢ひたくも思はなかつた。金持に媚びる坊主の一種のやうに思つてゐた。金錢に淡はく、粗衣粗食を恥ぢないのを反つてたらつてゐるのだときめてゐた。どうせ逢つても大した奴ではない。つれて來た男は人がいゝからだまされもしようが、自分はだまされはしない。そんな風に思つてゐた。そして師に偶然その男の處でおちあつても興味をもたないやうな顏をしてゐた。實際逢つても偉いとも思はれなかつた。たゞよく語り、よく食ひ、よく笑ふ、見えをかまはない、氣持の思つた程惡くない、聖人ぶらない男だと思つた。しかしそれだけ偉いと

も思はなかつた。暢氣な世間話を大聲でして、笑つて茶をのんだり食つたりしてゐた。その時分師は美食も敢てさけようとはされなかつた。食ひしん棒のやうに見えた。しかし無邪氣で、媚びると云ふやうな處は見えなかつた。自分は段々師とおちあふのが好きになつた。そして師が時々意識もせずに云ふ言葉に同感を感じないではゐられない時があつた。

或日だつた、自分は又その男の處で師に出逢つた。話は死と云ふ問題にうつつた。

「あなたは死を恐ろしくは思はれませんか」とその男が聞いた。

その時師は

「恐ろしいとよく思ひます。死んでもいゝ、自分なぞは死刑に處せられてもいゝ人間だと思つたこともあります。しかし死は恐ろしい、今死んでは大へんだと思ふこともあります。しかし私はその時自分を本當に生かしてゐるかどうかを見ます。私は自分を本當に生かしてゐる時は死を恐れない、たゞ自分を生かし切れない時に死が恐ろしく思へると云ふことを知ります。ある畫家が最後の傑作の佛像をかく時、それが出來上れば死んでもいゝ、それが出來上るまでは生かしてほしい、自分の最後の筆をつける時に同時に死にたい。さう心に願つて佛像をかいたさうですが、その氣持がわかる氣がします。力を出し切つた時死はなつかしいものにちがひないと思ひます。

私達の死を恐れるのは現在自分の力を最善に生かす道を知らないからです。君達とかうして話してゐますね。私達の話がまだ本當の深い處から生きて來ない間は、私達の現在の生活は自分達を本當に生かしてゐるのではないのです。だから死が恐ろしい。死が問題になる。しかし私達が眞心に動かされて目に涙をためて心の底から話し合ふ時、私達は本當に生きた時で、その時はよろこびを感じ、感謝の念にうたれて、死のことなぞは問題ではなくなる。永遠と合致する時、死がどうすることも出來ないのはあたりまへです。自分を本當に生かしきれる。その人には死は問題にならない。耶蘇はどんな時でも、本當に生きることを知つてゐた。だから耶蘇には肉體の苦痛はあつても死は問題にはならなかつた。一寸の會話ですら、心の底が生きてゐる。それにふれると死は問題ではなくなる。それは死よりももつと深い生命の流れにふれてゐるからだ。「罪なきもの先づ石にてうつべし」この言葉の深さにふれたものは心がをのゝく、あの時之以上の言葉はどうしたつて發せられない。さう云ふ言葉をぴつたりと發せるやうに心が本當に生きてゐるものには死は問題にはならない。私の僅かな經驗でも眞心がぴたりと生きた時には、すべて否定的な氣分は消えてしまふ。それが生かせない時は死の恐怖はくる。だから私は死の恐怖を感じる度に自分の德の足りないことを痛切に感じます。死の恐怖を與へてくれたものを呪ふかはりに、自分

の力の足りないことをあやまりたく思ひます」

「しかしいくら耶蘇でも山上の垂訓をしておりて來て病氣になつて死んだら、あの垂訓は今の世に殘らず、耶蘇の仕事は成就されなかつたでせう。いくら眞心を生かし切つた時でも、死が早く來すぎると云ふことはあり得るでせう」

「人間の目から見たらさうです。しかし神の目から見ればさうではありません。眞心をもつてゐる人で仕事を完成せずに無名で死んだ人はそれこそどの位あるか知れません。そして私達は實際その無名の人のおかげで眞心の力を人類から失はれずにすますことが出來たのです。眞心は亡びません。人は死んでもその人の眞心は何處かに生きてゐるのです。物質でさへも不滅の法則に支配されてゐます。眞心も何處かに生きてゐてそれが又人間の内に宿れる機會を待つてゐます。この地上に眞心は充滿してゐます。私はそれをよく感じてゐる。自分の内の眞心が少しでも生かされると、その世界に充滿してゐる眞心が私に味方をしてくれる。耶蘇の眞心も、佛陀の眞心も地上の何處かにかくれてゐる。そして私の眞心にそれをよびよせる力が出來ればすぐその眞心がやつて來てくれる。そして私の感じをすなほに云ふのを許してもらへると、この世には無名な恐ろしく大きな眞心が、すべての人の眞心が其處に歸つてゆくかと思はれる程の眞心がある。それ

に自分の眞心がふれる時、死は何にするものぞと云ひたくなる。私はそれを感じてゐます。私が罪を恐れるのは地上の名譽をきずつけるのを恐れるよりも、むしろこの眞心に排斥されるのを恐れるからです」

師がさう云つた時、權威がある者のやうだつた。自分は師の言葉にたいしては半信半疑だつた。しかし師を尊敬する念は段々萌し出した。そして師に逢ふと心が淸まり、そして靜まるやうな氣がした。

自分は師が田舍にうづまるのを恐れて、もつと方々へ傳道されたらどうかと云つたことがある。師はその時かう云はれた。

「傳道もいゝでせう。しかし私はこゝにかうやつてゐるのもいゝと思つてゐます。本當の傳道は言葉や行ひではなく、もつと深いものによつてです、私がもし眞に人類に役立つ人間ならば、私はたゞ默つて自分の心をますゝ淸くし神の命ずるまゝに日常生活をつとめるやうにすればいいのです。さうすればそれが人類の根を又淸めることになるのです。私はそのことを信じてゐます。それですから自分が無名で一生を終つても、人類は私がお役に立つだけのことは立たしてくれるのです。それを心配するのはまだ信仰がうすいからです。私は無名な人の味方です。有名な

人々の内にも元よりいゝ人がゐます。しかし無名な人の内に更にいゝ人がある。それで人類がたもたれてゐるのです。有名になれる人は何十萬人に一人です。其以上は人間の頭で記憶するわけにはゆきません。記憶されるのが目的では人間は安心は出來ません。私は無名なものの味方です。そして自分も無名な人として一生を終るつもりです」

「それは惜しい氣がします。もし假りに耶蘇のやうな人の名がこの世に殘らなかつたとしたらどうでせう。耶蘇が無名の人としてをはつたら」

「それは歴史的には大したことでせう。しかし私は耶蘇に匹敵する數人の人が無名でこの世から消えていつたことを信じてゐます。それ等の人は人間の意識出來る範圍ではこの世から無意味に消えていつたやうに見えるでせう。しかし私は決してそれ等の人が無意味に消えたとは思はないのです。否、その人は我等の心の底を耶蘇にまけない力をもつて清めてくれてゐるのです。人類の品位はさう云ふ無名の人にどの位恩をうけてゐるかわからないのです。耶蘇は洗禮のヨハネをほめた時に、しかし天國のいと小さき者もヨハネよりは優れてゐると云つてゐますが、天國の人の名は人間には知られない。だがさう云ふ人がゐて我々を清めてくれ、我々の眞心の力をつよめてくれ、そして人間に生れたよろこびを感じさしてくれるのです。決して有名な人許りが我々

の生命を保つてくれてゐるのではありません。我々は人に知られない善行にどの位恩になつてゐるかわからないのです。我々の眞心には釋迦、耶蘇にまけない力がある。それが生き切れば、今の世でも世界は動くのだ。決して有名な人の眞心だけが人の心を動かすのではありません。私は無名な人の眞心が世界に充滿してゐることを感じます」

師はさう云つた。實際師は他人に自己を知られようとはしなかつた。だから自分が師のことをかくのもよろこばれないかも知れないとも思ふのだ。だが自分は書かないのは惜しい氣がする。

又師はある時、有名になりたがる人を見てかう云はれた。

「自己の生命が殘ることを欲しないで、自己の名だけをのこしたがつてゐるものがある。自己の名はのこつても、中身は他人の人がある。それは恥をのこすに過ぎない。私は名をのこすよりも、自分の精神をのこしたい。何百萬、何千萬、何十億萬の人と同じく私は無名でいゝ、しかし自分の魂をこの世の何處かにのこして、自分を最も愛してくれる魂にまかせる。その魂は私の魂によつて力づけられ、勇氣を得る。私の助けをうけてゐると云ふことは知らずに、それでいゝ。私はそれをよろこぶ」

自分にはそれ等の師の言葉に同感出來るとは云へない。だが有名になりたがると云ふぼん惱に

打ち克つことが萬人を救ふものにとつては必要缺くべからざることだと云ふことを知つてゐる。そして目に見えず、又知られざる善行がつみ重さなる時、其處に見えない神が宿り、その人を祝福することを師と共に信じるものだ。その神は無名であつて、何萬と云ふ無名な人の眞心から生れたものだと師は云はれたが。さう云はれるとそんな氣もする。

ともかく師は恐ろしく眞心の力を信じ、一人の人の心の底が動けば、他の人の心の底の底を動かすことを信じて居られた。「もしこゝに一人の人があつて、自分の心を最も貴く動かすことが出來たならば、その人は言行の助けを借らずに、もつと直接に人の心を貴く動かした人だ」と云ふことを信じてゐられた。しかし師は饒舌る時はよく饒舌り、働く時はよく働き、そして道をとく時うむことを知らなかつた。

「眞心が一番直接に眞心にふれるならば、道をとくと云ふ事は不必要になりはしないのですか」或人が得意さうにさう云つた時、師は

「そんなことはない。道をとくのは眞心の錆をとるのだ。眞心の曇をとるのだ。眞心が本當に生きるのをさまたげるものをのぞくのだ。そして眞心が本當に生きるやうにそして人間に生れた權威を感じることが出來るやうに骨折るのだ。もし日常生活に眞心を機會が與へられる度に生か

すことが出來るものには言葉は不必要であらう。しかし多くの人はまだ言葉の御厄介になることで、自覺を得、信仰を得るのだ。言葉なくしては折角眞心が動いても意識にのぼらずに消えてゆくのだ。心の底を動かすのは眞心だ。だがその眞心のありがた味を意識するのには今の人はまだ言葉の助けをからなければならないのだ。聖人同志には默つてゐても話が出來る。だが普通の人には道をとくのに言葉が必要だ。說明が必要だ。面白味のある說明を聞いて始めて半ば合點がゆくのだ。本當に合點がゆく人には言葉は不必要だ。しかし今の世にはそれはまだ許されない。だから昔から聖人も言葉を惜しまれないのだ」

師は又陰日向をする者に就てかう云はれた。

「多くの人は人の見えない處でいゝことをするのは馬鹿氣てゐるやうに思ふ。それは賞められるべき代償を同じく拂つておきながらほめられないから損したやうな氣になるのだ。同時に見えない處でわるいことをするのは罰を受けるべきことをして罰をうけないですむので得したやうな氣になる。しかし大事なのは見えない處で己をつゝしみ、わるいことをしないやうにし、心を正しくすることだ。見えない處につゝしむことを知らないものは自己を下等にする。見えない處で慣みを重ねてゆくもののみ、神の愛をうけ、運命の守護を受ける。多くの人は自己の心を淸くす

るより、心なき他人の思はくを氣にする。他人からよく思はれたがり、賞められたがる。その爲に自己の眞價のくだるのを顧慮しない。自分の眞價を下等にして始めて得られる他人の賞讃よりは、自分の品位をたかめて他人の罵詈を甘受する方がどの位うれしいかしれない。賢人はこのことをよく知つてゐる。人間許りを相手にしてゐるものにはこの氣持はわからない。馬鹿氣て見える。しかしこの馬鹿氣たことが實は人生にとつて一番大事なのだ。人に見られる見られないは問題ではない、自分の心に神を宿すのが大事なのだ。自分を神の愛兒にするのが大事なのだ。それには陰日向は一番いけない。こゝに二人の人がある。一人は人に見える處で實によく氣がつき、親切でもあり、勉强家でもある。他の一人は我儘で他人のことはあまり氣にしない。たゞ自分の心をいつも淸く持たうとしてゐる。多くの人は前者を善人と云ひ、後者を我儘者とよんでゐる。しかし前者の容貌はへんに俗になり、後者の容貌は次第に精神的になつた。前者は心のおちつきを得ないが、後者は心のおちつきを得てゐる。この二人のどつちに君達はなりたいか。云ふ迄もないことと思ふ。陰日向するものは何となく他人に賤しめられるのは無理のないことである」

自分は又かきすぎたかも知れない。

その後自分は師の處によく行くやうになつた。そして師の處によく出入りする五六人の若者に

も出逢つた。皆氣持のいゝ若者達であつた。

七

師はよく若者と一緒に山に登られた。遠くに海が見えるのをよろこばれた。

「この世を假りの世の中とするにはあまり美しすぎる。空の色、水の色、草木の色、それ等の美しさは無限を思はせる。この美を本當に知れば我々は自分達のこの世に人間として生れたことの幸福を感じないわけにはゆかない。この世は美しいものが多すぎる。多すぎる爲に我々は無頓着になる傾がある。しかしこの世のなかに無限の美しさを感じることが出來ないやうにこの世がつくられてゐたら、或は人間がつくられてゐたら、さう思ふ時、自分はこの地上に生れたことを感謝する」

「それでもこの美しい自然のうちに地獄のなかに居るやうに生活してゐるものが多いでせう」

「それ等の人は蟲けら以上にまだなれないのだ。まだ人間になりきつてゐないのだ。そしてつまらぬことに拘泥しひつかかつてゐるのだ。私はまだ本當に人間になりきつた人の不幸を知らない。勿論、この世には悲しみも、苦しみもある。どうしていゝかわからない時もあるだらう。だ

がそれはその人の特別な境遇に落ち入つた時に限る。それは例外だ。普通として人間になりきつた人は運命をおそれ、つゝしむことを知り、自分の責任を知り、そして感謝とよろこびを知る。自分のやうなものには天寵がありすぎる、勿體ないと思ふ。自分が不幸な種をまきすぎてゐながら幸福にしてゐられる。病氣になつても仕方がない氣が常にしてゐながら健康の時が多いことに感謝する。そしてたまに罰をうけると自分のわるかつたことに氣がつき、なほつゝしみ、自分を責める許りだ。さう云ふ人間が本當の人間だ」

「さういふ人間は意氣地なしになりはしませんか」

「そんなことはない。よろこびを內から感じ、感謝の念が內にあふれてゐるものがどうして意氣地なしにならう。彼はます〳〵生々した男になつて、正しい方に進んでゆく。彼は常に內に勇猛心を失はない男だ。大勇猛心を失はないやうに彼は常につとめてゐる人間だ。意氣地なしは日陰ものだ。彼は日向者だ。意氣地なしにはなりたくもなれないものだ。神は彼の味方をしてゐる。陰うつな時があつても、それはせかれる水だ。更に勇氣をふるひ起させる助けになるにすぎない。眞の勇氣はさう云ふ人から出る。決してつゝしむことを知らない、勇氣を安賣りするものからは眞の勇氣は出ない」

「先生何か話してくれませんか」

或日一人がさう云つた。

「話さう」師は機嫌よく云はれた。「神様がこの世の中の不仕合な人をたづねて歩かれたのだ。何處へ行つても神様は不仕合せな人に逢ふことが出來なかつたのだ。病人の處へゆかれると、今まで苦しがつて疳癪を起してゐた病人が神様の姿を一目見ると、急にうれし涙をながして、ありがたい勿體ない、私のやうな人間が皆さんに親切に看病されて野たれ死にもせずに死んでゆけるのも、皆さんの御かげだ。今迄氣ずゐなこと許り云つたのはどうか許して下さい。皆さんがいつもよくして下さつたことはお禮の云ひやうはありません。私は幸福です。死ぬことも幸福です。私の心はよろこびで一ぱいです。さう云つて病人は死んでしまつた。それで神様は之でいゝと思はれて、今度は刃物をもつて切りあつてゐる男の處にゆかれたのだ。二人は自分が死んでも相手を殺さないではおかないと云ふ有様で喧嘩してゐたのだ。處が神様の光が二人の男を照らすと同時に、二人は刃物をなげすてて、二人で抱き合つて男なきに泣いたのだ。許してくれ、許してくれ、俺がわるかつたのだ。俺の方がわるかつたのだ。今迄通り兄弟のやうにしてくれ、二人は涙をこぼしてよろこび合つたのだ」

「どうして今まで喧嘩してゐた人がすぐ仲なほりしてしまつたのです」或人が聞いた。

「それは神様の光がその人達の心を照したからだ。そして自分のわるいことに、一時に氣がつき、相手が自分によくしてゐてくれたことを一時に思ひだし、ごく一寸したことからムキになつて腹をたてたことを心から後悔したのだ。さう云ふ風に神様はいたる處で、光が暗をさがして歩くやうに不幸や罪惡をさがして歩かれたのだが、折角、不幸や罪惡をお見つけになると、その不幸や罪惡がつよければつよいだけ、悔い改めや、和解や、感謝のよろこびが二倍も三倍もされるので、神さまは大へんよろこばれて、人間と云ふものはどうしてかう可愛いゝのだらうと思はれた。そして得意になつて惡魔にお逢ひになつて人間と云ふものは、野たれ死にしても、殺されてもよろこんでゐるものだね。十字架にかけられて勿體ないと云つてゐる奴まであると云はれた。惡魔はその反對のこと許り切り見てゐないので、人間程圖々しい慾のふかいあてにならない者はありません、千人の女を弄んでもまだ滿足せず、人間の腹をさいてもまだ殘酷性を滿足させず、今和解してありがた涙をこぼしてゐるかと思ふと、もう本氣になつて詛ひあひ、にくみあひ、殺しあふものです。そんなことはない。人間は憎みあひ、殺しあつてゐる最中でもすぐ和解するものだ。其處で二人は益々議論をしたが、お互にまるで反對のことばかり見てゐないので、はてしが

つかなかつた。其處で二人は太陽をよんでどつちの云ふことが本當かを聞くことにした。太陽は二人の話を聞いて、お二人の云ふことは兩方とも本當です。それが人間ですと云つた。ふーん、さうかな人間と云ふ奴はへんな奴だな。さう神樣は云はれた、何かもつと云はれたかつたのだが、丁度その時用が出來たので、その話はそれでおしまひになつた。私の話もそれでおしまひだ。どれ、山をおりて、畑でもたがやさうか」

自分達は時々師の畑をたがやすことを手つだつた。師も亦、いろ〳〵の人の處に出かけて耕作の手つだひをされた。あまり上手ではなかつた。時々何か考へてゐられた。しかし耕作の仕方は丁寧で親切だつた。師も害蟲は殺された。「もつといゝものに生れてこいよ」師はある時さう一人言された。

「害蟲を殺すのはいゝことかわるいことか知らない。惡いことだと云ふことがぴつたりわかるまで、いやだがなるべく殺すやうにしてゐる。自分はこの事に就てはへんに氣になつていろ〳〵の人の意見を聞いて見た。殊に殺生戒をやかましく云ふ僧侶にも聞いて見た。しかるに腑におちた答へを得たことはない。皆あいまいにきり答へてくれない。自分はかう云ふことはあまり氣にしない方が本當かとも思ふ。しかし殺す時、彼等の死にたがらない本能がかすかではあるが、は

つきり感じられる。そのくせ殺さないのも氣になる。一たい世の中には矛盾したことが多い。一一どつちかにかたをつけないと氣がすまない人間には困る問題が多すぎる。自分は自分が神でないことを知つてゐるからさう云ふ問題に出くはしても、そのまゝにぼんやりさせて、はつきりわかるまで別に氣にしないでゐられる質だが、害蟲を殺すのがわるいことであるのをはつきりわからない爲に殺すのだと彼等にすまない氣もするが、殺さないと氣になる百姓根性に從つてゐる。いゝことかわるいことか、氣にするのがをかしいのか氣にしないのがをかしいのか知らないが、自分は殺す方に今は從つてゐる。彼等に罪のないことは知つてゐるが、農夫のたんせいを無にするわけにもゆかない。わるいくじを引いた蟲たちのもつとよきくじをひくことをのぞむだけだ」

「生れかへるものでせうか」自分は師の一人言を思ひ出して聞いた。

「いや私にはよくはわからない。だが生れかへらないものとも云へない。自分の感じではむしろ生れかへるものだと云ひたい。それはしかし佛教で育つたからかも知れない。ともかくさう云ふことはまだ〳〵自分にはわからない。實際自分にはわからないことだらけだ。そして別に今の處わかりたいとも強く思へないことが澤山ある。たゞ自分にわかつてゐることは自分がこの世に人間として生かせられてゐることだ。そして人間として生きてゐる間、人間の爲に働いて、出來

たら人間に生れただけのことをして、この與へられた生命を出來るだけ貴くつひやしたいと思ふだけだ」

師は畑をたがやしながら云はれた。

自分は師の言葉をかきすぎるやうな氣もする。だが書けるだけ書いておきたい。はつきりおぼえてゐないで、意味をかきちがへる恐れのあることはかかないが、はつきり覺えてゐる言葉はかいておきたい。自分の筆によつて師の言葉が歪になり、淺薄になり、力がよわめられることを自分は恐れてゐる。だがかけるだけは書きたく思ふ。

何かの意志が自分にそれを命じてゐるやうだ。だが恐ろしい。果して出來るかどうか自分にはわからない。たゞ自分は純粹な氣持でかけるだけかいて行かうと思ふ。その他は自分の力ではない。何かの意志にお任せするより仕方がない。

八

師は常にかう云はれた。

「自力で出來る間は不淨なものが入りたがる。自力のかぎりをつくした處には不淨なものは入

らない。絶望的になるか、宗教的になるかどつちかだ。その自力の働き方が惡ならば絶望に落ち入る。しかしそこに何か光明的なものがあれば、宗教的になる。何かが自分を守護してくれてゐる氣がする。そしてそれは自分に出來ないことを許してくれ、そして自分が出來ないことをそのものにお任せする時よろこんで引き受けてくれる。それで安心が出來る。心にひけめを感じることに全力を出したものにはその安心が得られない。だから絶望的にならないわけにはゆかない。自分達は自分の力のかぎりをつくしてあとは何かにお任せの出來る仕事を一生してゆきたいものだ」

今の自分には師のことをかくのが僭越のやうな氣もする。かいても始まらない氣もする。だが自分は全力を出し切つて、野心も何もなく、人のよむよまないも考へることなく、たゞ自分の力の不足を感じる時、妙にすべてを何かに任せて、ともかく書ける處までかいて見ようと云ふ氣になる。この書が誰の心にひゞかなくともそれは仕方がない、ともかく自分に許された仕事を果さう。この書が埋れたまゝ誰の目につかなくも自分は自分がこの書をかく爲に自分の心を働かしたその心は何處かに響いてゐるにちがひないことを信じる。小は小なりにも。

師の廻りにあつまつた若者に文學好きな男があつた。そしてある小說をよんで感心して師によ

むことをすゝめた。師は二三枚よんだが、

「こんなものが面白いやうぢや駄目だよ」と云つてその本を投げすてた。「これはつくりものだ。精神がない。人間の心がない。下等な趣味がある許だ。趣味は馬鹿には出來ない。人間の上等下等はその人の趣味でわかる。下等な趣味は人の心をくさらし、心の平和を亂し、虚僞にし、人間に對する信仰を失はす。この本をかいた者は恐らくキザな生意氣な半可通なごまかすことの平氣な奴に違ひない。もつといゝものをよんで、こいつの下らない、無責任な、人をだますこと許り考へてゐることがわかるやうにならないと心細い。之は心をがさつにする本だ」

「二三枚きりおよみにならないぢやありませんか」

「二三枚で澤山すぎる。半枚よむのだつて心のけがれだ。くさつた魚の臭を一分もかゞされてはたまらない。くさつた人間の心に自分の心を一致させるのはなほたまらないよ。君にも今に僕の云つた意味がわかる時があるだらう。又それをのぞむ。この作者が今の世に重く見られてゐるならば、それは今の人間が、正しき趣味と云ふものを知らないからだ。心のくさつた臭に無感覺になつてゐるからだ」

文學好きな若者は不平さうな顏をしてだまつてゐた。その男が歸つたあとで師は云つた。

「あの男はきつと今に俺の處に來なくなるだらう。あの小說が面白いやうぢや、俺の云ふことは面白くないにちがひない」

果してその男は、まもなく師のもとを去つて、東京へ出てその後可なり有名な小說家になつた。師はその男のかいたものを半頁程よんで、

「さすがくさつた心の臭さを知らない男の書きさうなものだ。何にもないのにありさうにかいてゐる」

師は又、畫に就いても一種の見方を持つて居られた。

「俗な畫が好きな奴は俗な奴だ。この畫の俗さは見てゐて胸がわるくなる」

「この淺薄な甘さ、はきたくなる」

「この何にもないくせにありさうに見せようとするもがき方」

しかしいゝものを見ると隨分感心された。

「さすがに一生を畫に捧げた男のかいたものだ。俗な處が少しもない。まじりつけがない。こつちの心にぢかにふれる。かうならなければ本當でない。不思議に人の心を淸め、生々させる。そして萬物にたいする愛を深める。美と云ふものは不思議なものだ。美を意識でつくり出さうと

思ふものは馬鹿だ。美を感じるのはその人の心の深さに比例する。多くの人は美をかかうと思つて綺麗ごとをする。しかし其處には心ない人間の淺薄さが露骨に見える。本當の美のわかるものは、無限の深さにふれる。無限の深さから許り美はあふれ出る。細工からは美はあふれ出ない。何ものにも歪にされず、人間の淺はかさが出る暇もなき時にのみ美は顯はれる。すべてがやきつくされて自力が他力にふれる處から美はあらはれる。だからすべてよき藝術は永遠を思はせ、そして宗教的な感じを與へる。繪筆をとる時、無限にふれられるものが眞の畫家だ。畫家はあらゆる材料を通じて神を見るものだ、文學でも、音樂でもさうだ。それ以外のものはまやかしだ。商賣だ。職業だ。金錢以上のものはない。人間のまやかしも隨分多い。金錢以上に出られない人間も隨分多い。それは人間になり切れない人間だ」

九

自分達のうちにへんに俠客肌の強きをくじき弱きをたすける傾向の強い人がゐた。その人は理が非でも弱きに同情したがつた。自分にたよるものに味方した。師はその人にかう聞いた。

「君は獅子と狐とどつちがすきだ」

「獅子です」

「しかし獅子の方が強いぜ」

其處で皆が笑つた。その時師はかう云つた。

「なんでも強いものにつくは元より醜い。さう云ふ人が世の中には多すぎるのだから偶には君のやうな人も居てもよいかも知れない。だが正しきものより不正なものが弱いときに不正なものの味方をするのはよくない。その不正をしないではゐられない境遇に同情するのはいゝが。常に正しきものの方に味方し常に尊敬すべきものと尊敬すべからざるものとの區別をはつきりして、正しく、そして優れたる強者には尊敬をはらふことを忘れてはいけない。強いものに手向ふ根性に少しでも猜みや嫉妬や憎が入つてはいけない。元より社會的の強者は不正をしやすい位置にゐて、無理を通して道理をひつこめがちだ。さう云ふものに味方するのは賤しむべきだが。其處の點をはつきりして、大事なのは常に正しいものに味方し、常に德義的に優れたものを尊敬することを忘れないことだ。俠客肌になると人間が簡單に、淺薄になりたがる。よし引き受けた安心しろなぞと云ふことは自分のすることが何處までも正しいことを信じられる時、はじめて云へることで、それを本當に自分の力を知るものは容易には口にしないものだ。強いものにかつのにより

強力をもつてするものは、更に強いものにあつては動きがとれない。我々は正しきものに味方し、強力にまけても、なほ人の心にかつ力にたよらなければならない」

自分達の仲間に又理窟好きな人がゐて、よく理窟の爲に理窟を云つた。師はそれを黙つて聞いてゐたが、不意に云つた。

「君はなんの爲に理窟を云つてゐるのだ。本當のことを知りたい爲に云つてゐるのか。理窟を弄ぶ爲に云つてゐるのか。理窟にかつ爲に本當のことからどんなに遠ざかつてもいゝと云ふ勢ひは心ある人が聞いてゐると醜いものだ。少し用心した方がいゝ」

師にある人が聞いた。

「あなたでも腹を立てることがありますか」

「腹を立てることはある。腹をたてるのはまだいゝ。他人にへんに不快を感じたり、他人が困ることをのぞむやうなこともある。僕には皆のもつてゐる悪い點がわかるのは自分の内にそれ等の種があるからだ。他人が十分に尊敬しないと不服に思ふこともあれば、おだてられて内心得意になつてあとでがつかりすることもある。しかし自分はそれを反省して自分のわるい時はちやんと自分で知つて、それを未然にふせぐやうにする。自分のわるいことを他人のせゐにはしないや

うにする。自分の心が何となくおちつかず、不愉快な時は、その原因を顧みる。そして其處に自分の至らぬ處を見出す。自分は自分の至らぬ處を發見することが出來ずには他人に不快をもつたことも、腹を立てたこともない。その時はきつと自分の方に蟲のいゝ處を見出す。だから他人を憎んだり、不快に思つたりするのは恥かしい。自分の蟲のいゝのを棚に上げて他人の蟲のいゝのをせめるのは、蟲がよすぎて恥かしい。その上、自分は出來るだけ自分をよくするのを自分の本職にしてゐる。本職で他人に負けるのは恥かしい。君達も自分を出來るだけ立派な人間にするのを本職にするがいゝ。それには第一反省が必要だ。他人を責める前に自分を省みるのが大事だ。さうすれば相手の氣持が理解出來、自己をよくすることよりも損させないことを本職にしてゐるものと自分が同等の立場に立つて腹をたてることの大人氣ないことを恥ぢるだらう。自分は多くの人に負けない不淨なものを持つてゐるが、多くの人はそれを自己の本たいと思ひ、それをのさばらすだけのさばらすことを當然と心得てゐるが、自分はそれを人間の本體と思はず、反つて人間の本體をけがすものだと云ふことを知つて、それに打ち克つことに自覺せるよろこびを感じる點だけがちがふ。心が淸淨で誰にも不快を感ぜず、心の底がすんでゐる時のよろこびはかく別だ。自分はそのよろこびを知つてゐる。そしてそのよろこびにはなれることを强ひられた時、なるべ

くすなほにそのよろこびに歸らうとするものだ。そのよろこびを心に感じる時、始めて他人を同胞のやうに思ふことが出來、愛をもつて兄弟とか姉妹とか呼ぶことが出來るのだ。他人の心を自分の心と一つにすることが出來るのだ。心が心にひゞくのだ。自分は自分の心がそのよろこびに至らぬ時、自分の至らぬことを自覺する。そして其處までゆけるやうにつとめ、其處までゆけないとその罪を自分に歸せる。七十にして則をこえずの域に達した孔子、三十三で十字架にかゝつて、彼等に罪はない、彼等は何も知らないのだと云つた耶蘇、皆自分の手本だ。他人の自分にたいする態度を責めるのは自分の至らぬ證據だ。さう云ふ根性が萌したら、自分の至らぬことを恥ぢて、それに克つやう努力してまちがひない。自分はそのことを本當に知つた點で、多くの人より幸福なのだ」

一〇

「心が淸くなる時、心は無限に接する。その時心からあふれ出るものは無限からあふれ出る。其處に善惡を越えた美があらはれる。又自他の境を越えた愛があらはれる」

「心を淸くするにはどうしたらいゝのですか」

「一番身體の健全な時は身體のことを忘れてゐる時だ。それと同じく一番心の健全な時は心のことを忘れてゐる時だ。他人の思惑や、見えをかまつて正直になれない時は、何處か心にわざとらしい處が出來る、それをさけて出來るだけ正直にすなほにするより仕方がない。自信がないとつい自分を自分でないものに見せたがる。さう云ふものは心が清くならない。それから他人に不快をもつたり、不平をもつたりしては心が素直にはならなくなる。心を平靜にして何ものにも邪魔にされず、邪魔が入つた時はそれを內からあふれ出る正直な心ではねのけて本當の心を表はすやうに骨折ると、段々心が清くなる。心を清くするには先づ正直になつて、自分の思つたことを一々反省して其處に不純なものがあつたらそれをとりのぞくやうにしなければいけない。花を見て美しいと云ふ。それが本當に美しく思つて云つたのなら、それは心の清い時だ。しかし美しいとぴつたり思はずにたゞそんなことを云つて見たのなら、その人の根性が其處に露骨に出る。自分でそれが氣がつくと恥かしくなる。さう云ふ時は默つてゐる方がいゝ。ぴつたりものを感じる時、ぴつたりものが云へる時、その人の心の清い時だ。成心があつて何か云ふ時、その人の根性が顏を出す。その時は清くない時だ。それをよく知つてぴつたりものを感じたりものが云へたりするやうに心がけ、その境に入らない間、知つた風なことは云はないやうに注意すべきである」

「びつたりものが云へない時は默つてゐる方がいゝのですか」

「默つてゐては用がべんじない時があるだらう。しかし默つてゐることが出來たら默つてゐる方がいゝ。さう云ふ時に云はれた言葉は、その人のさもしさを示す許りで、生きない。權威がない。それは無限からあふれ出てゐるのではなく、あわてものの淺墓な根性から出てゐる。物云ふと唇さむしと云ふ感じがする。眞の言葉は無限から出て一言一句、權威をもつ。それでこそ言葉が生きるのだ。眞心にひゞくのだ。」

師は又云つた。

「心の淸さは雲のない時の空のやうなものだ。無限の淸さをもつ。しかし雲をつらぬいてかゞやき出る日光も亦美しい。時にあまりに淸淨な人よりは濁りのある處に無限から出る光りが反射することで、反つて人間らしい美しさを見せる人もある。又かの耶蘇の死などはとざされた雲をたち切つて日光が照りかゞやいてゐるやうに限りなく壯美だ。十字架の苦痛をつらぬいて輝きわたる人の子の神々しさ、それは崇高の極みだ」

師は限りなく靑空を讚美する、又限りなく雲のさけ間に見える靑空を讚美する。又たゞよふ雲が日光にいろどられるのを讚美する。皆太陽の限りなき深き心のあらはれだ。神の如き人の心も

亦そんなものだと云つた。

ある人が、「來て見れば聞くより低し富士の山、釋迦も孔子もかくやあるらん」と云つた和歌を面白がつたのを師は聞いて怒つた。

「馬鹿ものに何がわかる。馬鹿ものは釋迦や孔子のうちの糞を掘りあてる。釋迦や孔子の限りなき高さのわからぬことを自慢にするものは、自分の馬鹿で、生意氣で、淺薄で、無智で、美のわからないものだと云ふことを廣告して歩く奴だ。來て見ればなほも美し富士の山、釋迦も孔子もかくやあるらん。さう云ふ歌の方がどれだけ本當か知れない。生意氣の小猿に逢つてはかなはない。そんな奴は耶蘇を見て、お前は女を見て色情を起さないか、片輪もの奴と云ひかねない奴だ。恐ろしい恥知らずの奴だ」

一一

師のまはりに若いものがあつまり出し、師の影響をうけるに從つて、師を中傷したり、憎んだりするものが出來た。

殊に師が今の僧侶を非難して、

「宗教の元來の性質は生きてゐるものの爲にあるのだが、今の僧侶は死人にとつてより外役にたゝない」

と云つたのを聞いて、ある僧侶が怒り出した。僧侶の世間的信用をおとして得をしようとする商賣がたきとして師を憎んだ。

しかし師は別に氣にしなかつた。しかしその爲に師の處にくる若者のあるものは父や母に反對され、あるものは師の處にくることを禁じられ、又監禁同樣の目にあつた若者もあつた。しかしそれが爲に若者の師にたいする愛は增されても減じはしなかつた。自分も母に反對されたが、師のことをくはしく話したら、そんな方ならお逢ひしてもいゝと云つた。師は來る人をこばまず、去る人を追はなかつた。自分の正しいと思ふことを云ひ又行ふことをやめない許りではなく、月日と共にます〳〵師の立場ははつきりして來た。

師は益々權威あるもののやうに自分達には思へた。自分の心を不淨にすることより他何にも恐れないやうに見えた。そして眞心の光が他人の心を照らすことを邪魔するもの以外には師は寬大だつた。しかし眞心から出る光りでないものを眞理のやうな顏して、眞心の模造品を押し賣りするものには用捨をしなかつた。眞理の聲色をつかつてその爲に眞理にたいする人間の信仰を傷つ

けるものには用捨はしなかつた。

師はある僧侶の師を中傷して歩くのを聞かれた時、僧侶と云ふ職業に從事するものの憐れなことを話された。

「僧侶のうちにもいゝ人がゐるかも知れない。しかし僧侶と云ふ選ばれた人間で始めてなれるものに、僧侶の息子だからと云つて僧侶にするのは隨分まちがつた、よくない考だ。僧侶になりたくつてなりたくつて仕方がないものだけを僧侶にすべきだ。自分でまだ自覺が出來ないものを僧侶にするのも、僧侶と云ふ仕事を輕蔑した話だ。今では僧侶は寺の番人で葬式をするのに必要な職業をする男にすぎない。佛教でなければ自分が救はれない、坊主にならなければ生き甲斐がないと思つて坊主になつたものは今の世に千人に一人もゐないだらう。もしさう云ふ人が居たら、くだらぬ儀式も、檀家の御機嫌取もいや氣がさすだらう。今の僧侶は佛教で食つてゐる。それも檀家の御かげでやつと食つてゐる。勢ひ卑屈になりやすい。御機嫌をとらないやうに見せては機嫌をとり、金持の世話になる。僧侶と云ふ仕事を金以下の仕事にしてゐる。子供を澤山かゝへて生活難にくるしんでゐるものが多い。それでは佛教のありがた味を人々に傳へることは出來ない。たゞ善男善女が來世のことを知らないのにつけこんで來世でおどしつけて、金をしぼりとること

を職業としてゐる。今釋迦が出て來たら、一番よわるのは僧侶だらう。彼等が最も精神上の要求の強い若者の心を惹きつけることが出來ずに、最もさう云ふことに緣の遠い人間や死を前に見ないではゐられない死ぬことより他のことは考へない年寄達を惹きつけてゐると云ふことは恥づべきことだ。宗教は生きてゐるものの爲にあるものだ。自分の生命を最も貴く生かしたいと思ふ心から宗教は生れるのだ。生き甲斐を得たい爲に克ちたいので、更に生きたい爲に死のことを考へるのだ。無限なものに自己を同化させるためには自己をどう生かしたらいゝのかと云ふことが宗教心の起りだ。その要求を最も正しく、正面から生かした釋迦の教へを今の佛教の多くは出來るだけ歪にしてゐる。よくも出來たと思ふ程歪にした。末世の僧に逢つては叶はない。自分達はそんなものに拘泥してはゐられない。我等はたゞ出來るだけ自分の一生を有意味に生かし、そして大往生をとげたいと思ふのだ。大往生と云ふのは死を意味してゐるのではない。本當に生きて無限と合致したことを示してゐる。川が海と合致したことを示してゐるのだ。聖人の一生は何處で終つても大往生が出來るやうに常に用意されてゐる一生だ。朝に道を開いて夕に死すとも可なりと云ふのは、大往生をとげる用意が出來てゐる。いつ死が來ても、死にかつものをすでにつかんでゐるのだからと云ふことだ。この位まちがひのないことはない。我々は其處にのみ宗教のあり

がたみを見る。今神を見てゐる、今死んでもいゝ、さう云ふことを常に云へる人間は神の如き人だ。耶蘇は常に神を見てゐた、だから神が少しでも見えない時がくると、悲しんで祈つた。さう云ふ人は實にありがい人だ」

師はその時かう云ふ話をした。

「大きな樫の木があつた。それが木こりに切られることになつた。その木は山の大王で常に日の光を頂きにうけてゐた。彼は生を讃美し、太陽を讃美し、その他地上のあらゆるものと、天上のあらゆるものを讃美した。それ等のものは實際彼を生長させるために存在してゐるやうに見えた。しかし今や彼は木こりの爲に倒されなければならなかつた。彼はもう地上のあらゆる光榮から去らなければならなかつた。彼は悲しんだ。すべてのものが彼をなぐさめることが出來なかつた。「あなたは宮殿の棟木におなりになつて後世までも名譽をおのこしになるでせう」「それがなにになる」「きつと世界一の立派な神社の柱になつて、後世まで人々の讃美をおうけになるでせう」「馬鹿！　それがなにになる。俺は死ななければならない。この世のよろこびから遠ざからなければならない。お前達にわかれなければならない。それ所か、俺はどんなにながい間耐へられない苦痛をおはされ、そして何とも云へない淋しい死におちこまなければならない。死ぬ爲

に生れたものに呪ひあれ」ある者は死後の幸福をといた。「そんなものが信じられるか。誰かうゑ渇いた時に明後日になつたら隨分淸い水がおのめになりますと云つて慰める奴があるか」誰も默つてゐるより仕方がなかつた。樫の木は淋しさと怖さとに耐へ兼ねてしく〳〵泣いてゐた。この時、一羽の見なれない美しい鳥が何處からともなくとんで來た。そして樫の木のいたゞきにとまつて神を讃美する歌を唄ひ出した。樫の木は「默つてくれ、默つてくれ、神がなんだ」と云つた。「神なんかありはしない。あつたつて俺に用はない」しかし鳥はうたふのをやめなかつた。「あなたの心のうちにあなたの知らぬものが居る。それが私をよび、私に歌をうたはせる。あなたの知らぬものが、あなたの身のまはりにとんでゐて、あなたのうちに居るあなたの知らないものを抱きたがつてゐる」「俺の知らないもの、そんなものは俺にとつて何ものでもない」「そんな勿體ないことをおつしやるものではない。あなたは知らないが、それがあなたを救ふのだ」「俺は死なずにすむのか」「あなたは死ぬ、だが生きる。死と生きることは其處では一つになる」「よしてくれそんな寢言は」しかし鳥はもう樫の木の相手にならずに歌をうたひつゞけた。それを聞くと、だん〳〵死にたいする反抗心がなくなつてたゞさめ〳〵となき出した。淋しくはあるが、今迄よりも忍辱のあまき香りがその内に認められた。「私は淋しい、耐へられません、神樣私を

おたすけ下さい」「泣けよ、泣けよ、泣けよ、わが愛する大王よ、心のそこよりなけよ。そして身をへりくだれ、あなたの知らぬものの前に。知らぬものはあなたのうちにも、まはりにもある。あなたに死にかつことを知らしたがつていらつしやる。もう少しの辛抱、血の涙よ、ながれよ、角はとれ、反抗の心は去れよ。其處にあなたの知らないものの玉座をつくれ。へりくだれ、へりくだれ、御心のまゝにまかせきれ。大王よ、あなたの力でもどうすることも出來ないものを自由にする主の前にへりくだれ」樫はその言葉を聞いて益々泣いたが、その涙のうちにはいと高い人間の心にも、美しき涙をながさせ、そしてその人間の心をきよめるだけの力があつた。樫はその夜ねずに泣いた。そして自分の一生して來たいろ〳〵の我儘なことや、罪のことを考へた。枝や根をはり通し、よわきものをしひたげ、いたはらなかつたことを後悔した。彼は翌朝のくるのを待ち遠しがつた。皆におわびし、そして許しをこひたかつた。日が少し白みかけると彼は皆におわびした。そして自分が切られて倒れる時も、一本の草もなるべく倒さないやうに倒れたく思つた。彼は涙ぐみつゝうすれゆく曉の明星にわかれの言葉をつげ、覺悟をきめた。見よ。其處に太陽があらはれて、彼の頂をてらした。彼は一生の間にうけた恩を太陽に感謝し、そしてわかれをつげた。今や彼は死の覺悟が出來て、立派に死にたいと云ふ願が彼の心を領した。立派に死ん

で見せる。さう思つた。その時又鳥が來て彼の頂にとまり、彼の淸き心に勇氣をつける歌をうたつた。彼はすべてのものに恩をうけたことを今更に思ひ出し、それをくりかへし感謝した。其處に木こりが來て切り出した。彼は苦痛を出來るだけ耐へようとした。しかしとう〳〵こらへきれず、うめき出した。それが野山をうごかした。彼はもうたまらなくなつた。神をのろひたくなつたのを、苦痛の爲に呪ひの言葉を出す力さへなかつた。だが見よ。彼はやがて切り倒されようとする時、無數のかの見知らぬ鳥が彼のまはりにとび廻るのを見、うたふのを聞いた。彼もその鳥と一緒にうたをうたひ出した。生きた、生きた、本當に生きた。彼はさう思つた。その時、同時に彼が大音響を發して倒れた時だつた」

一二

師は始め可なり喰ひ辛坊の方だつた。そして美食を決して嫌はれなかつた。そして自分では粗食をされてゐたが、御馳走になることを嫌はれなかつた。しかし師を御馳走するのが仲間のはやりになり、その爲に皆が苦心するやうになり、その苦心に眞心以外のものが加はり、その他に或人は細君や、女中に小言を云ふのを聞かれてから、師は御馳走は食はないと云ふ主義を發表され、

そしてそれを實行された。君達の家の方と同じ物が食べたい、御女中さんと同じものが食ひたい。それ以上はお斷りする。師は自分では菜食された。しかし他では肉食を辭されなかつた。

しかし殺生は好かれてはゐなかつた。殺生は人間の價値を低めると云はれたこともあつた。殊に殘酷な殺し方や、生きながらの動物の解剖の話などはいやがられた。

「さう云ふ行ひは人間にたいする信用を低める。人間のあさましさを露骨に見せる。殺生の內にも人間らしさが何處かで出てほしい」學問の名で殘酷なことをするのは師はなほ嫌はれた。「理窟は別だ。たゞ淺ましい、心細い氣がする。せめて魔醉位はしてほしいものだ」と云はれた。

「お互ひに食ひつこしてゐる動物が殺されるのは自業自得と云ふ氣もするが、平和な動物を殺すのはその動物にたいしてすまない氣がする。少くも苦痛と恐怖を出來るだけ少なくしたい」

その時ある人が、豚を殺す時、熟睡してゐる時魔醉して殺すといゝと云つたのを皆が笑つた。

師は「私もよくさう思ふ。他にいゝ考は浮ばない。人間以外の動物を殺すと云ふことは、人間を殺すよりは遙かに罪が少ない。しかし動物に與へられた死の恐怖や、苦痛は我等の肉體に歸つてくる。それは同情に償ひする。さぞたまらないだらうと思ふ。私は食慾を滿足させる爲に殘酷

な殺し方をする話を聞くのは嫌ひだ。本當の人間は誰もその話をよろこんでは聞くまい。自分は鰻をさく殺し方を殘酷だと思つたが、なれた人はキリをさす時、鰻を魔醉させてしまふのだと聞いた時、いくらか安心した。自分の理窟は自分の不徹底な同情の仕方を笑ふ。しかし自分は少しでも樂に彼等を殺したい。彼等と人間とはちがふ。彼等はどんな殺し方によつて殺されても、あとは妄念はのこさない。其苦痛と死の恐怖だけをこの世に殘してゆくだけだから。しかし自分は世界が眞に平和になる時は、人間は今より殺生に神經質になり、菜食主義が次第に勢力を得るだらう。そして人間の肉を食ふ人間の心持を我々が察することが出來ないやうに、彼等は我々が、牛や豚や、羊や雞を平氣で殺して食つたのを不思議に思ふであらう。こんな平和な可愛い、美しい生きものを、どうして平氣で殺す事が出來たのだらう。彼等はさう思ふにちがひない。しかし其時は菜食主義が進み、もつと進んで科學的な食物が發明された時であらう」

「その時は人が科學的に滋養分をとり、味覺を刺戟してよろこぶやうになるでせう。今から考へると反つて淺ましい氣もしますね」

「さう云ふことはまあ、未來の人にまかせよう。餓鬼がこの世を支配してゐる時代に我々は生れてゐる。誰も餓鬼ないですむ時代の話は未來の人にゆづらう。我々はさう云ふ時代が來ても、

人間が人間の精神を最も高く動かした事實は、彼等の心の底をうごかし、彼等の心に慰めをおくり、彼等はさう云ふ先祖をもつことを名譽とすることを知つてゐる。出來たら彼等のためにも、見えない處で、働いておいて上げよう」

「どうすれば彼等の爲に働けるのです」

「それは心を美しくすることだ。眞理の爲に働くことだ。お互に仲よくすることだ。他人を責める前に自分をせめることだ。そして自分のわるいことをなほし、他人をせめないことだ。そして自分を出來るだけ自分の理想的人物にすることだ。見かけだけではなしに。そしてこの世のうちから寶石をとり出す人のやうに、人間の精神の內から、崇高なものと、美しいものをこの世に生かすのだ。自分のいやなことは他人にさせず、そして自他の幸福を最も深い處でむすびつけて、そして他人と心を貴くしてつきあへるやうにし、他人を不幸にせず、自分を賤しくせずに、出來たら他人を幸福にすることだ。自己を本當に生かし切ることが、人間の光榮を生かし切ることだ。何にものにも打ちかたれない最後の勝利をしつかとつかむことだ」

「私達にその勝利はつかめますか」

「つかめる。この世の眞心と一致出來るものは、神の軍隊に加はるものは、負けたくも負ら

れない。其處では本當の意味で、勝ちは勝ちで、同時に、負けるが勝ちなのだ」

「先生はその軍隊に加はつていらつしやるのですか」

「勿論、加はつてゐる。自分の心の底のものはさう云つてゐる。だが自分の内にはまだ〳〵不德なものの芽が淨化されずに澤山殘つてゐる。それをあまり增長させると危險がなくもない。だがその時は祈るのだ。お許しを願ふのだ。すると又道はひらける。自分のまはりに自分を守護する、負けざるものの流れを感ずる。それに身を任せ切ればそれでいゝのだ。その時御心の如くならせたまへ、さう云ふ氣が本當にする。それが一番よく、一番本當の氣がする。さう云ふ氣がまるでしないで、俺のやうな仕事をしようとするものがあつたら、その位、まぬけな、馬鹿氣た心はあるまい。それこそ空虛な者だ、權威のない僞善者だ。富めるものに安心を安賣りする惡魔の弟子だ。富と五慾にいろ目をつかふ他人の良心に媚びるたいこ持だ。俺はそんな人間ではない」

一三

或時、師の所にある青年が來た。そして自分は人生に就て煩悶してゐるのだと云つた。師はその青年の顏をじろつと見てゐたが

「君は先づ女のことから卒業したらいゝだらう」

青年が不平さうな顔をして歸つたあとで師は云つた。

「煩悶にもいろ〳〵ある。女を得られない所から起る煩悶も、金や、名譽を得られない煩悶もある。そんな煩悶は俺の處にかつぎこまれても困る。それ等の煩悶も、その人が眞面目な人ならば、決して無意味にはをはらない、指す所は一つだ。人間の心はあてにならない。もつとあてになるものを求めたいと云ふ氣がその内の何處かに動いてゐる。しかしそれの動いてない、樂をしてうまい汁を吸はうと云ふ人間は俺の所に用はないはずだ」

或人が菅原道眞は「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん」と云つたが、最後が不幸だつたのはどう云ふわけですと云つた、

「道眞の最後が不幸だつて、それは凡人の見方だ。道眞自身、どう思つてゐたか誰が知らう。それは天皇のことや、都のことを時には思ひ出し淋しくは思つたらう。しかし本當に心を誠の道に叶へることが出來た人だつたら、其處に又神の道を見出したらう。しかし道眞のかの歌はまだよわい。心が誠の道に叶ふ時は、それは同時に祈りだ、祈り以上だ。祈りが既にきかれたことを意味してゐる。神が守る處ではない、神と一緒にゐるのだ。神と一緒に仕事をしてゐるのだ。道

眞もそれを本當に感じた瞬間はあつた人だらう。しかし歌にする時、理窟が入つたのだ。心が誠の道に本當に叶ふと云ふのがすべてなのだ。其處にゆきたい爲に祈るのだ。かう云ふと理窟に見えるかも知れないが本當だ。神と一緒にゐる時は、神を忘れてゐる。少くも神にはなれてゐる時、神のもとに歸る許しを得たい時、一番祈りたい氣持がする。それから神から見すてられようとしてすがりつく時に。神と一緒にゐる時は自由に生きればいゝのだ」

師は重荷を脊負つて歩いたあとでかう云はれたことがあつた。

「重荷を脊負つて歩くと、きつと大國主の神を思ひ出す。同胞につかへてゐる氣持だ。苦しい、實に苦しい、自分だけが同胞の爲に苦しんでゐるやうな氣がする。なぜ自分だけが苦しまなければならないのだ。そんな氣さへする。しかし何か自分以上のものがゐて、どうしても荷を目的地まで脊負はないでは許してくれない。大國主の神は皆におくれて一人苦しんで歩いてゐた。だから憐な兎にも思ひやりが出來、遂に姫も手に得たのだ。勿論、姫を手に得ないでも大國主の神は嘆きはなさらなかつたらう。そして姫の荷物を持たされて默つて歸つて來られたかも知れない。ともかく大國主の神は重荷を負ふ神樣で空手の神樣でなかつた。だから重荷を負ふ時、始めてあの神樣のありがた味がわかるのだ。默つてあとからこつ〳〵重荷を脊負つて一足々々全身の力を

入れないと歩けない姿は美だ。自分は重荷を脊負つて歩く時に、あの平和な忍耐強い神を思ひ、勇氣と慰めを得る。大國主の神を大黒さんにしてあの俗な姿を與へたのは俗な藝術家の罪だ。誰か藝術家はそれを救ひ出す義務がある。大國主の神は富の神とするよりは、同胞の爲に重荷を負ふ神にする方が、似つかはしい方にちがひない」

一四

師は働くものの味方だつた。人間の爲にこつ〳〵働くものの味方だつた。奇拔なことや、珍奇なことは嫌はれた。平凡に見えてその內に味はひつくせないものがあることをよろこばれた。人間にとつて一番大事なのは日常生活で、それさへしつかりつかんでゐれば、いざと云ふ時に益々光をはなつものだと云ふことを知つてゐられた。師の生活は正しい日常生活の連續で、別に奇拔なことは何にもなかつた。奇蹟らしい話はたゞの一度も聞かなかつた。かの盲目になつた父の話の他は、それさへ師は失敗に終つたやうに思はれた。「神を見るものには奇蹟はいらない。たゞ如何にせば神を見ることが出來るかと云ふことだけが問題だ。自分は奇蹟のうちに神を認めることは出來ないものだ。耶蘇が死人をよみがへらし、パンをふやし、海の上を歩き、盲目や、いざ

りや、惡鬼にとらはれたものをなほし、無花果を枯し、三日目によみがへつたとしても、その事實の內に神を認めることの出來ないものだ。それより山上の聖訓やいろ〳〵の言葉や、人の子らしい行の內に神を見るものだ。神は奇拔な行ひのうちにあらはれない。自然の法則を變化する所にあらはれない。むしろ自然の法則に從順な時に顯はれる。自然の法則の前に跪づける時に神はあらはれる。神は自然の法則を肯定する。自然の法則を無視するものを嫌はれる。自然の法則はどうあらうと、神はそれを超越されてゐる。奇蹟がなければ生きられない程、神は意氣地なしではない。自然に勝手なことをさしておく、しかし神の心を心にするものは生き甲斐を得られるのだ。其處が面白い處だ。死人をよみがへらさないと信者を得られない宗教よりは、信者を殺してもなほ信者をうる宗教の方が、より大きい奇蹟を行つたと云へるのだ。其處に宗教の神祕がある」

「一時的の興奮は宗教心のないものにも得られる、だが日常生活に、常に希望をもちこたへ、こつ〳〵自分の信ずる道に進んでゆくことは信仰のあついものでないと出來ない。世界はさう云ふ人間によつてたもたれるのだ。彼等は辛抱づよく、勤勉家でつゝしむことを知り、常に反省して道にはづれることを恐れる、彼等は人類の柱だ」

「平和な生活の深きよろこびを知るものは人類の基礎だ。平和な深いよろこびを知ると毒々しいよろこびの卑しさと、精神や身體を害することを知る。殺伐なこと、酒をのむことや、放蕩が眞の深いよろこびを損ねることを知る。吾等はかうして毎日規則正しく生きる、則ち一心に働いたり、靜かに散歩したり、よき人と話したり、よき本をよんだり、このことに深き幸福を感じられるもので始めて、他人の運命を氣にすることが出來、他人の幸福と平和を望むことが出來る。その人は他人の自由と時間と運命を尊重することを知り、平和な幸福を味はふことの出來ない人人に心からの同情をもつことが出來るから。他人を不幸にしなければよろこべないもの、そんな人に平和なよろこびはわからない。自分達のうちにも不純なよろこびがある。だが平和なよろこびを本當に知れば、不純なよろこびの賤しい、そして一時的な、輕蔑すべきよろこびだと云ふことを知る。そして平和なよろこびに歸つて始めて深いおちついたよろこびを知る。平和に働けるもの、平和に勉强出來るもの、平和に人生のことを考へ萬人の幸福のことを考へることが出來るもの、さう云ふ人を多く有する社會は最も健全な社會だ、人類はさう云ふ社會を愛してゐる。人類過半がさう云ふ人によつて滿され、深い平和なよろこびをお互によろこぶやうになつたら、人類はどんなによろこぶだらう。その時は道ゆくものに、兄弟のやうに笑ひながら會釋し、よろこ

びと悲しみをわかつことが出來るであらう。宗教は百人でも多すぎる。しかし平和な人間は百人が五十人でも少なすぎる。百人が百人でも多すぎはしない。光りは照らされるものの爲に存在する。宗教家は眞心をもつ人の爲に存在する。眞心をもつ人に世界中の人間がなることは理想である。さう云ふ時が來てもよろこべるものは平和な人間だ。淺薄な人間は事件が起るのをよろこぶ、他人に惡事をなすものをよろこぶ。しかし平和な民は萬人の平和と幸福をのぞむ、萬人が規則正しく生きても少しも閉口しない。むしろ心からさう云ふ時のくることをのぞんでゐる。兄弟、萬人と兄弟の如く生きてよろこべるものは平和のうちに深いよろこびを見出し得るものだ。自分はさう云ふ人を心から愛する。さう云ふ人のことを思ふと涙ぐむ。さう云ふ人がゐてくれると人間は望みをもつことが出來る。その人は人類の朽るのをくひとめる人だ」

「趣味と云ふことは馬鹿に出來ない。人間の上等、下等は趣味で大概きまる。趣味で人間は自殺したり人殺ししたり仕兼ない。惡を好んだり、不健全なことを好んだりする若者は、他人を不幸にすることを傲りにする。趣味で泥棒もすれば、贅澤をしたり、冷淡を賣りものにしたり、惡者の眞似をしたりする。下等な趣味を鼓吹する文學、美術、音樂を聖人が憎まれるのは、人間の心を荒くし卑しくし、思ひやりをなくし、がさつにし、惡魔的にするからだ。最も趣味のよき人

は芝居はしない。常に本心から動く、精神が最も直接にあらはれてゐる。それにふれた人は眞面目になり、本氣になり、眞心をゆり動かされる。そして心を淸められ、美しくされ、思ひやりが深くなり、生々した心をもち、心を正しくし平和を愛し、人間と自然にたいする、愛と信仰を深める。聖人に趣味のわるい人はない。似而非宗教家に趣味のわるくない人はない。聖人は趣味を超越する。趣味の臭みから脫しきる、樣子ぶつたり、見かけをかざつたりはしない。常に正しく、正直で、愼み深い。似而非豫言者は神を恐れないと同じく、下品を恐れない。趣味が見えから出でて、結果を意識してゐる、無邪氣な所がない、赤子の純潔さがない、其處に賤しさが顏を出してゐる。そして人間の心を我利我利にして淸くしない。趣味の卑しいものは人間の心を純粹にはしない。趣味の卑しくない人は心の卑しくなれない人だ。そして行ひも出來るだけ卑しさから遠ざかる。かゝる人も人類を腐蝕から救ふ人だ」

「日常生活の美しい人。他人を責める前に自己を反省し、心を常に道からはなさないやうにつとめ、少しでも自分が賤しい心になると氣がとがめて、改めないではゐられない人。その人は人類の寶だ。自分のうちにある人類に與へられた寶を掘出す人だ。かゝる人はいつか人類のほこりになる。その人はそばにゐる人の心を高め、淸め、人類にたいする希望を取戻す人だ」

これ等の言葉は師が自身に就て云つてゐるやうな言葉だ。實際師のやうな方は人類の寶であり、人類の墮落を喰ひとめる人だ。自分達は師によつてたしかに墮落から喰ひとめられた。師がゐなかつたら、自分達は俗な人間としてこの世に人間に愛想をつかしつゝ、生意氣な心をもつて生きたらう。そして他人を不幸にすることを自己の特權のやうに思つたらう。

自分は師にあふまでは、惡人に同情をもつて正しき人間に反感をもつ、天探女が自分の内にゐた。

師と一緒に歩いて罪人を見た。自分は罪人に同情した。その時師はかう云つた。

「罪人に同情するのはいゝ、しかし更に善良な人間をありがたがらなければいけない。惡趣味な人はやゝもすると罪人に同情して善人を嫌ふ。自分の内の罪の芽を可愛がりすぎるからだ」

或人が善人と惡人の區別を聞いた。

「善人は他人を責めようとする時、自分を省みる、そして同じ芽が自分にあることに氣がつくことで、他人を責める勇氣を失ひ、同時に自己を憤しむ。そして他人を思ひやり、他人に寛大になる、無理もないと思ふ。そして反つて責めようとした自分の厚顏しさを感じる。惡人はその反對で、自分が惡いことをする時、他人の惡いことをもつて來て自分の云ひわけにする。そのくせ

他人を責める時自分のことを忘れる。他人を憎むに急で自己を省みる暇がない。自分のすることは何でも尤もで、他人のすることはなんでも悪く思はないではゐられない。思ひやりがなく、他人に不快を與へても自分だけは不快を感じない特權をもつてゐるやうにきめる。自己を責めることを知つてゐるものは善人で、他人許りをせめるものが惡人だ。自分の權利を知つてゐて義務を知らず、自分の快樂を求めて他人の不快に氣がつかず、他人のことに思ひやりが皆無で責めること許りきり知らないもの、それが惡人だ。惡人は世界が自分一人の爲に存在するやうに思ひ、自分が仕へることを知らない。善人も一面利己心をもつてゐる、しかし愼しむことを知り、他人の心にたいして禮義を知る。善人も惡の芽はことごとく持つてゐる。だがそれを持つてゐるのを特權とは思つてゐない。その爲に反つて他人を思ひやり、愼むやうになる。他人を責める前に、他人を責める資格のないことを知る。彼はまだ道を自覺してゐない。善人にはまだ權威はなく、ややもすると臆病で、消極的だ。だが我々は善人をありがたがらなければならない。それは人類のうちにはえる雜草をくひとめてくれるから。彼は自分のうちを雜草のはえるまゝにしておかないから。惡人は怠惰な百姓で、雜草をいたる處にひろげて恥ぢないが、善人は勤勉な百姓だ、我々はそれによつて平和に生きてゆくことが出來るのだ」

「善人よりももつと尊敬すべき人はどんな人ですか」

「それは權威ある人間だ。自己を消極的につゝしむ許りではなく、人類の爲に更に神の爲に積極的に働く人だ。彼はもう自分のうちの雜草を氣にする許りではない、自分のうちに與へられた、よき種をいたる所にまいて、人々の心の糧となる人だ。道をとく人だ、神をとく人だ。道と共に生きる人であり、神と共に生きる人だ。則ち孔子や、釋迦や、耶蘇のやうな方だ」

「それ等の人の心には雜草はないのですか」

「いや、ないことはない。自分に云はすと、耶蘇は罪ある女を石でうつ資格の自分にもないことを感じてゐられたやうに思ふ。釋迦八相記にはある女が家出したあとの釋迦を夢みて子を生む、その子は釋迦でも救ふことの出來ない男になる。弟子達はその人を釋迦の子として遠慮してゐる。それは何處まで本當の話か知らない。恐らくつくり話だらう。しかし面白い話である。どんな人でもわるい種を絶對にまかないとは云ひ切れない。孔子は七十になるまでその爲に苦しみ苦心された。ソクラテスはある人に淫慾の強い人相をしてゐると云はれ、それを肯定して、しかし更にそれにうちかつものをもつてゐると云つてゐる。彼等は善人よりも、もつと愼しみ深い。しかしそれは更によき種をまく力を得る爲だ。人類全體を救はうと云ふ本願が強いのだ。その光に照ら

される時、その他のものは消えてゆく」

或時或人が

「性慾を惡だと云ひますが、皆が性慾をつゝしんだら人類は滅亡しはしませんか」と云つた。

「そんなことを云ふ奴はいくらでもゐる」師は怒鳴るやうにさう云つた。「ある葬具屋が、衞生々々とあんまり云ふのをよして下さい、人が死ななくなると困りますからと云つたとしたら、君は笑ふだらう。なんでもすぐ絶對にもつて行つて話をしたがる人間には道のことはわからない。殺生がいけないと云ふと、すぐそれなら人間はどうして生きてゐられるのです。動物を殺すのがいけなければ植物を切るのもよくないでせう。そんなことを云つて得意になつてゐるものがよくある。それは道を知らないものだ。本當に人生のことを考へてゐるものはそんなことは云はない。人間に百貫目のものをもつて歩けと云はないのと同じことだ。大男と云つても一丈はないでせう。大きな杉と云つても天にはとゞかないでせう。そんなことを云つて得意になるものはおよそ道に遠いものだ。道に叶つた生活をしようとするものは、自分の努力の足りないことを常に感じる人だ。性慾は恐ろしいものだと知れば、自分の慎しみ方の足りないことを思ふ。その慎しむことの如何にむづかしいかを思ふ。自分が如何に道に遠いかを思ふ。そして自分の内にある性慾の恐ろ

しさを感じる。やゝもすると他人の運命を傷つけさうなことを恐れる。決して人類の種切れを恐れる程、さきつ走りはしない。足元をわすれて、茶化してすましてはゐられない。衞生や、養生や、醫者や、藥がいかに進歩しても死神は安心してゐる。不衞生、不養生のなくならないことも知つてゐる。道は近きより始める。千里歩くものは一歩より始める。そして一歩より本氣になつて歩く、決して千里さきにつく時のこと許り考へて足もとを忘れはしない。そして一歩々々に生き甲斐をも感じれば、淋しさも感じ、後悔もすれば、傲りも感じ、よろこびを感じる。たゞ自分の足であるかず、汽車の上で居眠りしてゐるものだけが、千里さきのこと許り考へて、足もとのことを忘れる。足もとのことを考へて一歩正しくふむことを考へるもののみ道のことがわかり、人生のことがわかるのだ。思ひつき許りで、のんきにその日その日を送るものには何もわからない。人生に與へられた寶を本當に見もせず、味はひもしないのだ。今すれちがつたのは耶蘇と云ふ氣ちがひだ、道理でへんな顏してゐると思つた。それでもう話しがすむのだ。君は地球にゐたか。ゐたよ。面白かつたか。くだらなかつた。それで一生がすぎるのだ。問題をすぐ極端にもつて行つてすましてゐる人間はそんな人間だ。ありがたいとか、勿體ないとか云ふ氣もちがわからずに一生ををはるものゝ、この世に生れたのは寶のもちぐされだ。君はそんな人間にならないや

うに用心しないといけない」

一五

或人が師にかうきいた。

「國家と眞理と矛盾した時、どつちに從ふべきですか」

「人間と神と矛盾する時、人間は神に從はなければならない」

又、師はかうも云はれた。

「眞に國家を愛するものは、國家の眞理にそむくことの遠いのを恥ぢ、どうかして少しでも眞理に國家を近づけたいと望むべきである」

又云はれた。

「國家さへもち出せば、眞理でも引こむと思つてゐるものは、つぼを岩にぶつければ岩がわれると思つてゐるものだ。つぼを大事に思ふものは岩をさけなければならない」

又云はれた。

「眞理を張子だと思つてゐるものは、金に仕へてゐる人間だけだ。金に仕へない人間は、眞理

の恐ろしく強いのを知つてゐる。眞理にあまり背くものはたふれる。眞理にとりのこされた國家は常に革命を恐れなければならない。眞理の力は人が自覺する自覺しないにかゝはらず、恐ろしく強いのだ。そして人の心をいつのまにかひきつけて放さない。それを知らないものだけが、眞理をおしのけても國家の爲につくさなければと云ふ。それは私は無鐵砲の惡漢です、だから愛して下さいと云ふのと同じことだ。私達は出來るだけ國家を正しいものにしたいものと思ひます。たゞその力がないのを恥ぢ、日夜心配してをります。どうしたら國民を不幸にせずに眞理に近づくことが出來るでせう。眞理を尊敬する點ではまけないつもりです。又眞理に背く國家の滅亡することを知つてゐます。少しでも我が國を眞理に近づけ、立派なものにし、そして國民の生活を少しでも高め、幸福にしたいと心がけてをります。さう云ふ國家主義でなければお話にならない。國家が眞理と矛盾してゐるのを得意にするやうな愛國家は、國を損ねるもので、同時に人間の價値をおとすものだ。さう云ふ愛國心は今後通用しない時代がくる。人々はもつと眞理に近づかないと承知の出來ない時が、ひし〳〵とせまつて來てゐる」

或人が革命はいゝものですかと聞いた。

「憎惡や慾心からはいゝものは生れない。だが、愛や、眞理から生れたものは、我々は愛しな

いわけにはゆかない。二つのものが多くの革命には結びついてゐる。そして悲慘なことが起りがちだ。悲慘なことはどんな場合でも私には好きになれない」

又師は云つた。

「嘗て眞理を重んじすぎた爲に亡びた國はない。奢侈や、淫蕩や、暴力や、無道壓制の爲に國はつぶれた。しかし眞理の爲に國をつぶした國はない。もし眞理の爲につぶれた國があつたら、その國は世界に勝つだらう、さう云ふ國が一つもなかつたのは惜しいことである」

又云はれた。

「溫度の低いものが溫度の高いものに熱を與へることは出來ない。眞理に遠いものが眞理に近いものを感化することは出來ない。もしこゝに最も眞理に近く生きてゐる國民があつたら、他國の人はその國の國民を羨み、自國も一日も早くさうなることを望むであらう。又さうならないではをさまらないだらう。世界の王とならうと思ふものはまづ自國を最も眞理に近い國にしなければならない。野蠻國は外から滅亡されなければ內から滅亡する。ある國の眞の文明が發達すればする程、その國の文明が他國の文明を進めることは、より溫度の高いものが、より溫度の低いものに熱を與へるやうなものだ。太陽は萬物を溫めようと思はないでも萬物をあたゝめてゐる。聖

人もさうだ。正しき國もさうだ。國となるとちがふと思つてゐるのはまだ十分に生長した國がなかつたからだ。眞理にちがひはない」

「眞理に近い國とはどんな國です」

「其處では人間は金や餓の爲に働かずに、義務や、同胞の爲に働く、その上自己を生かす爲に働く、病人の他は義務勞働以上人類の爲に働く、かくて自分も兄弟も、衣食住の心配なく、餘暇をたのしむことが出來る。病人は安心して病をやしなひ、各人は自分に適當な仕事をし、他人の運命や感情を尊敬し、肉體的不具者は勿論、精神的不具者も出來るだけいたはり、パンの爲に共同して働くと同時に神の爲に共同して働く國だ。私は今にさう云ふ國がこの世に生れることを信じてゐる。今いろ〳〵の人類的煩悶は其處におちつかなければをさまらないことを示してゐる。利己心をたきつけて、其處にこぎつけようとしてゐるものは、よし其處にこぎつけても、同胞の爲に働くとか、生きるためによろこんで自ら進んですべき義務勞働のありがた味を根こそぎ粉碎してしまふ。だからいや〳〵働くことになり、從つて勞働を强制する機關が必要になり、武力が必要になり、人々は暴力を恐れてのみ働くことになる。萬人が自らを奴隷におとすやうになる。この事は十分恐れなければならない」

或時師は理想國にあこがれてゐる、怠惰者で快樂主義の人に笑ひながらかう云つた。

「理想國が來たら、働かずに寢て食つてゐられると思つたらまちがつてゐる。今は金さへあれば遊んでゐられる。しかし理想國では誰でもともかく働かなければならない。其時は今より働くことは名譽になり、樂になり、そして健康を損ねないことになるだらう。そして働くことが人類に對する務を果しつゝあると云ふ自覺を與へてくれるだらう。しかしともかく働かずには食つてはゆけない。それから理想國が來たら、金で女を買ふことや、贅澤をすることや、快樂を得ることは今のやうには出來なくなる。さう云ふ時代が來て本當によろこべるものは平和の民だ、日常の生活に深いよろこびを感じることの出來る人間だ。道樂氣で生きてゐる人間や、なんでも奇拔な事をしないと退屈する惡趣味の人間はさう云ふ時代が來たら困るだらう。我々はさう云ふ時代が來ないと困る人間でありたい。來ても困る人間にはなりたくないものだ。來ない間だけ來るといゝと人一倍叫んでゐながら求めてゐるものが實際來るのを內々恐れてゐるものがあつたら、それは醜い。豫言者よ出よ。天才よ出よ。かう叫んでゐる多くの人間は、いざ本當の豫言者や、天才が出ると、一番先に惡口を云ふ人間になり易い。彼等は本當に求めてゐるのではなくつて、求めてゐる顏してゐるのだ。內心は出て來ないことを望んでさへゐるのだ。我々はそんな人間にな

りたくないものだ」

一六

師は或日病氣になつてねてゐた。

自分達はかはり番に師を見舞ひ、食ひものや、藥の世話をした。師は「ありがたい」と云つた。

「自分は君達に親切にされる資格があるとは思へない。自分は勝手なことを云ひ、勝手なことをしてゐる。それを君達が本當によろこんでくれるだけでも何かに感謝したい。自分は今度の病氣は、自分の不攝生から來てゐることを知つてゐる。自分の心がけのいたらぬ所から來てゐることを知つてゐる。それなのに君達は親切にしてくれる。そして心配してくれる。自分はすまなく思つてゐる。そしてうれしく思ひ、ありがたく思ふ。本當に自分の罪を知つてゐるものだけが、本當のすまなさとありがたさを知るものだと云ひたい位だ。自分を正しいと思ひ込みすぎるものにはこの氣持はわからないだらう。さう云ふ人間はどんなによくされても、その方があたりまいだと思ひ、少しでもよくされ方がたりないと不愉快を感じる。自分は一度、自分のやうな人間は死刑にされても苦情の云へない人間だと本當に思つたことがあつた。その時、自分は自分に悲觀

したが、さう思ふ迄は自分は罪にせめられてゐた。しかしさう思ひこんだ時自分は涙ぐんだ、そして自分のやうな人間の平和に生きてゆかれるのをすまなく思ひ、ありがたく思つた。そして心の底から淸められるのを感じた。人間に與へられたいろ〳〵の感じは、皆どれもそれ相應に深い、不思議な感じを持ち、人の心を淋しくしたり、喜ばしたりしてくれる。しかしこの罪の自覺からくるへりくだりと、自分が不當に恩寵をうけてゐると云ふありがたさとの感じは、內でも不思議なものの一つと思ふ。この感じの深さは人間がつまらぬものではないと云ふ自覺を與へてくれ、何か人智ではわからない深い處に神のやうなものが居て、その前に我等が跪づくことを望んでゐられるやうな氣がする。人間以上の力を知らずに傲然と生きてゆかれると思つてゐる金に仕へてゐる人間が、あさましく又おろかに見えるのは、この宗教的な感謝と云ふ感じを知らず、大きなものに身を任せると云ふことを感じないからだ。人間は一人で歩いてゆくにしては少し小さすぎる。無限に達した人間と云ふものは、大きなものから自分を緣切りにした人間ではなく、大きなものに自分を常に結びつけておかないと淋しくつてたまらない人間だ。其處からのみ人は生きてゐることを無意味と思ふにはあまりに深い感じを與へられてゐることを知るのだ。何處へころんでも、どうしても其處までゆける人間はめぐまれた人だ。平穩に生きてゐても、よきことをして

も、罪の内にてさへ、死刑の宣告を受けても、病氣や、死を前に見ても、恐怖その他の淺薄な感じのためにさまたげ切らないで、深いものを感じ、其處からくる感じに忠實になれるものは私達の師だ、希望だ、私達はさう云ふ人を心からありがたがる。さう云ふ感じをまるでもたずに、世の中をどうしよう、かうしようと云ふものは五月蠅い人間だ。恐ろしい人間だ。彼等は何にも知らないのだ。自分の求めてゐるものさへ知らないのだ。求めてゐるものが來た時、自分でそれをぶちこはすことさへ恐れない人間だ。深い處からわき上る感じに忠實になり切れることがすべてだ。其處では萬人は同胞だ。そして其處ではおそらく萬物は又同胞だ。其處にすなほに歸つてゆくこと、それが我等の願ひだ。しかし苦人で歸つてゆけるものはなほ我等の希望になるかも知れない。どつちにしろ我等はそのものの前に跪いて、御心の如くならしめ玉へと祈るより仕方がない、そしてその祈がきかれ、自分のその瞬間に生きてゆく道のわかるものは幸福だ。さう云ふ人のみ、權威ある人だ。その時の一擧一動、一言一句は神と共にゐると云つていゝ。自分達は不斷は神を要せずに生きてゐる、その時の自分達は權威のない、どつちつかずの人間だ。だが何かのきつかけで眞心が生きると、見よ、其處にはいつのまにか神がゐて下さる。その神を感じるものは何にも恐れない。權威は自分から出るのではなく神から出るのだ。その人の日常生活が大事だ

と云ふのは神を自分の内に宿すことに恐れをいだかず自分の内にある神の宮居を常に清めて、いつ神が來て下さつてもいゝやうにしておくのだ。宮居さへ本當に清まる瞬間には其處に神はいますのだ。罪の本當の自覺や、感謝や、ありがたいと云ふ感じはこの神の宮居を本當に清めてくれる。私心が其處を穢さなくなる。だから本當のうれしさを感じ、皆に感謝し、皆の爲に本當に自分の一生をさゝげたい氣になる」

師は何か云はうとされたが、

「熱が上るといけません」と誰かが云つた。

「ありがたう。身體を大事にして一日も早く起きることにしよう。實際かうしてねてゐると君達が今迄よりも一層たよりになる。病氣しても誰もたづねてくれず、食ひものもない人もあるだらう。自分はさう云ふ人の心持を察して、さう云ふ人の幸福をいのらないわけにはゆかない。誰も來てくれないでも苦情は云へない。私なんかはまだ少しは精神の修養をした人間だ。それでさへ、誰も來てくれず、米を買ふ金もなかつたら、心細くないことはない。私よりもつと病がひどく、私よりもつと淋しがりの人で、誰にも見舞はれずに死んで行く人もあるだらう。私はさう云ふ人に自分が冷淡なのをすまなく思つてゐる。自分はさう云ふ人の爲に祈るが、其祈も力ない者

だ。私は自分の德の足りないことをこの頃は實によく感じてゐる。自分の意氣地のない爲に、どの位自分は自分をつくつたもの、及び兄弟にたいしてすまないことをしてゐるかわからない。德が足りないのだ。そのくせ、もつと力を出せるくせに出さないのだ。自分は病氣がなほつたら、もつと積極的に働きたいと思つてゐる。しかしすべて御心に任せるより仕方がない。自分の持つてゐる光を、より强くするには根本からかへてゆかなければならない。もつと愼しんで、もつと本氣になつて修養しなければならない」

自分達は歸りに友達と話しあつた。師にあゝ云はれると自分達はどうしたらいゝのだ。

「太陽でさへ自分の光りにはまだ滿足してゐない。自分の光の足りないことを憂へてゐる」

自分は日記にそんなことをかいた。

自分はその後暫くして何かの時師に、太陽でも自分の光りには滿足してゐないでせうと話した。

「それはさうかも知れない。しかしもう太陽になると、七十歳以上の孔子のやうなもので、自分の光のことは問題にはしなくなるだらう。實際、萬物は今の太陽の光りにちやんと調和してしまつた。今急に太陽がもつと光り出したら、萬物は面喰つてしまふ。太陽の德はあまねくゆきわたつてゐる。自分の光りに滿足する滿足しないと云ふ問題はもう通りこして、たゞ自然に悠々と

生きてゐればそれが同時に最上の生活に入つてゐる。來るものはこばまず、去るものはおはず、自分の生活のまちがつてゐる、まちがつてゐないと云ふことを考へる必要もなく、自分の存在の有意味、無意味と云ふことも問題にならず、たゞ悠然と生きてゐる。我々はまだあゝなれないのだ。晩年の釋迦や、孔子、老子はあゝなれたかも知れないが、さう云ふ氣持はまだ自分達には少し遠い氣持だ。身がその境に入らずに、心だけさうなると云ふわけにはゆかない。又それが反つて自然なのだ。我々は光りの足りないことを氣にしなければいけない。しかし太陽になればそれを氣にしないでいゝのだ。もういゝもわるいもないだらう。しかし君達には太陽はまだ自分の光に滿足してゐないと云ふ意氣込みが必要だ。太陽がもつと光つたら、世界はもつとかはつてゐた。どうかはつてゐたかは知れないがかはつてゐた。そして又太陽はそれをよしと見られたであらう。自然がいゝ、概念や、警句にとらはれてはいけない。君が太陽が自分の光りに滿足しないと云ふのに興味をもつたのは、その事實よりは、その云ひまはしに得意になつたのでは面白くない、しかし見やうによればうそではないから、それもいゝだらう。さう思ふのが、君を眞劍にさせ、本氣にさせるならば」

自分はさう云はれたらなんだか恥かしい氣がした。

一七

師の病氣はまもなくなほつた。師は病人には前より同情が厚かつた。自分達が病氣になると、よく見舞に來られた。その他看病する人のない病人を自ら看病されたこともあつた。師は死んでゆく人を慰めるには困つてゐられた。そこで死の問題は普通の人には殆ど話されなかつた。さう云ふ話をしても慰めにはならないことを信じてゐられた。そして師は方便にも自ら進んで嘘をしやべることは出來なかつた。自己に信じられないことは云へなかつた。「南無阿彌陀佛」ととなへると極樂にゆけると云ふのは本當でせうか」と聞かれた時、師は嘘だとも本當とも云へなかつた。「南無阿彌陀佛と云ふとありがたい氣になれれば、救はれるでせう」と云つた。

或時、罪にせめられてゐる老婆が、「地獄と云ふものは本當にあるのでせうか」と云つた時、師は云つた。「安心なさい。地獄はありません。人間はこの世で生きただけで十分なのです。その上に地獄に入れられるやうな目にあふことはありません。神様はそんなにしつつこい無情な方ではありません。しかし心がやすまるなら、南無阿彌陀佛を云つたらいゝでせう」「天張り人によつて小乘も必要になる。偶像も必要になる」師はある時、さう云つた。「其處では寺院が必要

だ。宗教が一般的になるには偶像が必要だ。人々がその前に跪づけるものが必要だ。今の一般の人智ではそれが必要だ。たゞしその寺院を守るものは德のある人でなければならない。自分もその木像を崇拜出來る人でなければならない。眞心を動かさずに、木像を禮拜して、一心に木像ををがむものを腹の中で笑ふやうな人ではいけない。僧侶も人間だが選ばれた人間でなければならない。自分の一擧一動が神をけがすやうな人間は僧侶にはなれない。一擧一動神の前に畏れないではゐられない人間でなければ。今の多くの僧侶は僧侶の資格がない、從つて寺院は神の住み家でなく惡魔の住み家になつてゐる。心ある人は信心深くなることが出來ない。信心深い人を愚婦愚民と思はないわけにはゆかない。之は僧侶が口だけ僧侶で、眞心は金に賣つてしまつてゐるからだ。本當の宗教家が出ればその住居は寺になる。ありがたがる人間は愚婦愚民ではない、最も正しい人間になる。其處では方便は不必要になる。空氣が自づと神聖になり、人々は心から何かの前に跪づきたくなり、其處に神がのぞまれてゐるやうに感じる。多くの人はその理解出來ずに禮拜してもその人は自づと淸まつてくる。其神は不淨なことをいむ。不淨な金や、行ひや、人をいむ。其處では金を多くをさめるよりも眞心を貴む。行ひを愼しむものにでなければ御利益を安賣しない。其處で理解出來ないものも、ありがたさを本當に感じることが出來る。さう云ふ寺院

は今の世にもあつていゝのだ。どんな粗末な寺院でも神がその内に居る寺院は空氣がちがふ。眞心を動かさなければ神はをがめない。其處にくると金のことなぞは忘れてしまひ、本當に神の御旨のまゝに生きなければすまないと云ふ氣に自づとなるのでなければ本當の御利益をうけたとは云へない。金まうけの取りつぎをする神樣は本當の神樣ではない、それは尻尾のはえた角のある神樣だ」

ある時、人々はその時分はやり出した、ある宗教について話した。師はその時云はれた。

「ある宗教の本物か、嘘ものかは、その宗教を信じると人間が、清くなるか、清くならないかできまる。またその宗教が金に媚びるか、媚びないかできまる。それからその宗教家が德のある人間か、ない人間かできまる。その人の話をきくと自づと心が清まる人でなければ本當の宗教は生れない。臭氣を發する宗教家や、奇蹟や、御利益をおし賣りする宗教は本當の宗教ではない。又世界中の人がそれを信じると、益々人類が幸福になる宗教でなければ本當の宗教ではない。或る國だけをエコひいきしてゐる神は本當の神ではない。君達の話してゐる宗教の神樣は氣が小さい。又その信者が奇蹟許りをありがたがつてゐる。それではその宗教を信じるわけにはゆかない。廣告のうまい宗教家も本當の宗教家ではない。愼しむことをまるで知らない人間は、まことの宗

教家にはなれない。本當の宗教家とうその宗教家はその人が、人間に與へられた最も貴いものを本當に生かさうとしてゐるか、それに氣もつかないかできまる。自分に人間の內にゐる神のありがたさを知らしてくれない宗教は要のない宗教だ。ありがたみを感じることの出來ない神、それは味を失つた鹽よりなほ醜い。そんな神を賣物にして得意でゐるものは阿呆に限る。問題にする程のものではない」

「それならさう云ふ宗教はつぶさなければなりませんね」

「つぶす必要もない神だ。あつてもなくつても同じ神だ。ほつたらかしておけばいゝだらう。それより本當の神を見出すことが必要だ。それには自分の心を淸くし、行ひをつゝしむより仕方がない、神に愛される資格のあるものは神を感じる資格のあるものだ。我々は神に愛される人間にならなければならない」

一八

或人が師に云つた。

「神を見てゐる時に、不幸な人のことは考へないのですか。不幸な人のことを考へれば、神を

見てもよろこびは感じられないでせう」

「君は理窟でものを見てゐるね。人間がどうつくられてゐるかと云ふことを知らないのだね」師はさう云つた。「君は甘いものを食つてゐる瞬間に不味いものを食つてゐる人のことを考へて甘いものをまづいと思ふかね。美しいものに見とれてゐる瞬間に醜いものを見てゐる人に同情して美しいものを醜いと思ふかね、もしさうなら君は不幸な人だ。神を見る、その有難さを強く感じればこそ、次ぎの瞬間に自分の德の足りなさを感じるのだ。不幸な人のことを思ふのだ。自分のしなければならないことを本當にしようと思ふのだ。耶蘇の言葉に聞きとれてゐた間マリアはマルタのことを忘れてゐたのだ。だが耶蘇が居なくなつたら、マリアは一層マルタの爲に働いただらう。本當のことを見ずに理窟でものを見ると、折角面白いことが面白くなくなる。美を見る次の瞬間に醜を思ひ、眞理に接した後で眞理に接しない人のことを思ふ、しかしそれは美や眞理のありがたみを本當に知つた人でなければならない。美を見た時は美を、眞理に接した時は眞理を、本當に感じた人でなければならない。神を見得る時は少ない。その時は何ものをすてても神を見なければいけない。そしてありがたがれるだけありがたがらなければ。それでこそ生き甲斐を得、人間に生れたよろこびを感じられるのだ、さうして本當に正しい生活を送る氣になれるの

だ」

一九

師は決して如何なる時も虚僞を好まれなかつた。しかし人間はまだ眞理には遠いものだ。愛や眞心から出る、相手の心掛や神經をいたはる處から出る嘘はやむを得ないこととして認めてゐられた。「正直なのはいゝが露骨なのはいけない」とも云はれた。或日自分が一人師をたづねた時、師は次のやうなことを云はれた。「日光をぢかに種にあてては種はひあがつてしまふ。日光と種の間には土呂が必要だ。人の目は日光に生かされるが、日光を正視することは出來ない」

「眞理にぢかに照されては人生はひあがつてしまふ。眞理がいろ〳〵のものを通してちよいちよい顯はれるので人間は生きてゆける。いろ〳〵の美しい色は物體が日光を受け入れてその一部を自己を通じて生かす所にある。眞理をうけ入れて、それを自己の愛を通じて生かすべき時に生かした人が聖人だ。人間的な愛を通らない眞理は我等には强すぎる。

「眞理には道德的價値はない。絶對だ。ぐらつかない。其處にうりがた味がある。だがその前に人間が立つにしては人間が小さすぎる、威壓される。そのくせ眞理なしでは我等は生きてはゆ

けない。あまりにより處がない。

「眞理は本當の內での、最も本當のことだ。本當のことを知らない人間はおちつけない。だがあまりに本當のことを知つたら、人生には色もつやもなくなる。人生は永遠の前に立つては餘りに貧弱で、あまりに御輕少だ。

「人間にもし愛を通した眞理にふれるよろこびがなかつたら、人間に生れたと云ふことは、滑稽であり氣の毒なことだ。人間に愛想をつかしきつた人のことを見よ。愛想をつかしても人間は人間だ。人間らしいことき出來ない。

「吾々は概念で生きて、愛で生きない時、人生は惡い謎だ。玉手箱だ。そつとしておくより仕方がない。かう云ふ話をしてゐると淋しくなるだらう。話をしてゐる間はつい、人間が概念的になりやすいから、生きたものとも取組まないから。しかし今、君をすぐ、生きてゐることによろこびを感じさせて見せよう」.

師はさう云つて次のやうな話をされた。

「自分がこゝに來る一年程前に、人間に生れたことを後悔した時があつた。自分は人間に生れたいと思つて人間に生れたのではない。人間がどんなものであるか、この世がどんな處か知らず

に生れて來た。この人生がもつと醜い悲慘なものであつて、人間の出來がもつと絶望的に出來てゐても自分は小言の云へない人間だ。又この世がもつと悲慘で、何等の希望なく、天災がつゞいて起り、見るもの聞くものがもつと不愉快であつても、自分達は小言は云へない。だまされて生れて來たのではないから。私は人間に生れたことを後悔した時も、この世に美があり、人間に善人と、美人と、賢人と、聖人の居てくれることを感謝し、草の青く、空や水の色が限りなく美しく、日の形や色、月の形や色、花の形や色、その他のものの形や色の限りなく美しく、小鳥や、毛物の可愛らしい姿を感謝した。しかし人間があまりあはれで、そしてこの世に生きてゐる間のあまりに短かく、人生の無常なのをなさけなく思つた。自分が、死んでも生きても、どつちにしても同じであることを感じた。苦しんで生きてゐる甲斐のない人生だと思つた。一思ひに死ぬ方がどんなにさつぱりしてゐるかわからないと思つた。しかし自分は死ぬことは出來なかつた。何かこの人生に未練をのこすものがあつた。何しても始まらないし、何しても同じことだとは思つても、このまゝ死ぬのは心殘りだつた。自分は亡き父や母の意志を、自分の内に感じることが出來た。それは自分に立派な人間になつてくれと云つてゐた。そして自分達が地上に生かしたく思つて生かせなかつたことを生かしてくれと云ふやうに思へた。自分もこの世に人間として生きた

以上は何か人間の爲に働いてゆきたいとも思つた。働いても始まらないと思つたが、それでも何かしてゆきたいと思つた。少しでも人間に役に立つことを、何處かにしてゆきたい。自分にはそれは出來るとも思へなかつたが、出來るだけのことをもせずに出來ないと見切りをつけるのは自分をつくつたものにすまないと思つた。自分はさう思ふと元氣になれた。人間よ。私はあなたの爲に働きます。愛すべきあなたの爲に。自分の力は少ないでせう。だがあなたの爲に働きます。自分はさう決心をした。自分はその時分よく旅行した。そして山路を歩きながらそんなことを考へてゐた。そしてお役にたてて下さい。どうかお役に立てて下さい。私の一生をその爲にお使ひ下さい。自分は祈りの氣持でさう云つた。自分の心は安まり、うれし涙が出て來た。人間はくだらない、つまらないものだと思へば思ふ程、愛を感じ、出來るだけ、人間の爲に働き、そして人間は生き甲斐を感じられる動物だと云ふことを本當に知る爲に働かう。地上にある、金剛石や、金を見出す爲に人々は隨分骨を折る、自分は人間の心の内にある人間に生き甲斐を與へてくれる寶を見出すものにならう。自分はさう思つた時、勇氣を得た。自分は日がくれてから淋しい峠を、そんなことを考へて夢中に歩いてゐた。すると、峠をこして少し行つた時、町のあかりが見えた。家々から燈火がもれた。自分はそれを見た時に、本當に跪いて祈つた。人々よ幸福でゐてくれ、

私はかくれてゐる處であなた方のために働きます。自分は泣いてしまつた。自分は今でもその心持をよく思ひ出す。そして、人生にたいする希望をとり戻す。人生の爲に働いてくれたものすべては自分の師だ。自分はその末席にゐて、自分の一生を少しでも人間の御役に立てることが出來るとうれしいと思ふ。君はさう思はないか」

「思ひます」自分は涙ぐみながらさう云つた。そして師は今更に貴いと思つた。

二〇

師が三十五六の時だつた。師は一つの小さい寺院を建てることを本願にした。そして自分達は材木や、金や、勞力を寄附した。師と一緒に、カヤをかつたり、木を切つたりした。大工を雇つたが、他は自分達が力をあはせてつくつた。十五六坪の家で、それは町はづれで街道筋の淋しい所だつた。いつか其處で自殺があつた所で、夜歩くのに少し淋しい處だつた。師は其處に、一人の熱心な弟子と共に住はれた。

その寺院は金がなくつて、宿をとることの出來ない人をとめるのが目的だつた。師は放浪してゐた時に、二三日飯の食へない時があつた。その時から師はさう云ふ家を建てたいと思つてゐら

れた。師はその時或る親切な家であたゝかい飯を呼ばれ、心よく泊めてもらへた時のよろこびを思ふとなほ、さう云ふ寺院をたてたく思つた。さうして自分の受けた恩を小さい兄弟に報いたく思つた。

その上に師は佛壇のやうなものもつくりたがつた。其處には釋迦の像が祀つてあつた。「自分は矢張り御釋迦様の前に一番素直に頭が下る」と云はれた。「それは子供からの習慣だらう」

その寺院で師は毎月一度第一日曜に話をされた。

集つたのは矢張り自分達の仲間で、それに時々物好きの人が加はつた。若い女達も師を訪づね出した。自分の妻もその内の一人だつた。

最初の話は寺院に就てと云ふやうな話だつた。

「私はこゝに誰もにも屬しない一軒の家を、皆さんの助力で建てることが出來ました。この家は私の家ではない。神様の家にしたい。この家は小さく粗末だ。しかしこの家を神様の家にしたい。この家の客は神様の客であり、我々は神様に仕へる下男でありたい。神様は何處にでもいらつしやる。この家にもいらつしやる。たゞ私が不束だと神様はいらつしても、私の方で氣がつかない、口だけで神様、神様と云つてゐるだけだ、その言葉はうつろで、君達の心に響かない。し

かしこの家を本當に自分が神樣のお役にたてることが出來たら、この家の神樣のものだと云ふことを我々は感じないわけにはゆかない。私はこの家を神さまのおぼし召しのまゝにつかひたい。私の望みにまだ私の力はそはない。だが私はこの家を自分の利己心の爲にはつかはないつもりだ。この家を如何に役立たせるかは私の神樣を知ることの深いか淺いかを示す。私がまた口許りの人間か、眞心をもつ人間かを示す。私はこの家を、泊るに家のない旅人のものにしたい。元よりこの家に泊れる人は少ない。だが皆無よりは、一つでもあつた方がいゝ。この地上には神や佛の家が澤山ある。しかしそれを人間が横領してゐる。本當の神の家は私は一つもないと云ひたい。いやある。ないことはない。私の知らない處にきつとある。だが神の家は少なすぎる。慈善家はゐる。信心家もゐる。しかし神の家は少なすぎる。旅人、それも好んでする旅人ではなく、おちつく處なくさまよふ旅人が、神樣に一夜の宿をお願ひしても、きかれないことは往々ある。私もその經驗がある。人間の內の物慾が威張りすぎる間人間の內の神樣は生きられない。私はそれを心細く思ふ者だ。そして自分には少し恐ろしすぎるが、この家を神樣にさゝげたく思つてゐる。今の世に寺院は必要がないか、私はまだ必要があると思ふ。必要のない時は、いたる所に神樣が生き、人間の住ふ處には必ず神がいらつして、人間の住ひには必ず寺院が存在する時だ。今はまだ

その時ではない。神様の家は少なすぎる。そして人は神様の家に馴れてゐない。私はこゝを木賃宿にしてしまふかも知れない。しかし私はこゝの戸を金では開かない。神様の名によつて一夜の泊りをたのむ人をとめる。そして私は神に捧げた穀物によつて、その人達にあたゝかい飯を捧げたい。私はそれによつて元より自分の名を出したくない。自分の内の汚れたるものが少しでもこの家を利用したら私は恥ぢ知らずだ。私はその時人間と神とを汚がすものだ。君達の希望、君達の清き心をけがすものだ。自分はそんな人間にはなりたくない。それからこの家で、私は君達と神様の話がしたい。いつでも私はこゝに居て、君達と神様の話をしたい。自分の心の清まる話をしたい。人間は今時でも、こんな話をして心からよろこべ、本氣になつて神様のことを考へて生きてゆけることを知りたい。元より神様は人間の神様だ。我々のうちにゐる神様で、人間を愛し、人間の不幸や、罪惡や、悲慘の爲に心をいためられる神様だ。私は神様に身を任せたい。私は時時不淨なことを思ひ、不淨なことに心をひかれることもあらう。だが神様のことは忘れない。それを忘れては私は生きてゆけない。人間を信じることは出來ない。私はさう云ふ人が世界には澤山ゐると思ふ。私はさう云ふ人の兄弟だ。小さくも兄弟だ。そしてさう云ふ人の爲につくしたい氣では人後におちないつもりだ。自分のとり柄は其處だけだ。それを失なふわけにはゆかない。

貧弱と云はれるのはいゝ、そんなことしても始まらないと云はれるのも覺悟してゐる。だが虚僞な人間、恥ぢ知らずの人間にはなりたくない。私を信じてくれ、私は自分の一生をカリカチュアにはしないつもりだ」

師はさう云つた。實際その寺院は師にとつては眞劍な仕事だつた。時には客もあつた。毎月の集合は少しではあつたが聞き手はふえて行つた。

二度目の說教は「神に愛される者」と云ふ題だつた。

二

師は說教の時、理窟はなるべくさけられた。本當のことを直接に感じさせるやうに骨折られた。その點、師は福音書に顯はれた耶蘇の言葉に、感心する上にも感心された。理想的以上だと云はれた。あの生々しい言葉は何處からくる。たゞ神と同じ深さにたつした人の子からのみあふれ出る。

師は「神に愛される者」と云ふ題でかう云ふ話をされた。

「こゝに二人の人間が居た。一人は金もあり、身體もよく、働きもした。だがそれは自分の爲

許りであつた。他人は他人、自分は自分、そして世界を自分の爲にのみ存在してゐるやうにあつかつた。學問もあつた。しかしそれはこの世的に立身する爲に使ふにすぎなかつた。彼は道樂をした。そして樂天家であり、世間的に地位も得、よき妻子ももつてゐた。誰もがその人を幸福だと云つた。その人自身も自分を幸福だと思ひ、働きのある人間だと思つてゐた。しかし彼は誰をも愛することが出來なかつた。女を澤山可愛がつたらう。しかしそれは相手を人間として愛したのではない。まして眞理や、正義や、美には無頓着だつた。我々はその人を見て愛を起すことは出來ない。その人の內には何等愛すべきものを見出せなかつた。その人の內には俗なもの切りなかつた。面白い處が少しもなかつた。金錢上や社會的の損をしないこと許り考へてゐた。そして得をすること許りを名譽と心得てゐた。彼は體面を重じた。しかし他人と心をうちあけることを知らなかつた。うるほひがなかつた。かゝる人はいくら幸福でも神から愛されることは出來ない。神の愛を立派に拒んでゐる。そしてそんなものの存在をすら認めてもゐなければ必要も感じてゐない。かゝる人は神を要しない人で、社會の奴隸である。社會の要求する通りに體面をつくり、社會の要求する通りの才能をはたらかし、それ以上は何にも望まない人だ。かゝる人はいかなる社會にもうまく適應して得をすればそれでいゝ、それ以上のことを望まない。かゝる人許りでこ

の世が出來てゐたら、神は存在する必要はない。かゝる人も神を祈るかも知れない。だがその神は彼を益々社會的の幸運兒にする神で、それ以上の神ではない。我々はかゝる人間を愛することは出來ない。かゝる人間許りでこの世がつまつてゐないことを我々はのぞむものだ。他の人は金もなく、身體もわるく、十分に働けない人間だつた。しかし彼は常に自分の力の足りないことに淋しさを抱いてゐた。どうかして自分を何かのお役にたてたく思つた。彼はよくはがゆがり、おちつかなかつた。癇癪持で、人の惡口も云つた。損しても彼は氣持のわるいことは出來なかつた。彼は自分のやうな人間が他人に親切にされるのは勿體ないと思つてゐた。彼は他人に不平をもつたり、不快に思つたりするとあとでわるかつたと思ふ。彼にも名譽心はあり、快樂を嫌ひはしなかつた。しかし彼はそれ等によつて行動するのを恥ぢた。彼はある著作をしようとしてゐた。それは人間の誇りとなるいろ〳〵の人の事蹟をこの世に傳へることだつた。彼は人々がそれをよむことで、自分がそれ等の話をきいた時、感じたやうなよろこびをつたへたく思つてゐた。そして少しでも人々の生きてゆくのに御役に立てばいゝと思つてゐた。彼は皆から馬鹿にされ、うちの人からは厄介ものにされてゐた。彼もそれを無理とは思はなかつた。彼は小さい家で、出來るだけ簡單に生活して、自分の仕ごとを遠慮しながらしてゐた。自分の仕事に時々は誇りを感じ、よ

ろこびも感じた。だが、多くの時は自分の分にすぎた仕ごとをしてゐるやうに思つた。そしてよく見知らぬ神に祈つた。私の仕事がもしあなたの御心に叶ふならお助け下さい。あなたの人類にあらはれた足跡を少しでも人々につたへる力をお與へ下さい。それは私の力ではありません。あなたの力です。自分を信じてゐませんが、あなたを信じてこの仕ごとをしてゐるのです。どうか御心に叶つた御言葉許りをかかして下さい。私の醜い心がその御言葉をけがすことを私は恐れてゐます。かう云ふ人間は多くの人から見ては馬鹿に見え、零のやうに見え、働きのない人のやうに見える。だが神はその人を憎まれはしない。神はその人を愛される。神に愛されるには、己れの眞心をつくして生きてゆかうとする意志がなければいけない。自分の幸福よりも、自分の正しいことを望む人でなければならない。この世の成功をするよりも、悪いことをつゝしむ人でなければならない。損をしないこと許り考へるよりは、自分を賤しくしないやうにつとめる人でなければならない。他人をあざむいて他人を不幸にして得をするよりも、他人をあざむくことが出來ず、他人の運命をいたはつて損をする人でないと神様に愛されない。この世的に缺點のない人間が神様に愛されるのではない。眞心を生かさないと生きてゆかれない人間でないと神様は愛されない。圖々しい人間や、あざむくことの平氣な人間は神に愛されない。神は兄弟の爲に心から心

配し、自分の悪いことには氣がとがめないではゐられない人を愛する。悪う御座いました。しかしどうかお見捨て下さいますな、さう心から見えない神の前に跪けるものは、神様に愛される。同じく神の前に捧げものをしても、眞心のないものには神は顏をそむけ、眞心のあるものの心に神様は慰安を與へる。神に愛されないでも平氣な人はいゝ。しかし神に愛されたいと思ふ人は、純粹な氣持で生きなければならない。不淨な心を自づともやしつくす程本氣になつて生きられる瞬間をもたなければならない。それから、神の前に恥づべきものは恥ぢ、あやまるべきものはあやまり、隣人にした悪いことは再びしないやうに注意をし、自分の罪を忘れて他人の罪をせめたことを後悔し、隣人と出來るだけ和解し、すべての人に出來るだけ厚意をもち、そして出來るだけ清く、美しく自分の今後の生活をしようと心がけなければならない。もし本當にさう心がけることが出來ると、神は我々に清き涙を下され、あらたに生きる勇氣を與へて下さる。さう云ふ人はよろこんでいゝ。それは神さまが愛してゐて下さる證據だから」

二二

或日の夕方だつた。師の處に一人の乞食がたづねて來た。若者が出た。それは可なりひどい癩

病やみだつた。一夜のやどりを請うた。師に反感をもつてゐる僧侶から聞いたと云つて。若者はおどろいて、師にそのことを知らせた。そしてどうしませうと云つた。

「勿論とめてあげろ」

師はさう云つた。

「蒲團はどうしませう」

「俺の蒲團を出せ、俺はお客の蒲團でねるから」

「もしうつつたら」

「あとで十分に消毒する」

「それならお客蒲團でもいゝでせう」

「癩病のねた蒲團だと思つたら、お客はいゝ氣がしないだらう」

若者は躊躇してゐる。

師は自ら立つて、その男に「どうぞお上り下さい」と云つた。その男は平氣で上つた。師は

「飯はまだでせう」ときかれた。

「まだです」その男は少し反抗的に云つた。

師は自分の茶碗で飯を食はした。そして男はつかれてゐると云ふので早く師の蒲團にねた。

翌日その男は禮を云つて歸つて行つた。

師は若者に癩病人が來たことをなるべく默つてゐろと云つた。師はすべてのものを消毒した。そして消毒したあとですまして、自分の茶碗をつかひ、自分の蒲團にねた。

若者は默つてはゐられなかつた。そして自分達の間にはその話が美談として私かに話され、そしてそれが人々に段々公然と話された。そして師は反つて皆から尊敬された。それに就て師はかう云はれた。

「癩病人をとめたのは少しも偉くない。自分はそのことをむしろ恥ぢてゐる。自分は癩病を恐れてゐる。自分は決して、深い決心でとめたわけでもない。しかし美談をつくりたい爲にとめたのではないだけが自分の取り柄だと思つてゐる。自分はそれで內證にしておくつもりだつた。元よりごく小さい出來事だ。癩病患者がそれで救はれたわけでもない。正直に白狀すると、自分は若者が癩病患者をもてあましてゐる顏を見たので、決心が强まつた。殊にあの坊主から聞いて來たと云ふ時に自分は戰ひをいどまれたやうな氣がした。自分はさう思つたことを恥ぢはしたが、自分の決心は固まつた。蒲團のことも、あれが心配してゐるのを見た時、すぐ決心がついた。自

分は元より、この寺院をたてる時から、癩病人のくるのをかく悟してゐた。自分は少しもほめられる資格のないものだ。自分の信仰のよわさと、德の足りなさをあの晩心から祈つた。どうか美談としないでくれ。恥かしいから」

しかし師にこのことがあつてから、德望がふえて、その次ぎの說敎をききにくる人は隨分多かつた。それは三度目の說敎で、同時にそれが最後の說敎になつた。なぜそれが最後の說敎になつたか、それはあとでかくことにしよう。

二三

題は「幸福者」と云ふのだつた。

師はいきなりかう云はれた時に自分は心配した。

「食ふに米があり、住むに家があり、着るに着物のあるものは仕合だ。健康なものは仕合だ。金にこまらないもの、借金に苦しめられないものは仕合だ。身體の自由と思想の自由を金で賣らないものは仕合だ。自分のきらひなことをしないでも生きてゆけるものは仕合だ。愛するものは仕合だ。第一愛するものを持つてゐるものは仕合だ。貧乏しても心のおちついてゐるものは仕合

だ。金持になつても、金に執着の少ないものは仕合だ。心のひがまないものは仕合だ。人を憎み或は猜むことのないものは仕合だ。隣人の幸福をやきもきしないものは仕合だ。隣人と仲よくするものは仕合だ。他人の幸福を望めるものは仕合だ。病氣しても天命を甘受するものは仕合だ。努力仕甲斐あるものに努力するものは仕合だ。何ものの奴隷にならず生きてゆけるものは仕合だ。天命をまつたうするものは仕合だ。他人と協力出來るものは仕合だ。日かげものにならず日なたものになれるものは仕合だ。心のすなほなもの、心の賤しくないものは仕合だ。淺墓な處以上のものをもつものは仕合だ。心のおちついてゐるもの、生々したものは仕合だ。他人の心にふれられるものは仕合だ。あしき種をまかずよき種をまくものは仕合だ。後悔をしないですむものは仕合だ。過ちを改めることの出來るものは仕合だ。忍耐强いもの、熱心の强いものは仕合だ。善きことによろこびを感じるものは仕合だ。美を感じるもの、眞理に向へるものは仕合だ。臆病でなく用心深いものは仕合だ。親切で平和なものは仕合だ。人類を愛することの出來るものは仕合だ。心が疚しくなければ何ものをも恐れないものは仕合だ。自分を正しく生かしてゆけるものは仕合だ。生長のとまらないもの、全力を出し切れるものは仕合だ。人力をつくして天命をまつものは仕合だ。尊敬すべきものを尊敬するものは仕合だ。そして感謝すべきものに感謝出來るものは仕

合だ。他人の運命をいたはるものは仕合だ。いと小さきものをも愛することの出來るもの、いと小さきことにも自己を最上に生かせるものは仕合だ。死にうちかてるもの、生を肯定出來るものは仕合だ。最も仕合なものは神と共にゐるものだ。そして同胞の爲に生き、同胞の爲に死ねるものだ。生きてゐても神を見、死につゝも神を見るものだ。自分の一擧一動が無限にたつし、少しもゆがまず、少しもけがされず、神の愛と人の愛とが自づとあふれ出る人だ。自分はすべての人が仕合ものになつてくれることを切に望み祈るものだ。世界の人よ仕合ものになつてくれ、神よ、すべての人を仕合せものにしてくれ。私はその爲には土呂の上に手をついてあなたの前に祈る。世界の人よ、仕合せものになつてくれ。私はたのむ、私はいのる。その爲に少しの努力でも惜しまないものは仕合せだ。私はその末席をけがすことが出來るならば、死んでもいゝ人間だ。皆さんもその爲にはたらいて下さい。おたのみします」

人々は涙ぐんだ。女の内には聲あげて泣いたものさへあつた。師は今にもなきさうだつた。自分も泣いた。そして師の爲に盡さうと思つた。

自分は滿場の人が師の言葉に動かされたと思つた。だが其處に黑い影が動いてゐた。自分達はそれに氣がつかなかつた。

二四

それからまもなく誰かわからない人が新聞に師の事をしきりとほめた。それはまだよかつた。しかしそれを墮落した僧侶を攻擊する爲につかつた。黑を黑くする爲に白をつかつた。殊に師を最も憎んでゐる僧侶を破戒の僧侶として最もつよく攻擊した。師はそれを知つた時、いやな顏をされた。いたくない腹をさぐられさうに師は思はれた。弟子をして自分をほめさし、憎む敵を惡口させたやうに相手にとられさうに思はれた。師はさう云ふいやしい人間に思はれることに潔癖だつた。しかしわかる人にはわかると思はれた。實際、師の所によく出入りしてゐる人にそんな投書をしてゐる人はなかつた。又相手の僧侶の私行を知つてそれをあばくやうな人は居なかつた。だが心のよくないものが見れば、殊に惡口云はれた方から見ればさう思ひたいのが人情だ。さぞ不愉快を感じてゐるだらうと自分達は思つた。內々それを心よく思つた人もなくはなかつた。

相手の僧侶は沈默してゐた。しかし今に仕返しをして見せると云つてゐたから用心するといゝと師につげた人もあつた。師は別に氣にされなかつた。一二週間は何事もなかつた。

或日若者が用があつて一晩不在の時があつた。その夕方一人の女の客があつた。旅のもので一

晩とめてくれと云ふのだつた。師はまよつた。斷るべきものか、とめるべきものかわからなかつた。

しかし師は斷ることが出來なかつた。何しろ日はくれかけてゐた。女はとほくから或人をたづねて來たのだがその人はもう居なかつた。そして何處にも泊ることは出來ないのだと云つた。是非とめてくれと嘆願した。師はその言葉をすつかり信じられなかつた。だがとめることに決心された。

女の話だと、師は當惑されたらしかつた。ぼんやり立つて何か考へてゐられた。斷られるのかとひや〳〵したさうだ。師はあとでその時のことを女にかう云はれたさうだ。「私にはとめる資格も斷る資格もない。私の不淨なものがとめろと云ふ。斷つては氣の毒だと云ふ。私はそれに反抗することが出來なかつた。自分を誘惑しに來たのではないか、さうも思つたが、さうでないかも知れないと思つた。ともかく斷つて扉をしめ切り、とぼ〳〵歸つてゆく姿を見る氣にはなれなかつた。私は神樣に伺つたけれども、淸くない私の心には神樣のお答へを得ることは出來なかつた」

女は實際彼の僧侶にたのまれて師を誘惑しに來たのだ。女に「あの人だけはいくらお前でも誘

惑出來まい、もし誘惑出來たら何でもやる」と云ふやうなことを云つた。女は出來まいと云はれたことが策略に落ちることとは知つてゐたが、腹が立つた。出來ないことはないと云つた。それなら出來なかつたら、お前の一番大事にしてゐるダイヤの指輪をよこすかと云つた。あげますとも、と女は云はないわけにはゆかなかつた。男と差し向ひになれば必ず誘惑が出來ることを長年の經驗で女は信じ切つてゐた。それで師の一人切り居ない晩をさがしてゐた。女は師を一目見た時に、この人は誘惑することはわけないと思つた。しかし飯を出され師の顏を見た時、女はこれは一通りの男ではないと思つた。今迄逢つたどの男よりも、威嚴のある人だと思つた。何とか話しかけたかつたが、口を切ることが出來なかつた。思ひ切つて、少し自棄氣味に、

「酒はないの、何處かにかくしてないの」

「ない」

怒られたやうな氣がして師を見たら、師は微笑んでゐた。しかし其處には賤しい處がなく、憐みがあつた。女は反抗したい氣になつた。

「氣がきかない方ね」

師は默つてゐた。

「勝手に飯をくつて、其處に蒲團がありますから勝手にねて下さい」

「妾、一人でこんな淋しい處にねられませんわ」

師は默つて自分の室に歸られた。女は一人ぼつちになつた。しかし今に師はきつと出てくると思つた。だが森として師の室で本の紙をめくる音と、天井で鼠がさわぐ音より外なにも聞えなかつた。女は本當に淋しくなつた。それ以上怖くなつた。早く瘠我慢をせずに出てくればいゝのにと思つた。本當に臆病もので、意氣地なしだ、男のくせして、女はそんなことを思つた。とうとう待ち切れなくなつた。

「御免なさいよ」

女はさう云つて師の室に入つた。必ず誘惑して見せると云ふ決心で。師は机に向つてゐた、女を見た。

「妾、一人ではこはくつて仕方がないの、こゝにねていゝでしよ」

「あなたは私を誘惑しに來たのですね」

「さうよ」媚びをふくんでわざとらしく女は云つた。

「そんな罪なことはするものではありません」

師はうちとけたやうにさう云つて、机の上を見られた。其處にはお釋迦さんの像があつた。女はあとで云つた。「妾は寺の本堂でもいたづらをしたことがあります、お釋迦さんの像なぞにおぢけをふるふ程やさしい女ではなかつたのです。しかしその時のお釋迦さんの像だけはありがたい氣がしました。威嚴に打たれました」

師は云つた。「あなたのしようとすることは恐ろしいこととは思はないのですか、あなたは久米仙人が何年も何年も苦業して得た仙術をやぶつた女を罪な女とは思ひませんか。私は久米仙人ではない。しかし私は正直に云へば、あなたが怖い。しかし私は自分を清くする事を自分の仕事にしてゐる。一晩の快樂の爲に一生をだいなしには出來ません。送つて上げますから、默つて家にお歸りなさい」

「妾は歸りませんよ。あなたは本當に臆病な方ね。誰も見てやしないぢやありませんか、妾を清く歸したつて、妾があなたを誘惑したと嘘を云へば誰だつて本當にします。何處へ出ても妾は平氣で嘘がつけてよ。この人はこんな顏してゐたつて」

「嘘と本當とはちがひます。嘘なら何と云はれてもかまひません。出來るだけ嘘をお云ひなさい。私は嘘なら平氣です。皆がその嘘を信じ切つた時、あなたは心にきつとせめられるでせう。

私は嘘をこはがりはしません。私のこはいのは世間の噂ではありません。本當に誘惑されることです。その時、いくらあなたがあなたと私との間が淸かつたと云はれても、私は云はれれば云はれる程、穴のなかに入りたいやうな氣がするでせう。思ひ切つて歸つたらいゝでせう」

「何にも妾をこはがらなくつてもいゝでせう」

「あなたはこはくないが、自分がこはい」

二人は默つてゐた。師は又机に向れはた。暫くして師の方から口を切つた。

「あなたは誰かにたのまれてこゝに來たのでせう」

女はうそを云ふ氣にはなれなかつた。

「えゝ、その名前を敎へて上げませうか」

「いえ、聞くにはおよびません。その人はなぜあなたにそんなことをたのんだか知つてゐますか」

「知りませんわ」

「私の一生を傷つけようと思つてゐるからです」

「なぜ傷がつくのでせう。そんなことで傷がつくならあなたの一生は隨分くだらないのね」

「そんなことはありません。寶石でもなんでも、いゝものになればなる程、小さいきずを恐れます」

女はそれを聞いた時に、心から自分がけがれてゐることを感じた。女は泣きたいやうな氣になつた。反抗しようと思つても、師の顏と、お釋迦さんの像と、あたりの空氣がそれを許さなかつた。師はそれに氣がつかれた。

「寶石だつて寶石になるまでは、いくらでもこすられ、もまれることが必要です。始めつから無きずのものはありません。研かれないものは傷をあまりいとひません。あなたは顏に出來た腫物はどんなに小さくつても氣にするでせう。それがあなたの本職だから。私の本職は心を美しくしておくことです。だから心に傷をつけることは恐れます。私があなたの顏に少しでもあざをつけたらどうします。あなたはどんなに怒り、なげくでせう。あなたの顏にあざをつけるものは罪なことをする人間です。そのやうに、私の心や行にあざをつけるのは罪なことです」

「それならば、私は、こゝにじつとしてゐますわ。私はおとなしくして、あなたの御勉强の邪魔はしません」

師は默つてゐた。

師は又机に向つた。机の上には聖書がのつてゐた。師は默つてそれをよんで居た。師はどこをよんでゐられたか、それを聞くことはもう出來ない。ともかく暫くして師がふりかへられた時は、師はおちついてゐられた。そしてかう云つた。

「あなたが今日來てくれたことは私にはよかつた。私は決してあなたが來て下さつたことを惡くは思つてゐない。私はあなたをよこした人も憎んでゐない。むしろ氣の毒な人と思つてゐる。坊主にさへ生れなかつたら、あの人は私を敵にしないですんだのだ。新聞にあの人の惡口が出たのは私の知らないことだ。あの人も心のなかに入れば惡い人ではない。誰だつて愛すべき一面をもつてゐるものだ。私はあの人を憎んではゐない」

「私はあの人をちつとも愛してやしません。あの人はあなたの思つてゐるよりもつと恐ろしい人です。あの人は自分の思つてゐることはどんなことをしてもやらないではおかない人です。あなたは用心しないといけません。私達でさへあの人を皆おそれてゐるのです」

「私はこはくない。あの人は私の心をどうすることも出來ない」

「ですが、あの人はあなたを殺すことは出來ます」

「殺すことは出來ても私の心を奪ふことは出來ない。私はもうあなたも恐れない。私はもう決

心してゐる。私は自分をあるものに捧げてゐる。そのものに氣に入らないことは出來ない」

「私は地獄におちるでせうか」

「地獄なんと云ふものはない」

「極樂は」

「極樂は勿論ない」

「それなのにあなたはなんの爲にこの世を面白くなくくらしていらつしやるのです」

「私は幸福にくらしてゐる。人間は快樂許りがたのしみではない。あなただつて酒のんで許りゐても、淋しくなることがあるでせう。身のゆく末を考へることもあるでせう。やけを起すことがあるでせう。私はやけを起したことはない。私はいつも安心して、心のどかにくらしてゐる。私は自分を幸福だと思つてゐる。こはいものはない。私は自分さへ正しくしてゐられればこんな幸福はないと思つてゐます。この幸福は何處からくるか知りません。しかし私は幸福なのです。心さへ亂されないなら。さもなければ人間に生れたと云ふことは心細いことです。淺墓なものです。あなたはいろ〳〵の人に逢つたでせう。なほ人間の淺ましいたよりにならないことも知つてゐるでせう。人間程圖々しい、自分のこと許りきり考へてゐないものはないと思ふでせう。そし

てたまに實意のある人があるとうれしいでせう。しかしその人だつてたよりにはならない。人間はたよりにはならない。たよりになるのは神樣許りで、神樣の御氣に入らないことをしないやうにすれば、それでうれしいのです。私はあなたも神樣から私に與へられた人のやうな氣が今やつとするのです。あなたはいゝ方です。誰も知らない、あなた自身でも知らない程、あなたはいゝ人です。決してやけを起したり、わるい人の味方をしてはいけません。そして少しでもいゝことをしてゆきたいと思ふ私を誘惑するのはいけません。誰もゐない夜に私の處に泊りにくるなぞと云ふことはいけません。今度くる時は晝來て下さい。皆がゐる時に、平氣で來て下さい」

女は「歸ります、歸ります」と云つた。

「ありがたう。身體を大事にして下さい。私が町の入口迄送つてあげませう」

師は提灯に火をつけた。

二人はそとに出た。女はしく〳〵泣き出した。師は默つてゐた。

「本當にわるう御座いました」

「そんなことはない。私こそあなたにあやまらなければならない」

師はさう云つた。町のはづれで二人は丁寧にあいさつしてお互に身體を大事にして下さいと云

つてわかれた。その晩師はいのつた。女は泣いた。女はあくる日ダイヤの入つた指輪を僧侶にとどけさした。そして「私が立派にまけました」とことづけさした。

二五

師は今や、何が來てもおどろかない決心が出來たやうに見えた。師をきずつけようとしたことは、師の名聲を高めるに過ぎなかつた。師のありがた味を一層はつきりするに過ぎなかつた。自分達はそれを喜び、名譽のやうに思つた。何ものが來ても師はけがされない。ます〳〵眞價を發揮するにすぎない。自分達は益々師を信じた。しかし世間では師と女の間の淸かつたことを信じられないものも多かつた。それを信じて師のかたくななのをあざわらつた人もあつた。しかし師はおちついてゐられた。女はその後毎々師の處に見えた。そして誰にも師のことをほめるのに遠慮がなかつた。それで反つて疑ひを深めた人もあつた。しかし女も師も平氣だつた。しかし二人だけであはれたことは一度もなかつた。女は師を心から信じた。そのことは我等を喜ばし、我等は女に好意を持つやうになつた。女は皆に彼の僧侶を用心するやうにと云つた。そして師の生命を不安がつた。しかし師は安心してゐられた。神と共に生きられないことだけを心配された。神

と共に生きられれば死は死ではない。更に生きることだ。師はさう云ふ信念をかたく持たれた。

「俺は人間の希望となりたい。死に負ける人間ではない。たゞ死ぬ瞬間に自分を生かせさへすればそれでいゝ。その時、俺の眞價が生きる。さうすれば死は最後のものではない。更に生きる道だ。自分は他人の害心を恐れない。自分の恐れるのは、人間の道にそむいて生きることだ。自分はもう死ぬ時でも淺ましいことは出來ない。更に美しく生きることが出來る許りだ」

自分は師の決心の前にをのゝいた。そして師の最後が近づきつゝあるやうな氣がした。皆で用心しよう。師の生命を守らう。師に一日でも多く地上に生きてゐて戴くやうに骨折らう。自分達はお互にさう云つて興奮した。

師の一人で歩くことを自分達は禁じた。師の生命をねらつてゐるものがあるやうな氣がした。かの女もその心配をした。しかし師は笑つた。

「君達が心配してくれるのはありがたい。しかし安心してゐていゝ。私はまだ殺される程、恐ろしい人間ではない」

女が師をたづねてから一週間位は別に何事もなかつた。一週間程たつた或夜、風のはげしい時だつた。自分は一ねむりしてふと目が覺めると、半鐘の音がしてゐた。音を數へたら二つばんだ

つた。遠いので安心した。同時に師の家のことを心配した。それはいつもの癖でもあつた。しかしそんなことはあるまいとも思つた。しかし氣になるので、起きようとした。其處へ、雨戸をはげしくたゝく人があつた。

「起き玉へ、火事は先生の家の方だ」

自分はおどろいてとび起きた。

出ると師の家の方が赤くなつてゐた。

「もしかしたら」と自分は思つた。

「先生の家らしいね」

「家はどうでもいゝが、もしものことがあつたら」

「大丈夫だらう」

「大丈夫とは思ふが」

二人は師の生命を心配したのだ。二人は走れるだけ走つた。息がくるしくなると早や足であるいた。そして又駆け出した。

途中で俥をとばしてくるものに出あつた。

かの女だつた。

「大丈夫でせうね」

「大丈夫でせう」

二人は俥と一緒にかけた。坂道にかゝつた時、女は「失禮ですがおして下さい」と云つた。自分達も興奮してゐるので默つておした。

其處をのぼればぢき師の家だ。そして今や、燒けてゐるのは師の家と云ふことは疑ひなかつた。

「師の生命に別狀がありませんやうに」

三人は別々に祈つた。坂をのぼり切り、少しゆくと家がぼう〳〵と燃えてゐた。人々は手を下しやうがなくつて、遠まきに見てゐた。自分達はそのなかにとび込んだ。そしてその內に師と若者を見出した時、自分達はどんなによろこんだらう。

「先生」自分は夢中でさう云つた。

「よく來てくれた」

「御無事で」自分達は泣きたかつた。かの女は聲出して嬉しなきに泣いてしまつた。

追々皆がかけつけた。自分の妻になつた女もかけつけて來た。水がたりないのに、火はもう半

分以上家をなめつくして手の出しやうがなかつた。皆、師の無事なのを見てよろこんだ。家はかまはない。師の生命さへ別狀なければそれで澤山だつた。皆、よかつた〳〵と興奮した。師は禮を云はれた。師の目にも涙があつた。

師の處にゐる若者は

「火事はつけ火だ」と云つた。

その時師は

「そんなことを云ふものでない」と云はれた。

「私の過失からしい。嘘なしにさうらしい」

「そんなことはありません」

「他人をうたがふやうなことは云つてはいけない」

「かうしてゐても仕方がありませんから、私の家までひきあげませう」師を村につれて來た男が云つた。其處に巡査が來た。師は何處までも火事は自分の過失からしいと云はれた。

皆、其處をひきあげた。皆その夜、興奮した。師はねむいと云つて寢室にしりぞかれてから、皆よつて、

「つけ火にちがひない」と話しあつた。ほつたらかしておくといゝ氣になつてどんなことをするかも知れない。どうにかしなければいけないと話しあつた。

しかし翌日師は皆に集つてもらつてかう云はれた。

「惡に抵抗するのに惡をもつてするなと云ふのは本當だ。私はあの家の燒けたのは實際、自分の過失だつたやうな氣がして仕方がない。しかし萬一つけ火だつたにしろ、私は默つて知らん顏をするより仕方がない。私はどんなことをしても自分の品位をさげるわけにはゆかない。相手と同等になるわけにはゆかない。寶玉になれば瓦がぶつかつて來た時、寶玉はさけなければならない。ぶつかれば、相手をなほきずつけるにしても、さう云ふことは出來ない。私は自分の心を下等にしたり、賤しくしたりすることは死ぬことよりも恥ぢる。どうか、私を愛してくれるならば、糞の敵を糞でとらないでほしい。糞をぶつけられたらそれを肥料にして、自分をより正しく生きるやうにしたい。土はどんなよごれたものが來ても土に化し、海はどんなきたないものが流れこんでも自分をけがさせはしない。殊に太陽はどんなものが來ても、それを自分を光らす材料に化する許りだ。私はまだ不德ではあるが惡がとびこんで來てもそれを善にかへることが出來ないのをこの上なく不名譽にするものだ。私のことを思つてくれるならば君達はどんなことがあつても、

私を不德な人間にしないでほしい。決して私に加へられた惡では怒らないでほしい。私はそれを必ず生かして、自分の德を研くやうに骨を折つて見せるから。私は其處にこの上なくよろこびを感じるものだから」

そして師はどんな事が起つても、復讐だけはしないでくれと云つた。「自分に加へられた罪は皆許してほしい。土には誰も罪を犯すことは出來ない。海にも、空氣にも、太陽にも誰も罪を犯す事は出來ない。私は彼等を理想にしていたらぬのを恥ぢる許りだ。耶蘇には誰も罪を犯すことは出來なかつた。パリサイ人も、ユダも耶蘇の眞價を發揮する道具にすぎなかつた。私はまだまだ力の足りないものだらう、しかし力が足りないことを恥ぢることを知つてゐるものだ。加へられたる惡をそのまゝに突返さなければならない程、自分をいく地なしとは思はない」

自分達はそれをきいて恥ぢた。そして復讐は必ずしませんから安心して下さいと云つた。」

「ありがたう。それを聞いて安心した」

師はさう云はれた。

自分達は凄い程、心が淸められた氣がした。

自分達は師に今迄より立派な寺院をたてさしてくれと願つた。師は「あてつけにならない程

度で」承知された。

自分達は更に勇氣を起して家をたてる仕事に從事した。自分達は眞劍になつた。

二六

師の自覺は益々段がついたやうに思はれる。師はもう天命を樂しむことを會得されたやうに見える。師は靜かにおちついて日常の生活をくり返された。沈默の時は前より多くなり、一人何か考へながら歩いてゐられる時もよくあつた。家をたてる爲には自らも働かれた。しかし師はある時かう云はれた。

「この家はまた燒けるかも知れない。しかし燒かれるまではたてなければならない」

自分はそれを聞いた時、「人間は死ぬかも知れない、だが死ぬまでは生きなければならない」とふと思つた。そしてさう思つたとき、師の生命のことを考へないではゐられなかつた。緣起はよくないと思つた。考へないでよさうとした。しかし自分は豫覺を誇らうとするのではないが、かう思はないわけにはゆかなかつた。私は殺されるかもしれない、しかし殺される迄は生きなければならない。師はさう云はうとされたのではないかと。

まもなく新聞に師の悪口が數日にわたつてかかれた。それはあの女を師がだましたと云ふのが主な悪口であつた。女は怒つたが師は「よかつた」と云はれた。あの晩無事にすんだことを師はその時、なほはつきりよかつたと思はれたのだ。しかし人々は師にたいして蔭口をした。そして人は見かけによらないものだと云つた。師の世間的の名聲はたしかにその爲におちた。女はそのことをすまないと云つた。しかし師は平氣でゐられた。自分達は益々師を信じないわけにはゆかなかつた。しかし自分達は人々の不信の目をもつて師を見るのを感じた。自分達はそれを心細くも思ひ、はがゆくも思つた。どうかして師に對する不當の非難を打ち消したくも思つた。しかし師は云つた。「私は罪深い人間だ。私はもつと恐ろしいこともして來た。今度の非難も自分にとつては不當なことと許りは思へない。それに自分は世間の非難はへんに氣にならなくなつてゐる。自分はもつと大きい、もつと強いものに味方されてゐるから。今度のことも自分の眞心の力を否定することは出來ない。自分は眞心の力をもつともつと信じてゐるものだ。自分は今迄のことをすべて懺悔したい氣がする。ともかく自分は色情にかけて他人の運命を傷つけたことが皆無な人間でないと云ふことだけは白狀さしてもらひたい。その白狀をぼんやりにでもしないでは自分は安心して死んではゆけない人間だ。不當の賞讃、それは不當の非難よりも良心にとつては重荷だ。

私は自分の爲に生きることに淋しさを感じた人があつたら、その人の前に跪いてあやまりたい」

自分達は師の心が、惡口する人達の心とはまるでちがふ世界に生きてゐることを感じないわけにはゆかなかつた。

二七

師を信仰するものはあさましい程、數がへつたが、しかし師を信ずる我々は熱心を失なはなかつた。むしろなほ熱心になつた。かの女が一層熱心になつたことは云ふまでもない。そして師を信ずるものにたいして女は心かな感謝してゐた。「ありがたう。ありがたう」と云つた。

師はます〳〵おちついて來られた。確信あるもののやうに見えた。しかしこの時分から師は人類の運命に就ては今迄よりもなほ強く心配された。そして一方段々神祕的になられた。忘れることの出來ない日がつひに來た。自分は師にさそはれて二人きりで山に登つた。その時師はかう云はれた。

「やつと自分は天命を知つたやうな氣がする。自分の內に自分の力と云ふものがまるでないやうな氣がする。すべてが何かの意志に支配されてゐるやうな氣がする。賞讃も罵詈も自分の心を

動かさなくなつた。自分はたゞ何かに自分を任せきれる時のみ安心してゐる。それから少しでもはなれると自分は不安を感じないわけにはゆかない。しかし自分はやつとその道からはなれることが少なくなつた。そしてよしたまにはなれてもすぐすなほに歸れるやうになつた。私は君を信じる。だから云ふが、宇宙には必ず、一つの意志がある。その意志に背くことの出來るのが人間で、同時にその意志に自覺して身を任せることの出來るのも人間だ。前者はすべてを利害關係で見るが、後者はすべてを正不正で見る。前者は不正であつても得することを望む。それに反して後者は損をしても正しきをとらうとする。賢者はその意志を知つてよし迷ひ出ても、歸る道を知つてゐるが、愚者は迷ひ出て歸る所を知らない。たゞ正しき道によつて立つ時のみ人間は權威を得る。その權威は利害關係からは生れない。五慾からは生れない。五慾はあまりに私的の慾望だ。枝や葉の慾望だ。一人の人が食慾を滿足しても他人はそれが爲に食慾を滿足はされない。性慾も一人の人が性慾を滿してもそれは他人の性慾を滿したことにはならない。それはあまりに一個人にくつつきすぎてゐる慾望で、他の人に反感を起させ易い性質をもつてゐる。五慾は萬人共通でありながら各自にとつて私的である。自分一個を生かす爲に必要なもので、他人の同じ慾望とは反つて衝突しやすい性質をもつてゐる。かゝる慾望からは權威はわかない。それ等の慾望は我等

を不滅にはしてくれない。かゝる慾望にのみ自分を任せるものは死にうちかつことは出來ない。又かゝる慾望を滿すことによつて自分の品位を高めることは出來ない。自分の人相や精神を賤しくする。かゝる人にとつては他人の不幸は氣にならず、互にあざむきあひ、陷し入れあひ憎みあふことは辭さない。かゝる人は平和の民ではない。かゝる人を我々が尊敬出來ず、是認出來ないのは當然である。かゝる人は人間に與へられた貴きものに緣のない人と云ふより仕方がない。いやさう云ふ人は自分の內の貴きものを窒息させた人である。貴きものの生きる餘地を與へなかつた人である。我等はかゝる人の內にも貴き芽のあることを信じ、それの生長することを切にのぞまねばならぬ。かゝることを切にのぞむことはいゝことである。自分はそれをのぞんで來、今ものぞんでゐる。そして今後も永遠にのぞむものである。そして又君にものぞむものである。人間の內の貴きもの正しきものを生かすと云ふことは今の世では殊に困難なことだ、今の社會はそれを要求してゐないし、むしろおそれてゐる。云ふ迄もなくそれがあまり生きると社會の狀態が變化しなければならないから。しかしそれにもかゝはらず我々の心は人間の心が歪にされず、正しく美しく淸く生きてくれることをどんなに望んでゐるだらう。斯る心にふれる時にのみ、我々の心は生きるのだ。其處に萬人共通のものがあり、我々の內に與へられた最も淸いよろこびと、感

謝があらはれる。私は夢で耶蘇と釋迦に逢つたことがある。自分はその時、その前に跪いてありがた涙を出してあなたの爲に働きますと誓つた。その時の感じは恐ろしいもので、本當に死んでもいゝと云ふ氣がした。自分が耶蘇や、釋迦の時代に生きてゐて、彼等の姿をまのあたり見てもそんな氣は起らないかと思ふ。しかし彼等が眞心に燃えて愛をもつて眞理をとくのをまのあたり見或は聞いたら、私は夢の内に味はつたと同じよろこびを味はふだらう。人間にはさう云ふよろこびが與へられてゐるのだ。そしてそのよろこびを我等は眞の想像によつていつでも味はふことが出來るのだ。人類のことを考へて見玉へ。兄弟のことを考へて見玉へ、戀人があるならば戀人のことを考へて見玉へ。そのよろこびを眞に味へる心、それが本當の宗教心で、その心が生きる時に、その人は本當の宗教家だ。百歳になつた老衰した使徒ヨハネは常に目に涙をためて人を見ると、「お互に愛して下さい。お互に愛して下さい」と云つたさうだ。さう云ふ人の心のありがたさがわかる人は宗教心をもつ人だ。實際今の人類の運命を見ると恐ろしい。兄弟よお互に愛して下さい。お互に殺しあはないで下さい。いぢめないで下さい。意地悪をしないで下さい。いたはりあつて下さい。さう云つて歩きたい。このまゝだと今にきつと恐ろしい血なまぐさい事が世界に起りさうだ。兄弟の名によつて相愛しあつて下さい。さうして下さつたら私はお辭儀します。

をどり上つてよろこびます。さう云ふ氣狂ひになりたい位だ。君が生きてゐる間にどんな恐ろしいことが起るか知れない。その時はどんなに淋しくつてもふみとゞまつて、兄弟姉妹の幸福の爲に心から祈つてほしい」

「先生だつてまだお若いぢやありませぬか」

「私も生きてゐれば元より、何か御役に立ちたいと思ふ。その時は君達と一緒に働きたい。しかし私がゐなくなつても、君は立派に働いてくれなければいけない。私のことを思ひ出して」

「先生はまだ中々お死にになつてはいけません。生きていらつしやらないといけません」

「ありがたう。私は生きてはゐるつもりだが、天命が許さなければ仕方がない。しかしまだまだ恐らく死にはしない。しかし私にとつてはどつちでも同じことだ。今死ねば私はむしろ幸福だと思つてゐる」

「なぜです」

「恐ろしいことを見ずに死ねるから」

「先生は重盛のやうな考へをもつていらつしやるのですか」

「私は重盛ではなく、人類は平家ではない。人類はどんなことがあつても、それを生長の糧に

する力をもつてゐる。私はそれを疑がはないが、憐れなのは個人だ。自分の愛する者の死は見たくはない。しかし私はさう云ふ時が必ずくると云ふのではない。たゞ今のまゝで進んでゆけば遠からずにさう云ふ時がくると云ふのだ。又よしさう云ふ時が來ても、私は自殺はしない。さう云ふ時がくれば私はむしろなほ生きて、悲慘なことを喰ひとめようとするだらう。自分をうづにまきこまさずに、殺すな、殺すな、人を殺すな、それはよくないことだ。許してあげよ、許して上げよ、それはいゝことだ。愛しあへ、愛しあへ、それは最もいゝことだ。お互に一方を殺さなければ自分が死ぬと云ふやうなせまつくるしい處に入らずに、何處かで折れあへ、仲なほりしろ、それが出來なければ勝利者よ、まけたる者も同じく愛すべき個人であることを知れ。だが勢ひだ、勢ひだ。勢ひは恐ろしい、其處までゆくと刃から手を引こめた方が殺されることになる。私はその勢ひをおそれる。そして今の世はその勢ひをたきつけてゐる。火花がちり、血の雨が世界を洗禮しつくさない間、その勢ひは消滅しては行かないやうな顏してゐる。何處かでその勢ひの方向を變化させなければと私は思つてゐる。私はこの頃それを常に考へてゐる。だが私の力ではその勢ひの方向をかへることは出來ない。しかし出來ないと云つてすましてはゐられない。私は自分の一生を捧げて恐ろしいものが來ないでしかも正義がこの世を支配する道をこつ〳〵つくりたい。

だが自分にその力があるかないか、それは自分にはわからない。自分の仕事さへ正しければ、助けは何處からか來るものだ。私は君にだけ正直なことを云はう。君は今愛人をもつてゐる。僕の云ふ言葉は君の心をきずつけはしまい」

師はさう云つて少し黙つた。自分は自分のことを云ふのはいやだがその時今の妻と既に許嫁になつてゐた。

師は語りつゞけた。

「正直なことを云ふと私は自分の壽命がさう長くないことを感じてゐる。私は病氣で死ぬか、過失で死ぬか、或は過つて殺されるか、或は本當に殺されるかそれは知らない。私はこの土地を去らうかとも思つた。この土地を去れば自分の命はたすかるかも知れない。自分の命がたすかれば、もつと御役に立つ時がくるかとも思ふ。しかし自分はこゝを去つてはいけないと云ふ答へを、祈りの最中に得た。それは自分にとつては絶對なものだ。何かこゝに自分が居なければならないことがある。私にはそれはわからない。しかしともかく私はこゝを去れと云ふ許しがある迄、私はこゝで平氣に生きてゆく。それは私にとつて一番いゝことだから。たゞ私はあとのことが氣になる。私が生きてゐるよりも私の死ぬべき時に死ぬ方がよりいゝことを私は信じてゐる。だがあ

とのことが氣になる。君達のことが氣になる。こんなことを云つて私はなが生きするかも知れない。だが萬一のことがあつたら、君達は決して私の一生を無意味にしてもらつては困る。即ち復讐は絶對によくない。人間が淺墓な智慧で神が折角成就されたことを破壞するのはよくない。神が折角もくろまれたことがどの位、人間の手で破壞されたらう。それを思ふと私は神の寛大と愛を思はないわけにはゆかない。そして人間のあさはかさと、あつかましさを思ふ。自分達は神がもくろまれたことからそむいてはいけない。どんな時でもあなたの御心の如くならしめ玉へ、と云つてその通りを行はれた方は實際神と一緒にゐる方だ。私はその方にあやかりたい。神の御心を知ることの出來るものは、どうして他のことが出來よう。それは死よりも恐ろしい」

師はさう云つて暫くだまつた。

「私は今日何にもかも君に云つてしまひたい。私は同じことをくり返し、くり返し云ふかも知れない。ともかく私は君に正しい人間になつてもらひたいのだ。この世にかう云ふ人がゐてくれたらどんなに氣丈夫だらう。さう思へる人に君はなつてくれなければ困る。それが私の願ひだ」

「先生、私にはその力がありません」

「力がないと云ふのはやさしい。しかしさう云ふのは卑怯だ。決して君は力のない人間ぢやな

い。よし君自身には力がなくも、君さへ眞心を燃やして生活することが出來れば、力はおのづから加はつてくる。力がないと云ふのは信仰のうすいものの云ふことだ。今の世はどんな世であつても眞心の力は強い。人々の希望にならうと思へば君にはなれる力がある。そしてその人間になれば人々の力は君によつて一つになる。その時もう君はよわい人間ではない。重荷すぎるかも知れない。しかし君はその重荷をさけてはいけない」

「さけはしませんが、僕より他にいくらでも人がゐます」

「それはゐるだらう。しかし他人をたよつて自分の重荷をのがれようとするのはいけない。謙遜も事による。私の信用を辱めてはいけない。君はともかくこの世で出來るだけまちがはない道を歩かなければならない。いくら淋しくも、いくら苦しくも、いくらはたが新しがつても君は動かない人間にならなければいけない。神の道からそむいてはいけない。神の道とは愛の道だ。思ひやりだ。他人の目の塵を氣がつく以上、自分の目の梁に氣をつけることだ。否他人の目の梁を氣にする前に自己の目の塵を氣にすることだ。正しきことの爲には他人が辛抱の出來ないことを辛抱し、他人が氣をゆるす時に氣をゆるめず、神から來たものと、その他のものから來たものとを區別してあやまらないことだ。神は不正の内にはゐない。五慾の内にはゐない。憎みの内には

ゐない。呪ひの内にはゐない。下賤と嫉妬のうちにはゐない。君はすでにそのことを知つてゐるだらう。私は君にたのむ。この世の鹽になつてくれ」

自分は承知する勇氣も反對する勇氣もなかつた。たゞ師の前に跪づきたかつた。そして自分の賤しいことが反省されて穴に入りたい氣がし、顏がほてるのをおぼえた。

「もうそんなことは云はないで下さい」自分はさう云ひたかつたが、さう云ふ勇氣もなかつた。自分は涙ぐんでうつむいてゐた。師はうつむいてゐられた。

「君は自分の缺點を思ひ、又自分の力のないことを思ひ、それ以上に自由と快樂を思ひ切るの未練をもつてゐるのだらう。私は決してそれ等をこばまない。君は何してもいゝ、決して窮屈になつてはいけない。勇氣を失なつたり、歪になつてはいけない。殊に快樂を求めるものに内心うらやましがつて、道をといてはいけない。快樂を卒業する爲には快樂さへ辭さない方がいゝ。他人を不幸にする淋しさと良心の苦悶を味はつても、決して自分を墮落し切つた男と思つてはいけない。何より正直で自然でなければいけない。努力は必要だ。修養も必要だ。しかし内心の要求以上を行つてはいけない。貴い言葉を生かせるだけ生かすのは必要だが、それが借りものではいけない。それが生きてゐなければ、云はないではゐられなくつて云ふのでなければ。其點を殊に

注意して、死んだ貴い言葉や行ひをしてはいけない。殊に人々に貴いものを虚偽と思はせる罪悪を行はないために、死んだ貴い言葉や行ひをさけなければならない。偽善の一番いけないのは善に對する人間の信用をおとすことだ。偽悪は悪趣味だ。しかし偽善はなほ罪悪だ。之からの宗教家はいやが上にも正直でなければならない。精神が内にあふれて、それが自づと言行にならなければならない。内から自由でなければならない。教義にしばられて行きたい處に行けなくつてはいけない。大膽で、自分の信じてゐることを萬人の前に云ひ又行へる人間でなければならない。自分の教義が出來ても、もつと眞理に近づくためには内からそれをこはすだけの力がなければいけない。神の言葉をきいてそれのみを云はねばならない。自分の利害關係に支配されてはならないことは云ふ迄もない。何よりも何よりも自分が確信出來ることを云はねばならない。だが兄弟のことは考へてほしい。社會の不正の根本を見やぶり、それをあらためて人類の運命を狂はさないやうにしてくれ。それは重荷だ。重荷にちがひない。しかしそれを心がけてくれ。私はそれを心がけて來た。私は萬人が私のやうに生きることを望める道を出來るだけ歩いて來た。そして人人の内にある貴きものを目覺せるだけ目覺したく思つた。そして神の意志によつて行はれたるものを人間の淺墓な智慧で歪にしないやうにつとめて來た。私のことは一番君が知つてゐるはずだ。

私の精神は間違つてゐるとは思はない。私の言行には時々まちがつたことがあるかも知れないが、目ざす處に向つて眞直ぐに射られたものであることは君は認めてくれるだらう。惡には善に味をつける役だけをさせればいゝ。惡魔は神の偉大を證明させる爲に宗教心のある人間の發明したものだ。之からは恐ろしい時代が來るかも知れない。來さうな氣がする。自分は可愛いゝ子供を見ると、その未來を思つて何んだか恐ろしい氣がして祈りたくなる。そして幸福をのぞみたい氣がする。そして苦しみに耐へてほしい氣がする。彼等の內に偉大な人間が居てくれることを望む。だが一人の力では勢ひが放たれた以上はどうすることも出來ない。勇士であれ、正しきことの爲には耐へられないことを耐へしのび、人類の狂ひの內にかたき岩になり、狂ひをくひとめ、人間の價値を發揮し、よき人々の希望となり、慰めとなり、よろこびとなる人を自分は讃美したい。少くも君はその一人になれる。又なつてほしく思ふ。さう云ふ人々こそ神の軍に加はつた人だ。負けざる人だ。君は負けざる人になれるのに、負ける人にはなりたくあるまい。僥倖は我等にとつては不名譽だ。眞の幸福者は、負けざるものだ。彼は殺されても負けず、侮辱されても負けず、世間から嫌はれても負けない。無名で終らうが、犬死しようが負けない。彼の心は神と共にゐる。その他のことはあまりに小さい。私はどんな目にあつても幸福者だと思つてほしい。決して私の

ことは心配しないでほしい」

師はさう云つて立ち上つた。

「私の今日云つたことを君は時々思ひ出してくれるだらう。私は天命を知つた。歸るべき時に歸らなければならない。さあ歸らう」

その時日は沈みかけてゐた。

自分は今になつてその言葉を思ひ出す。その度に自分はとり返しのつかないやうな淋しさを感じる。自分は途中で師に別れてからも、變に興奮してゐた。

二八

その夜十時頃だつた。自分が寢ようとしてゐる處に、師と一緒にゐた友と、師に家をかしてゐた友と、かの女がおとづれた。三人とも心配さうな顏をしてゐた。

何事か起つたことを知つた。師の上に何か起つたことを直覺した。

三人が默つてゐるので、

「どうしたのだ」と云つた。

「心配なことがあるのだ。君は今日先生を見なかつたか」
「今日先生と一緒に山にのぼつた」
「何時頃まで一緒だつた」
「六時頃だつたらう」
「それから先生は何處へゆかれた」
「君の家の方に歸られたことと許り思つてゐた。まだ歸られないのか」
「まだ歸られないのだ」
「今に歸られるだらう。心配なことはないだらう」自分はさう云つたが、自分は胸さわぎしてゐた。
「僕もさう思ふのだ。しかし」
かの女があとをついだ。
「妾は心配で、心配で仕方がないので、皆さんと一緒に先生をお探ししようと思つてゐますの。實は、妾の處に七時頃先生がいらつしたの。妾がよくいらつして下さいましたね。とう〳〵いらして下さつたのね。さう云つてお茶を入れにたつて歸つて見ると、もう先生はいらつしやらない

のです、妾はその時は別に氣にしてゐなかつたのですが、先生のいらつしやる處をさがして見てゐる内に段々心配になつて來ましたの。誰も先生を見た人はありませんの。そして襖の閉いた音も、しまつた音も誰も聞いたものはないのです。妾はもうじつとしてはゐられなくなりましたの。それで先生にお逢ひしようと、上つたら、先生はいらつしやらないのですよ。妾はびつくりしました。どうしていゝかわかりませんの」

女は今にも泣きさうな顏した。自分もあわて出した。まさかとは思つた。しかし氣にならないわけにはゆかなかつた。

「すぐさがしませう。先生とおわかれした處がわかつてゐますから、其處から調べて見ませう」

「えゝ、さうして頂戴、妾は今晩、先生にお目にかゝらなければどうしてもねられませんから」

「きつと今に歸つていらつしやいますよ」

「もう歸つていらつしやるかも知れないね」

「それだつたらどんなにうれしいでせう。妾は先生のお顏を見たら泣きますわ」

四人はすぐ家を出た。少し遠廻りだが友達の家によつて見た。まだ歸つてはゐられなかつた。自分達は本當に心配しだした。しかし大丈夫だらうと無理にも思つた。大概の不幸は豫期した處に起らないものだ。友達が自分を呼んだやうな氣がして、あとでその友の上に不安を感じたことは自分も一度は經驗があるが、何んでもなかつた事があつた。しかし段々不安はまして來た。もしもこのことがあつたら、さう思ふと自分はどうしていゝかわからなかつた。

「本當に姿を御らんになつたのですね」

「えゝ、本當にいらつしたと思ひましたの」

「どんな顏していらつしやいました」

「ふだんと別にお變りにならない顏していらつしやいました。しかし一こともおつしやらず、眞面目な顏して少しあはれむやうな、いく分かしづんでいらつしやるやうにも見えましたわ。いつものやうに微笑まれたやうにも思ひますが。妾はその時少しも不思議に思ひませんでした。大丈夫でせうね。妾が先生のことを思つてゐたので、ついそんな姿を見たやうに思つたのかも知れませんわ。かうしてゐる時に、向ふから先生が歩いていらつしたら、どんなにうれしいでせう。誰か來たやうね。しかしあの足音は先生のではありませんわ」

自分達は人に逢ふ度に、くらくつてよくわからないので、一々のぞくやうに見てあるいた。淋しい處へゆくと、あてもなく、

「先生」とよんで見たりした。

大丈夫だらうと思つたが、さう思ふ度に反つて不安がました。皆段々沈默した。

その晩は云ひおとしたが月がよかつた。師の處にゐた友は、夕方師が通らなかつたかと知つてゐさうな人があると聞きたゞした。誰も見なかつたと云つた。自分達が別れてから一二町來た處で、始めて師を見たと云ふ人に出逢つた。その人は師が四つ角で考へてゐられたが、右に曲られたと云ふことを云つた。

その時自分達は希望の光を見た。

それは師が日頃、愛してゐられた若き弟子の家にゆかれたことがわかつたからだ。

「よかつた」

「きつといらつしやるにちがひない」

四人は急いでその方に向つた。しかし自分達は念の爲に、師の姿を見たかときいた。

見たと云ふ人が二三人あつた。自分達は希望を認めた。心配が少しゆるんで其處から希望の星

がかゞやき出すと、反つて自分達は涙ぐんだ。そして足を急いだ。

その友の所にゆくには五六町松原を通らなければならなかつた。其處は殆んど人通りのない處だつた。皆のうちにはその弟子をたづねられたことがわかると同時に、その松原のことを思ひ出さなかつたものはなかつたらう。しかし誰も口には出さなかつた。

その松原を通る時は、皆、默つていそいだ。松原を出るとすぐ友の家だ。自分達は今にも師の聲高の話し聲や、足音が聞えて來はしないかと思つた。又それをのぞんでゐた。しかし曲り角をまがつても師らしい姿は見えず、聲も聞えなかつた。その弟子はいつも、師をその松原のはづれ迄は送ることにきめてゐたから、話し聲が先づ聞えるはずだ。

松原をぬけた時は、皆かけ足のやうだつた。その人の家にとび込んだ。その家からは師の話聲や笑ひ聲はひゞかず、しんとしてゐた。自分達は泣き出したい氣になつた。

案内を請うた。

若き弟子は病氣でねてゐた。師のことを聞いたら、六時過ぎ頃一寸見えて、一時間程いらしたがお歸りになつたと云つた。

「いらつしたのですね」

「えゝ、いらつしやいました」

ともかくその弟子に逢ふことにした。その人は熱があつてねてゐたが、師のことで聞きたいことがあると云ふので、

「ねたまゝでよければ」と云つて逢つてくれた。

其處で自分達は、師がいつものやうに快活に話をされてゐたこと、その人の身體を大事にしてくれと云はれたこと、それから、其處で珍らしく半紙三四枚に字をかゝれたことを知つた。

その一枚には

「先づ身體を大事にし、精神が内に生きられるやうにしないといけない」

とかいてあつた。

次には

「すべてをあなたに任せる。一番いゝやうにお使ひ下さい」

次の紙には

「私の一生をかへり見る。私はあなたにたいして罪人でないとは云へないことを恥ぢる。私は自分を最上に生かす力がなかつたから。いやその力はあつても、私は時に油斷もし、いやしい心

におち込むことを好んでもゐたから。私ははぢる。だが私のまいた種の最上のものはあなたのお氣に入つて、地上の何處かにはえてくれるだらう」

「おゝ人間にあたへられたごく少しの最上のものを愛し、その他のものをゆるしてくれるあなたよ。私はあなたの前に跪づく。私は人間に生れたことで、あなたに十分に酬いることの出來なかつたことをあやまる。許して下さい」

「我が愛する友達よ。私の惡いことは許してくれ、私の神に仕へたことだけを思ひ出してくれ。それは私の爲でなく神の爲だ」

「君達の恩は忘れない。君達がゐなかつたら自分はどんなに淋しかつたらう。君達がこの世にゐてくれたことは不思議な氣がする。それだけなほうれしく感謝する」

そんなことがかいてあつた。

その上、若き弟子は一つの不思議なことを云つた。

「先生は歸られる時、いろ〳〵ありがたう、さう云はれて丁寧に御辭儀をされて、身體を大事にしてくれ玉へ、私達が身體を大事にしないでいゝ時はたつた一つきりない。神の爲に働く時だけだ。身體を大事にするのも神の爲だが。君達が仲よくしていゝことを考へてくれ、私のことを

思つてくれる時はきつと私もその席にゐるよ。さよなら。さう云はれて歸つてゆかれた。最後の言葉が自分は聞きまちがへのやうな氣がしてぼんやり聞いて居ました。私はたゞさよならと云つただけでした」

かう云つた時、師についてゐた友達も云つた。

「さう云へば先生が今日家を出られる時、一ことへんなことをおつしやつた。私はこの頃へんに死にさうな氣がすると。死んでも私は皆の處にゐられる氣もするよ。君は一番私の缺點を知つてゐるだらうが、私が嘘つきでないことも知つてくれるだらう。死ぬと云ふことは非常に恐ろしいことにも思へれば、簡單なことにも思へる。ともかくなが生はしたいとは思つてゐるがね。そしてそとに出られるとまもなく一寸もどられたので、忘れものですかと云つたら、君の顏が見たくなつたのだよと笑つて冗談のやうにおつしやいました」

「さう云へば、僕にも今日へんなことをおつしやつた。出がけに僕の書齋の窓からのぞかれて、一寸行つて來ます。君はこの頃丈夫だね。さうおつしやつて何か云ひたさうに默つていらつしやるので僕は何か云ひにくい御用でもあるのかと思つた。誰かに金でもやりたいと思つていらつしやるのかと思つたので、何か御用ですかと聞いたら、いや、君の顏があんまり丈夫さうになつた

のでうれしいので見とれてゐたのだよ。それから一寸行つて來ますと云つて出かけられた」

「そんな話はよしませうね」かの女は云つた。「それではあんまりお邪魔してお身體にさはるといけませんから歸りませう」

歸らうとした時、病氣の友は一寸自分をよんだ。自分は皆のあとにのこつた。

「なんだ」

「心配なことがあるのだよ。先生が歸られて五分もたゝない内に、たつた一度だつたがね、鐵砲の音のやうなものが聞えたのだよ」

自分はそれを聞いた時、泣き出してしまつた。もう絶望と思つた。

「しかし、時々夜中でも鐵砲の音が聞えることもあるのだから、安心とは思ふがね。先生の居處がわかつたら、すぐ教へてくれ玉へね、僕も心配だから」

「教へるよ、すぐ教へるよ」

自分は皆にあふ迄に泣きやまうと思つた。がついしやくり泣いた。

「どうしたのだ」

自分はだまつてゐた。

「先生がどうかなさつた？」

「いゝえ、はつきりしたことはわからないのです」

自分は一人先にどん〳〵友の家を出た。皆ついて來た。

「どうしたのだ？　どうしたのだ？」

「心配なことがあるのだ。先生がこの森にかゝつた時分、たつた一つださうだが鐵砲の音のやうなものが聞えたさうだよ」

皆、泣き出してしまつた。

「どうしませう。どうしませう」

「どうしよう。もしものことがあつたら」

「森のなかを捜して見よう」

「先生が歸つていらつしやるかも知れない」

「もつとよく調べよう」

てん〴〵に手をわけた。森を先生が出られた姿を見た人があるかないか先づ調べて見ることにした。

二九

しかし手がゝりはなかつた。家にも歸つてゐられなかつた。一番先生と親しくしてゐた人、十四五人に通知された。森のなかも調べた。何の手がゝりもなかつた。

その晩、とう〳〵先生は歸つて來られなかつた。先生はピストルや鐵砲類はもつてゐられなかつた。夜中に鐵砲の音を聞いた人は十人をこしてゐた。その時間は丁度、かの女が先生の姿を見た時と暗合してゐた。二三日たつても師は歸つて來られなかつた。師からたよりもなかつた。その後半年たつ、今になる迄何の消息もない。

人々はもうあることを疑はなかつた。

かの寺院は出來かけて淋しく立つてゐる。

師の机の奥からは死後に讀んでくれと云ふ一通の手紙が出て來た。それには次のやうなことがかゝれてゐた。皆の前でよみ上げられた。

三〇

「私は近い内に死にさうな氣がする、死なないかも知れない。しかし死んだ時の用意としてかいておく。自分はあらためて君達に禮を云ふ。自分はこの世で君達の如き人々に逢へたことをうれしく思ふ。君達の私につくしてくれた御厚意を深く感謝する。自分は君達皆に、一人々々御禮をのべたい。私は又そのことを神にも感謝したい。私のやうな人間がこの世に平和に生きてゆけたのはすべてあなたの御陰だ。あなたの御かげでのみ友達を得たことを感謝しそれを光榮に思ふ。あなたの意志にそむいては一人の知己も得なかつたことを私は一生の誇りにしてゐる。あなたがなくして私はゐない。私はあるかなきかの小さいものにすぎない。その私があなたの意志に從ふ時だけ、私は誰にも負けない、負けざるものになる。私を殺すことは出來る。私を罵詈し、私を迫害することは出來る。しかし私にこの世、少くも人類の精神を支配してゐるあなたのあることを信仰させないことは出來ない。あなたによる時の生活を知るものはあなたをはなれて生きてゆくことの本當の不安を知つてゐる。そしてあなたさへ味方してくれれば何にもおそれることはない。どんな惡名も、どんな迫害も、私を參らすことは出來ても、あなたにたいする私の信仰をなくすわけにはゆかない。そしてあなたの力を感じささないわけにゆかない。私はすべてをあなたに任せる爲に、本當に安心する資格を得る爲にのみ、日に何十度、何百度と反省し、恥ぢ知らず

のことをする時、あなたの前にあやまり、ゆるしを請はないわけにはゆかなかつた。私にとりえがあればたゞそれだけだ。他にとりえがある人はいくらでもあるだらう。だが自分は自分の唯一の取り得を最も幸福な取り得と思つてゐる。私は君達に手紙をかくのも自分が何度も何度も云つたことをはつきりさせ、主の御旨を少しでもはつきりさせたいからだ。自分の一生を自分の神に捧げ、自分の神のおほせのまゝに生きたいのが自分の願ひなのだ。自分の神、その神から先づ語りたい。自分の神はどんな神であるか自分は知らない。それは見ることの出來るものか出來ないものかそれも知らない。少くもこの肉眼では見えない。そしてその神は世界に滿ち滿ちてゐられる。神は一人でゐられるか、何人ゐられるか、恐らく人格的の神と云ふよりも、見えざる神、あらゆるものの内に生る神、人類の内に生き個人と自然の内にも生き、空氣の内にも生き、光のうちにも生き、暗のうちにも生く。精神のうちに生き、美しきもの、清きもの、生々したものの内に生き、正義と善行と、愛のうちに生く。すべて無限の深さあるものに生く。我等はその内から自分の生かせるだけの神を呼吸して生きる。神は外にあり、内にあり、兩者の間にある。神は呼ばずに來、よんでも來ない。心の内の宮居がおのづと清まる時、其處に神があらはれる。本當に無限を感じる時、その感じを與へるものの内にあらはれる。我等は神を感じられる時、其處に神

がある。すべての天才は神を知り、見、感じたものだ。眞の宗教家は神と共に生きるものだ。眞の藝術品には神がある。作者がある奥に神がある。接するものはその前に跪づきたくなる。愛しないではゐられなくなる。宗教家の心は神と共にある。彼の言葉、行ひの奥には神がある。だからありがたい。神は自覺しないものの内にも生きる。赤兒の内にも生きる。人は神が氣がつかないことは出來る。だが神を傷つけることは出來ない。赤兒を殺さうとしてその無心の笑ひに殺せないものは、神を感じたのだ。平氣で殺せたものは神を感じることが出來なかつたものだ。神は今迄に何度も人間を通して生きた。その事實を君達は知つてゐるであらう。物質的ではなくありがたいと云ふ感じを人間にたいして持つことが出來るのは、人間にたいして持つのではなく神にたいして持つのだ。釋迦や耶蘇の心に神が顯はれてゐないと誰が云はう。そんな人間は救はれない人間だ。完全に神をあらはしたものはないであらう。皆自己流に神をあらはした。それは完全に色彩全體を生かしたものがないやうなものだ。神は全體として顯はれるのには神は人間にとつて大きすぎる。たゞ神を自己の内に宿し、神のまゝに自己を生かしたものは神と共にあるもの、その時、神が人になり、人が神になる。その時、權威はわき、その云はれた言葉、行ひ、殊に生きた精神は、不滅のものになり、人類の寶になる。それは人類を清める。宗教に新しい舊いはな

い。しかし人智は時の支配をうけ、その時迄の人類の經驗も、その時における人類の要求、運命の支配をうける。だが宗教をつらぬくものは一つだ。神を愛せ、隣人を愛せ、敵を愛せ、すべての人間を愛せ。自然と萬物を愛せ。愛のあるところに神がある。たゞ人間の靈性をそこなふものは許すな。人の子をそこなふものは許すな。人間は許しても、その心根は許すな。不正なものは不正と云へ。よくないことはよくないと云へ。しかしそれは私情に少しでもけがされてはいけない。そして悔い改めるものにたいしては、神に感謝して、歸れる兄弟としてよろこび迎へよ。無意味に人を不幸にするな。また自惚れて自分に出來ない善事をしようとして神をうらむな。自分の人間と云ふことを知つて神に許された範圍で生きることに滿足せよ。しかしそれを云ひわけにつかふな。すべてを神のみ知る。あさはかな智慧でそれをけがすな。心を淸くせよ。私情や、先入主や、教義によつて神を歪にするな。他人を責める前に自分を顧みよ。他人の位置に時々自分をおき、自分の位置に他人をおき他人の氣持ちを察し、小我をのさばらすな。愛する兄弟よ。すべての人の心の内に入れよ。すべての人の境遇と經驗を思ひやれ。其時、其處に自己を見出し、兄弟よと云つて涙を目にためて抱きあひたくなる程、愛を感じるだらう。病的に殘酷なものと、思ひやりの皆無なもの、それは病人としてあつかへ。かゝるものを人間の自然性とは思ふな。神

の愛は我等の閉ざされきつた心と思ふものも開かぬことはないと信ぜよ。ともかく今後生きることは隨分つらく淋しい時もあらう。だが相愛して生きて、そのつらさや、淋しさを同じく耐へなければならない。人を愛して、出來るだけ勇ましく生きてほしい。正しいものと、善良なものの味方であれ。そして美しきもの、優れたものを讃美せよ。だがあらゆるものに思ひやりを忘れるな。しかしその爲に快活を失なふな。人智にとつては矛盾と思へるあらゆることも神と共にあるものは、最も自然に、最も美しくその矛盾を生かす。喜ぶ時には喜べ、快活な時は快活であれ。泣く時は泣け。耐へる時には耐へよ。自分の最も要求する人間に先づ自分をなせ。他人に要求することを先づ自分に要求せよ。自分にも要求出來ないことを他人に要求するな。自分の要求することで自分に出來ないことを他人がした時には感謝せよ。他人に許り無理な要求するものはつひに救はれない。君達は普通の人と同じでいゝと思つてはいけない。君達は他人が耐へられないことを耐へ、他人が思ひやれないことを思ひやり、他人が愛せないものを愛するのを當然と思ひ、自分の力の足りないことを常に知らなければならない。皆もしないと云ふことは云ひわけにはならない。

私はたのむ、君達は立派な人間になつてほしい。そして神の力、眞理、正義、愛が、今もなほ、

いや、今になつてなほ人心を支配すること強く、それにたよらなければ人間は水をはなれた魚に等しいことを身をもつて知らせてほしい。眞の力は神からのみ出る。神によるものは、あらゆるものを超えて生きる。私はゴルゴタに行くあの人の苦しい姿を思ふ。其處に負けたる人間と、勝ちつゝある神を見る。神の意志はさけられない。神を知るものは、神に自分すべてを任せないわけにはゆかない。神の御心よ。私は御身に一生をまかせる。私の死もおまかせする。どうかお役に立てて下さい。兄弟よ。私の死が君達の一生のお役に立つことを願つてゐる。私が萬一醜い死にざましても許してくれ。それもすべておまかせしてある。安心してゐればいゝのだ。君達を淋しくしないことをのぞむ。私の罪は許してほしい。君達よ。幸福であれ。

いかに犬死するとも、私は幸福だ。神よ。

私には敵がない。

神には敵がない。

すべて神の榮光にたいする油たらしめよ」

後書き

師は果して死なれたのであらうか。恐らくもう望みはないであらう。しかし自分達はますます自分達の内に師の生きてゐられることを感じる。

自分はよく師のことを思ひ出す。自分には神からつかはされた方のやうな氣さへして來た。師の一生は短かい。師は世間的には無名な人としてをはられた。殊に最後は何等の手がゝりさへない。嫉妬で殺されたのか、憎みで殺されたのか、過失で殺されたのか、それもわからない。死骸はどうなつたか。

炭やきのかまどの烟にでもなつたのではないかと云ふ人もある。ともかく死骸の今だに見つからないのは事實だ。

警察にはわざと訴へなかつた。それが師の心と思へたので。すべては神の御心のまゝか。それにしてもあつけない氣がする。しかしその爲今にも師は歸つて來られさうな氣がする。

かうしてゐても師の聲は聞え、姿はうかぶ。師は無名でをはることをのぞまれた。

自分はこの書を公けにしていゝものかわるいものか知らない。又それだけの價値があるかないか知らない。

自分は出來るだけ正直にかいたつもりだが、大事なことをかきおとしたかも知れない。

自分は之をかいたことが師の深き精神を傷つけず、又神の前に罪を犯さないことであることを切にのぞんでゐる。

自分は謙遜の極の氣持でゐる。この書が、人々に慰めを與へ得れば自分は幸だ。もしその價値がなかつたら自分は師と兄弟の前に價なきものとして謝罪する。

〇年五月十二日

片田舍の小さき弟子

後書き

武者小路實篤

「幸福者」は僕が三十四の時にかきかけ、三十五の時に書き上げたものと思ふ。

新しき村を始めた年で、僕がまだ「新しき村」に住まず、高城町の深水桑一と言ふ人の宿屋の川に向つた二階の室で寢起きしてゐる時の夜、ふとかきたくなつて書き出したものが、長くなつて、つい「幸福者」になつたので、始めの内は題もきまらず途中主人公の幸福に就て話す處をかいてから幸福者と云ふ題がきまつたわけだ。

かき出したのは夜中で、ペンも原稿紙もなかつたので半紙に筆でかいた。筆で原稿がかけるやうになつたのは、當時萬年筆をつかはなかつた僕はペン先がわるくなるのを恐れて、手紙はなるべく筆でかくことにしてゐたので、いつのまにか筆で原稿がかけるやうになつて、この時ペンも原稿紙もなかつたが、筆で半紙に原稿をかくことが出來て調法したことを覺えてゐる。

「白樺」に出したものだが、わりに愛讀者が出來、評判にもなつたらしく、幸福者のモデルに就て聞かれたり、教へてもらつたりしたが、勿論、架空の人物で、僕の内に生きてゐる理想的な

人物の一人である。今讀めば幼稚な處や、恥かしい處があるかと思ふが、しかし今の自分にはかう夢中になつてこの材料をかくわけにはゆかないと思ふ。當時は新しき村を始めた許りで、いろいろ興奮してゐたし、又適切にいろ〳〵の問題にふれたので、かう言ふものをかくのに一心になれたわけである。

かう言ふ心がけになれば、本當の意味の幸福者だと思つた人を書かうとした。お弟子がかいたやうにした方が、かきいゝので、一番かきいゝ方法をとつた。

主人公の思想や、感想は、トルストイの影響が相當にあると思ふ。他にもいろ〳〵の人から暗示を與へられてゐると思ふ。しかし要するに自分の考へてゐたことをかいたので、他人の教を紹介したのではない。

たゞつくりものだから事件の發展が型通りの處があるが、眞實をねらつて書いたので、つくりものではないつもりだ。

幸福者の考へ方は僕の考へ方と勿論似てゐるが、全部同じとは言へない。しかし幸福者の師のやうな考へ方をすることが出來れば、人間は安心して感謝して生きてゆけると思ふ、少くも肉體上の苦痛がある程度以上に出ない時は。肉體の苦痛のはげしすぎる瞬間は人間はどうにもならないと思ふが、少しでも耐へ忍ぶことが出來る以上、幸福者の生き方はそれ等の人に何か力を與へ、

又より所を與へ得ることを信じてゐる。

之をかき出して丁度二十年になる。今度改版すると言ふので當時を思ひ出して、かくしるす。

昭和十三年六月二十五日